

【THE TRANSCEND—MEN】
—超越せし者達—

タツマゲドン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

約40億年前、地球で「生物」が誕生し長い年月を掛けて「進化」し始めた

約600万年前、「知識」と「感情」を持つ「人類」が誕生した

人類は更にそれらを磨いた

だが人類には別の「変化」が起こり始めていた

新素粒子「エネリオン」「インフオーミオン」

新物質「ユニバーシウム」

新兵器「トランセンド・マン」

21世紀、これらの発見は人類史に革命を起こし、科学技術を大いに発展させた

「それ」は「見え」ない、「聞こえ」ない、「嗅げ」ない、「味わえ」ない、「触れ」られな
い

しかし確実に「そこ」にあり「感じる」事が出来る

時は「地球暦」0017年、前世紀の第三次世界大戦により人類の総人口は10億人にまで激減しており、「EMO」なる組織が荒廃した世界の実権を握っていた

だがそれに反抗する者達も現れた

「管理」か「自由」か、二つに分かれた人類はまたしても戦いを繰り広げていた
戦争の最中、一人の少年が居た

彼には一切の記憶が無かつた

彼には人類を超える「力」があつたが、人類にある筈の「感情」が無かつた
彼は世界の命運を握っている
しかし誰も知らない

「超越」せよ

三

次

3	2	1	n	C	187	8	7	6	5	4	3	2
:	:	:	i	a		:	:	:	:	:	:	:
D	C	I	n	o		C	I	B	S	A	W	S
o	a	n	f	g		o	n	i	u	l	a	e
u	l	in	an	o		v	v	r	r	y	r	e
b	m	fa	nt	r		e	i	s	o	f	e	p
t				y		r	s	h	u	a	a	i
						g	e	g	u	g	g	g
						e	b	l	u	g	g	g
						R	l	e	u	g	g	g
						e	e	g	u	g	g	g
						c	e	g	u	g	g	g
						o	g	g	g	g	g	g
222	212	200				173	162	150	139	127	114	

P	I	8	267	7	255	6	5	4
a	n	:		:		:	:	:
t	e	x						
i	c	p	C	R	I	M	B	
p	i	l	h	e	n	i	s	
a	c	i	a	c	h	s	s	
t	a	c	g	o	i	i	e	
i	b	a	e	g	b	o	v	
o	n	l		n	i	t		
n	e			i	t	i		
				o	n	o		
				n				
306	293	279					244	233

Gene sis

西暦 19××年

生物とは何か、それは身近にあるが、その起源や正体を知る者は居ないだろう。因みに、それはまさに宇宙との対極にある存在だ、と私は思う。

宇宙は「無限大」に限りなく近い膨大なエネルギーから生まれ、拡散し、限りなく「無」に近づこうとする。一方で生物は少ない物質とエネルギーの下で生まれ、自らは生き続けようと「無」に抗い「有」を保持する。

だがこの説明では生物は宇宙とは対極の存在だとは言えない。生物が行うのは「有」である自己・種族保存であつて、限りない力の増大による「無限大」に近づく訳では無い。「無限大」に近づくと自らを滅ぼすと生物は本能的に知つているからだ。

話は変わるが、現在では深さ1万メートル以上もの深海にある熱水噴出孔が地球の生物誕生における鍵を握っているとされている。熱と圧力によつて有機物が合成され、それが複雑に反応して生物が生まれたという説だ。もう一つあつて宇宙から飛来して来たウイルスが先ほど言つたタンパク質に繋がり、生物が生まれたというのもある。話はまた切り替わる。私も一介の生物学者ではあるが、私にとつては生命の起源なん

て正直どうでも良い。過去なんて知つて何が面白いものか。私が興味のあるのは、即ち未来、これから起ころる事。

この世に起ころる事は何事にも理由があり、理由には目的が伴う。私の興味はその目的だ。

生物が生まれた最終的な目的とは何か、誰も答えを出した事なんてあるまい。因みに宇宙が生まれた最終的な目的とは何か、こちらも分かるまい。その目的を探す事こそが私の仕事だ。

ではどうやつてそれを探しているのか、答えは私の目の前にある。

強化ガラス越しには男が目を瞑つて座つてゐる。被験者は男性、身長175センチメートル、体重67キログラム。この男はつい1か月前まで死刑囚だった。それを私は軍をスポンサーに強化兵士開発という名目でこの男を“所有”した。

強化兵士開発は勿論目的の一つであり、協力者の軍隊の目標でもあるわけだが、私の目的はそんな事では無い。

2週間前から脳の神経や血管を刺激・変質させる常人が飲めば間違ひなく即死の薬剤を与え続け、脳に直接電気信号を与えるケーブルを繋ぎ、マジックミラーと厚さ50センチメートルのコンクリート壁で作られた部屋に閉じ込めている。

今日は試験の為に安定剤を飲ませ、観測と拘束を兼ねるケーブルを繋ぎ、マジックミラーと厚さ50センチメートルのコンクリート壁で作られた部屋に閉じ込めている。

「準備が完了しました。記録開始します」
「よし、起動させろ」

記録開始と報告した研究員に私が指示を送る。研究員は操作パネルにあつた大量のボタンの中から一つだけを、迷わず押しした。

同時に、ガラスの向こうに居る男が目を開け立ち上がる。少なくとも人体制御は出来ているらしい。

「異常は無いか?」

「脳波、磁気、神経反応、血管、いずれも誤差範囲内、肉体的にも精神的にも非常に安定しています」

「では活性化させ、様子を見るぞ」

「了解、中和剤投与します」

研究員は私の命令に従つて慣れた手つきでパネルを操作する。

『グ、ググツ!』

スピーカーに一瞬苦しそうなうめき声が聞こえた。（ガラスや壁は防音構造になつてもいるので音は室内のマイクから聞き取られる）多少心配になつた私はすぐさま観測員に訊いた。

「大丈夫か?」

「一瞬不安定になりましたけど、もう戻りました。恐らく薬剤投与に驚いたのでしょうか」

「成程、やはり生物としての感情を取り除くのは少々無理があるのかも知れん」

男は右手で頭を押さえていたが、やがて無表情で手をどけ、平気そうな様子を見せた。

「これをご覧下さい、活性度は今までの試作中で一番数值が高いです」

【活性度：34倍】

操作者の見るモニターの前に立つた私は、そこに書かれてある内容を見るなり満足した。興奮した私は操作者にまたも命じた。

「凄いじゃないか！ では早速テストしよう。きっと最高傑作が出来るぞ！」

「テスト開始します」

操作者がボタンを押すと、男は後ろにあつた一辺1メートルのコンクリート塊の方へ振り向いた。

グシャツ！ という豪快な破壊音と同時に、コンクリート塊が跡形も無く完全に碎かれ、そこには男が拳を打ち終えた様に腕を伸ばしていた。

「推定エネルギーは84万ジユール以上。次に入りますか？」

「ああ、早くそうしてくれ。良いぞ、予想以上だ！」

私は嬉しくてつい口にしてしまった。

それを余所にまたしてもボタンが押される。

男は歩き始め、やがて立ち止まつた。男の目の前には固定銃座があつた。調整で亞音速から音速の3倍まで、様々な銃弾を撃てる。

「まずは秒速340メートルです」

男と銃座との距離は10メートル。ストレートの野球ボールよりも7倍近く速い銃弾を躱すには、同様にアスリートの7倍以上の動体視力が必要になるだろうし、躱すのにそれ相応のスピードで体を動かさなければならない。

小型拳銃の様な音が鳴る。同時に男の体が横へ大きくスライドした。

後ろの壁を見ると新しい銃痕が出来上がつていた。

「速度、約秒速170メートル」

「何だとつ?!

驚きの余り、私は声を上げていた。秒速170メートルとは音速の半分に迫る速さではないか!

しかし、それ程速く動いたとするなら空気が圧縮された音、即ち衝撃波が起こつても良い筈。だのにスピーカーからは発砲音以外に何も鳴らなかつた。

それに、これ程の速さで動くにはどれ程のエネルギーが必要になるか。

「推定エネルギーは96万ジュール。こんなエネルギーが出せるのならもはやこれは呼吸によるエネルギーとは全く別物になると 思いますね。動体視力もこれは神経伝達物

質が全く別物だと考える他ありません」

「……ああ、ひょっとしたらこれが私の求めていた物かも知れん」

炭水化物や脂質を使わず運動するとすればそれは一体何なのか……もしこれが何か新エネルギーの仕業だとすれば大発見ではないか！

考えられるのは空間、またはその空間にある物。私の専門外だが、宇宙空間にはダークエネルギーと呼ばれている物が存在し、それが宇宙の大部分を占めており、空間そのものと云われている。

もしダークエネルギー即ち空間そのものをエネルギーに変換できるのならば、どれ程の技術革新になる事か。少なくとも人類はエネルギーに困る事はない。それどころか膨大なエネルギーで一体どんな事が出来るだろうか。物質創造、宇宙航法、テレポーテーション、タイムトラベル……：

「ちょっと、博士？」

部下の呼び掛けによつて私は我を取り戻した。遠い夢を馳せるのはまだ早い。今は土台を築き上げ、徐々に鋭く尖らせるのだ。

「ああすまん、次のがまだだつたな。試すぞ」

「分かつていますよ。これ程のエネルギーならもう予想出来る事かも知れませんが」「確認するのに越した事はない」

私も他の研究員も期待に満ちた中、ボタンが再び押された。

もう一度発砲音がした。が、ガラスの向こうの男は何も変化を見せなかつた。よく見れば男の足元には拳銃弾らしき弾頭が転がつていた。

「まさか、弾いたのか?!」

「……としか考えられません。映像を確認します」

モニターに映像が流れる。先程銃弾が発射された際のスロー再生映像だ。

銃弾が一直線でゆっくりと男の右肩に向かう。しかし銃弾は突然何か堅い物体にでも当たつたかの様に跳ね返され、後は重力に従つて落下した。

銃弾はその尖つた先端が凹んでいたが、男の方には傷が全く無く、何かに接触したような赤い痕だけが残つていた。

男は“私達”と同じく“人類”である事に変わりは無い。つまりタンパク質で体が構成されているならば銃弾に体を貫かれる筈だ。だがそれが無いという事はこの男は先程も言つたエネルギーとやらで銃弾を受け止めるという荒技すら可能にしているのかも知れない。

「凄い……全く負傷無し。精神も非常に安定しています」

「間違いない！ これこそ私が求めていた答えを示してくれるに違いない！」

この場に居た研究員達は皆感激していた。私も素晴らしさのあまり飛び上がりそう

になつた。流石にもう50代も半ばなので無理だつたが。

「軍も喜ぶでしようね。強い、速い、堅い、これこそ完璧な兵士ですよ」

「まあ待て、今はまだ実験室段階でしかない。この男を完璧にコントロールするには更なる技術も必要だろう。それに私はここで研究を辞めるつもりはない。まだまだ、私の求めるものが出て来るまでだ」

「ええ、でもこれでも偉大な結果とも言えるでしよう。軍は喜んで更に研究資金を下さる事でしよう」

「この時は誰も予想しなかつた。喜びは突然変わる。

「むつ、何だ？」

突如鳴つた警告音に反射的に反応した私。

「何故かは分かりませんが、急に脳波が不安定になりました。見て下さいこれを、命令を与えてもいないのにこれだけ活性化しています」

画面に映る各数値の急激な上昇に私は目を疑つた。

「鎮静剤だ！ 電気信号も切れ！」

「今やつてます！ しかし数値が一向に下がりません！」

私が苛立ちを込めて命令すると、部下も苛立つた様に返事する。

不意に低く遠くから響く音が鳴つた。同時に部屋の照明が消えた。モニターも黒く

なつて いるのも見ると、恐らくは停電か。

この施設には独自の発電システムが備わっており、通常なら 10 秒以内で電源が復旧する。

だが、20 秒待つても 1 分待つても 照明が灯る事は無かつた。発電機に異常でもあつたのか？

仕方なく机の下にあつた懐中電灯を取り出し、側面のスイッチをスライドさせると、おそるおそるガラスに向けて照らす。

男がこちらを睨んでいた。

「電気はどうした？」

「分かりません。ですが可能性としては……」

『俺だ!!!!!!』

ガラスの向こう側からくぐもつた怒りの声が聞こえた。

「こいつ、まさか電気を操つて……」

『死ね！』

男が叫んだ瞬間、私達と男とを隔てる強化ガラスが粉々に砕け、破片が私達に襲い掛かる。

腕を掲げ目を瞑り、床に伏せ身を守る。伏せる途中で腕に破片が当たり、所々鋭い痛

みを覚えた。

音が無くなり、収まつたと思つて起き上がる。男はまだ同じ位置から動いていなかつた。

「お前は何がしたい？」

「こつちの台詞だ！」

男が更に睨み付ける。

「ギヤツ！」

「ぐあつ！」

後方から炸裂音と同時に部下の悲鳴。再び無音になる。

振り向けば、部下の身体が焦げており、全く動く気配を見せない。操作パネルはショートしているらしく火花を散らしていた。

前に向き直る。

「よくも俺をこんな目に合わせやがつて！」

「……刑務所でしつこく死にたくないと言つていたのはお前の方だ！ やつたんだぞ！ 死なせなかつただけでも感謝しろ！」

「黙れ!!!!!!」

それを助けて

私の反論を無視する様に、男は雄叫びを上げ、私に向かって手を突き出した。

最初は何も感じなかつたが、徐々にそれに気付いた。

体が焼けるように熱い、そう感じて見下ろすと私の服があつという間に燃え広がつていた。

「ぐわあああああ＝＝＝＝＝ 焼けるつ！」

火を消そうと手で払つたり床に身を押し付けたりするが所詮焼け石に水、電気が無いなら火災報知器が反応しないし当然散水されない。既に火の玉のなつた私はただ死を待つだけ。

意識が朦朧とし、床に倒れてしまつた私は、燃える炎の中で確かに警報を聞いた。

『……が実行……自爆まで……』

西暦19×年、某国とのある軍研究施設が全壊する爆発事故が起こった。

爆だと判断した。

事件はその軍内部のみだけ知られ、捜索隊は死者以外何も発見出来ず、爆発原因は自

く一切が秘密のまま破棄された。

西暦2026年 生

【着陸適正地帯を捕捉 着陸態勢に移行 逆噴射開始】

俺達は今宇宙船の内部に居る。減速する時の燃料噴射音と振動が丈夫な宇宙船の壁から伝わってくる。

「いよいよですね」

「ああ、我々はどれ程この瞬間を待ち侘びていた事か」

若いのが船長に対し興奮して言つたのに対し、船長の方は幾らか落ち着いていたがやはり興奮は隠し切れていない。

「どうします？ 着地した時の音声記録に何を言うか今の内に決めますか？」

「いや、それは足を着けたその時の感覚で言う。名言は生もうとして生まれる物では無い」

俺の言つた冗談に、船長はまだ40代前だというのに年配の重みを感じる台詞で返した。

「それはともかく、皆さん「任務」をお忘れなく」

一番奥に座る男が言つた。そうだ、私達は「任務」の為にこの太陽から2億279

0万キロメートルも離れた第4惑星、要するに火星へ来ている訳だ。

〔着陸：残り30秒〕

俺達はどこの国家の宇宙開発機関にも属さない、簡単に言えばある大企業による火星有人探査計画という名目で送られた。

宇宙航法の発展、宇宙移住計画の第一歩、名目は色々あるが、本来の目的はその「任務」を行う為だけにある。

「俺めっちゃワクワクして來たぜ。なあお前、火星がハネムーンだとはこの幸せ者め 同僚の1人が俺を羨ましそうにして言つた。

「フツフツフ、良いだろう？まあメシは飽き飽きする宇宙食しか無いが」

「だから帰つて来て何処かへ行きましょよ、貴方」

「勿論だよ」

返事をしたのは俺の隣に居る女性、俺の妻だ。俺も彼女も学生時代から宇宙飛行士を目指しており、そして地球から発つ際に俺は結婚指輪を渡した。今まさに宇宙船に乗り込もうとしている時、しかもマスクの前でだ。彼女は最初恥ずかしそうにしていたが、やがて嬉し泣きをしながら俺に抱き付き、俺達はどれ程の人数が見ているかも分からぬ前でキスをしてやつたぜ。

宇宙船が大きく揺れた。どうやら過去の思いにふけつていてる間に30秒が経つた

らしい。

【着陸完了】

「皆準備は出来ているな？ 常に警戒を怠るなよ」

【了解！】

宇宙服は既に着てある。俺を含む総勢8人はシートから立ち上ると、宇宙船の奥へ歩きだす。やがて左右に4対の等間隔に並んだロッカーの前に立つた。

【装着開始】

通路を前に壁を背にして立ち、背中にガチャッと質量のある物体が取り付けられたのを感じた。火星の重力下で重さは地球上の40パーセント程になつてるので立つときには負担はそれ程無いが、質量が変化する訳では無いので動くのがろくなる。まあこれは推進剤噴射機だからそれを気にする必要は無いが。

そしてもう1つ、ロボットアームが俺の目の前に伸びてきたかと思うと、それには銃が握られている。軍でも開発されている歩兵携行用の3銃身ガトリングだ。武器としての役割は勿論、低重力下では反動を利用して推進器代わりにする事も可能だ。俺は銃を少々乱雑に受け取り、その銃口を覗き見る。連射武器は子供の頃からのロマンだ。

【行くぞ。ハッチを開く】

宇宙服越しに气体の抜ける音。やがて音は消え、宇宙船側面にある重そうな金属製

のハツチが開いた。

【通信ON】

先頭に立つた船長が飛び降り、足を着けた。それに続いて我々も次々と降り立つ。無音だが、感動は計り知れない。

『……これが人類にとつての大きな一步になるのなら、今までの人類の営みは一体どれ程歩いた事になるのだろうか……長い時だつた。やつと人類は隣の惑星に足を着けた……そしてこの一步からどれだけの道が生まれるのだろうか……』

皆が熱心に口を挟む事なくその言葉を聞いていた。これを伝える電波が地球に届いた時、人類はどんなに嬉しく思うだろう。

「お前、火星に来たぞ。バカンスすら出来ない所を選んですまんな」

『良いのよ貴方、私はすつとここへ行きたかった。貴方だつてそうでしょ？一番愛している人と共に一番の夢が叶つたもの、もう十分すぎるわ』

「ああ、良かつた……次は子供と一緒に行きたいな」

『ふふつ、貴方つたら。私は男の子が欲しいわ』

皆がこの時を望んでいた。俺や妻だつてそうだ。

『お2人とも、ラブラブなのは良いが地球に帰るまでに船員を増やさないでくれよ』
「ねえよ。まあ生めたら生まれたでそれは宇宙人の誕生だがな』

笑い合つて冗談を言う俺達。気を引き締めて前を向き直した。

どうでも良いが、宇宙空間あるいは地球以外の惑星において妊娠した場合、胎児は適応能力によつてその環境に適用しようとする。具体的には重力や宇宙放射線によつて地球上とは違つた形態の赤ん坊が生まれる可能性がある。要するに地球上に帰るまで我慢しろつて訳。

話は戻るが、俺達は大地を蹴りながら一步一歩大きく飛び、「目的地」へ向かう。着陸地点から15分程歩いた所に、「それ」はあつた。

『予め知つてはいたが、こうして目の前にするとやっぱでかいんだな』

『スキャンしました。全長100メートル、全幅60メートル、全高40メートル』

俺達の目の前には巨大な構造物があり、それは明らかに人工物である事が分かる。それは人類が俗に言うスペースシャトルの様な形をしていた。

俺達は、地球から火星上に未知なる動きが観測されそれを調べるべく派遣されたのだ。予想はされていたが、本当に宇宙船だとは驚きだ。

『これは何だろう？ 持つてみたが非常に軽い』

『宇宙船の外壁か？ 何の金属だろう？』

仲間の1人が足元に落ちていた破片を拾い、それを見た俺はちょっとした事を思い付いた。

「皆、撃つぞ」

俺の通信は聞こえたようで、俺以外の皆が俺の前から下がった。

引き金に掛けている人差し指を曲げ、勢い良く連續する振動の様な反動。

指を引いていたのは0・5秒にも満たない時間。その間に吐き出された銃弾は25発。銃弾が壁にぶつかって土の上に落下したが、壁の方は銃弾が当たつて少し凹んだ痕が残っているだけだ。

「驚いた、何で堅さだ。一体どんな物質で出来てるんだ?」

仲間が分析器を当ててくれたが、結果は【不明】と出た。これ以上考えても結果は出ないだろう。

『おーい、こっちに穴が開いてるぞ』

「入れそうか?」

『いや、まだ狭いが、爆弾を使おう』

通信を送ってきた仲間のレーダーが示す位置へ歩く。確かに言う通り、宇宙船の外壁が歪んでいる所に穴があつたが、直径30センチメートル程度しかない。

穴の周囲に仕掛けられた爆弾が爆炎を上げて勢いを周囲に広げた。（爆発する化合物自体に酸素原子が含まれているので爆発には酸素を必要としない）仕掛けた爆薬は敵を殺傷する目的では無いのでそれ程離れなくとも宇宙服が破損する事は無いが、代わり

に宇宙船の外壁らしき破片が多少こちらに向かって飛んで来たが、特に問題は無かつた。（宇宙服は一応「鎧」の役割も備えている）

爆煙が晴れると、穴は直径1.5メートル程に広がっていた。俺達は銃を構えながら警戒を解かず次々と内部へ侵入した。

『何かあつたら報告しろ』

『了解』

2人ずつ4組に分かれ、宇宙船内を調べ始める。俺は妻と一緒に歩く内、驚くべきものはすぐに見つかった。

「すげえなこれ……聞いて驚け、こちらに二足歩行生物らしきものの死体を発見した」

そう、俺の目の前1メートルには我々人間と同じ形をした生物が居た。前足の指が細かい作業に適した細く複雑に曲がる骨格をしており、後足は立ち上がる為に筋肉が発達している。また、体の表面に服らしき纖維物を纏つており、頭以外は全て隠されていた。そして肝心の首から上は……：

『私達にそつくりね。きっと墜落する時にヘルメットが被れなかつたのでしようね。恐らく火星で生れたのではなくどこか遠くから来て運悪く死んでしまつた……』

「ああ、やっぱりどんな星で生れた生物でも高等生物は必ずや同じ形態になるのだろうな。どれ程昔なのだろう？　火星は大気が殆どないからこうして形を保ち続けて

いるのか』

『……ん?』

「な、何だ?」

妻が黙り込んで何か発見した様に言つた。突然だし未知の状況だから軽くビビるのも無理はない。

『さつき何か動かなかつた?』

「……ば、馬鹿言え。そんな都合よく寄生虫みたいな奴が俺達の頭にへばり付く訳じやないんだし……」

『貴方、フラグつて言葉知つてる?』

「分かつたよ……しかし計測機器に熱源反応も電磁気反応も動的反応も示されなかつた……船長、聞こえますかい?」

俺は心細くなり通信で船長を呼んだ。お化け屋敷とかならまだ良い。何せ何が来るか大体想像が付くからな。しかし宇宙空間は違う。人類は未だに太陽系どころか火星の外側へ足を踏み入れていない。(観測衛星とかは別で太陽系外の遙か遠くを飛んでいる物もあるが) 人類が一番恐怖を感じる時は未知に対する想定も付かない事だと俺は思う。

『ああ、今そちらに向かおう。他の2組は少し離れた所で待機してくれ』

やがて船長とそのペアが俺と妻の元へ着き、残る四人も俺達の周囲を警戒する様に見張る。

『聞いてはいたが、随分と我々に似ているな……』

『確かに生体を示す反応はありませんね』

『どうする？ 突いてみるか？』

仲間の、特に荒っぽい奴が銃口で生物の体をつついた。が、特に動きも無かつた。

俺達4人が様子を観察する中、後方の4人は別な話題を話し合っていた。

『これは俺達が発見した物なんだが……』

仲間の1人が手に持っているのは直径15センチメートルの、光を一切反射しない暗黒の球体。

『船の後部、恐らくは動力室らしき場所にあった。これもどんな物質で出来ているかは分からなかつた。それにこれと同じのがその部屋にまだ大量にある』

『ならそれが動力源である事は確かなんじやないのか？ どんな仕組みで動くのかは分からぬが、球状なら圧縮燃料を貯蔵しているんじやないか？ 外壁は非常に丈夫な未知の物質で出来ているから分からないのかも』

『でも変だぞ。燃料を出し入れする開閉部が見当たらぬ。この物質そもそもが燃料の役割を果たしているのかも知れん』

『だつたら……』

通信機越しに行われる議論は結論が出ないらしい。一方で俺達の方も何も分からずにいた。どれだけ調べても生物は動かない。

『もう死んでるとしか言えないぞ。確かに動いたのか?』

『いえ、私の気の所為かも……ごめんなさいね、わざわざ巻き込んでしまつて』

『気にするな。大丈夫だつたみたいだし、調査を続けるぞ』

船長がしゃがみこんだ体勢から立ち上がり、後ろを振り向いた。

船長はふと立ち止まつた。

『待つてくれ、その光つているのは何だ?』

『へ?』

皆が辺りを見回すがそれらしき物は見当たらない。どこにあるんだ?

『違う、お前が持つているその球体だ。光つているじゃないか』

西暦2026年 死

『ひ、光っている？ 私には何も見えませんけど……』

球体を持つている仲間が言う通り、俺からも光っている様には見えない。むしろ光を反射しない輪郭をはつきりとさせない漆黒にしか見えない。

『何と綺麗だ……これは何処から持つて来た？』

『ええと、船のエンジンルーム的な場所に……』

仲間の言葉は途中で遮られた。船長が話をそつちのけで球体を奪い取ったのだ。まるで非常に価値のある物の様に、例えるなら水晶球を割らない様に注意深く手に取つて見ている。

やがて船長は再び後ろを振り向いた。勿論そこには例の生物が横たわっている。

一体どうしたんだ？ コールドスリープを利用した宇宙航法によつて起きているのは離着陸時だけ、長旅で気が狂つた訳ではあるまい。火星独特の放射線が幻覚でも見せているとすればそれこそ全員お終いだ。持病か何かであつたとしても火星に行く前に調べられ、あつた場合はメンバーから除外される。

「船長？ どうしたんですか？ 顔色が変ですよ」

球体を生物の居る隣の床に置いた船長に問う。その顔は何か探し求める様にも見えた。回答は予想外のものだつた。

『……いや待て、お前達何も“見え”ないのか?』

「何がです?」

俺達に見えなくて船長だけ見えるつてのか?まさか幽霊でもあるまいし。幽霊なら船長の取り憑かれた様な行動も理解できるが、船長はこうして俺達とまともに対面しているから違うだろう。

「それで、その球体を持つてどうしたんです?」

『いや……こうしなければならない気がするんだ……誰かに話し掛けられた気がする』

どういう事なんだか、まだ40代前の船長だから歳ボケでも無さそудаし。
ところで床に置かれた球体の方はどうと、

『何だこれ! 光り始めたぞ?!』

『変です。まるでエネルギー反応が感知できない。いずれの計測器も無を示しています』

す

俺達にも見える怪しく青黒い輝きを放っていた。しかもよく見れば転がっていた。
球体はやがて倒れている生物へ辿り着き、衣服の上から間接的に触れた。

その瞬間、

『――!』

頭の中に直接声が聞こえた。その意味は分からぬが、きっとこの生物達が話す言語なのだろう。しかも怒っている様に思えた。

『――!』

『うわあっ!』

船長のペアだつた男が悲鳴を上げると、声はすぐに途絶えた。見ると生物が何時の間にか立ち上がりつており、手は仲間の宇宙服を破り裂いていた。

『撃て撃て撃て――――――――――――』

7か所21銃身、銃弾の嵐が生物に向かつて襲い掛かる。

『――――――!』

今度の声は怒りよりも苦痛に思えた。体には所々赤い血が滴つており、どうやら殺す事は出来るらしい。

『――!』

また違う声。今度は明確な意思を持つている。感情なんかでは無く何かを的確に示す思考。

同時に、俺達は皆生物から放射円状に外側へと吹き飛ばされた。

「いてて……皆無事か?!」

『大丈夫だ』

『何とかな』

6人からそれぞれ返事が聞こえ、俺は取り敢えず安堵のため息をついた。

『何だ今のは?! まるで念力みたいだ!』

俺は何も触れていなかつた。少なくとも俺達は射撃をするために距離を取つた筈だ。

『違う、念力だ!』

船長が断言口調で言い切つた。何故そもそも自信たっぷりに言えるのか。

『何故分かるんです?!』

仲間の一人も俺と同じ事を思つたらしく、船長に尋ねていた。

『私には分かる! 理由は説明出来ないが、確かにそうなのだ!』

まるで意味が分からん。理論派の船長がどうしてこうも根拠無しに言えるのか。

『私が時間を稼ぐ! お前達は早く逃げろ!』

船長は俺達の有無を聞かずに奴の前へ立ちはだかつた。そして掌を奴に向けた。

それとほぼ同時、奴がその身体を後方へ何かに押される様にして吹き飛んだ。

どうなつてるんだ?! まさか船長が超能力者だとでもいうのか?! 俺達の疑問を

余所に船長は手を前に突きだしたまま、奴は身動きが取れていないらしい。

「おい、早く逃げるぞ！」

『でも貴方、船長が……』

「仕方ない事だ、行こう！」

俺の提案に他の5人が従い、慌てながら最初に入ってきた穴へ辿り着くと宇宙船の外へ出た。迷う事なく着陸地点へ向かう。

背中に背負った推進装置をフル活用し、15分で来た道を5分で帰り着いた。

「クソッ！ 地球へ電波が届くのに時間掛かるから独断でやるしかねえ！ てかお前、それ持つて来たのかよ！」

『同じ物が沢山あると言つていただろう。生命反応を示さなかつた死体が動き始めたのだから、少なくとも害のある物ではない事は確かだ。それどころか我々にとつて有益な物かも知れん』

全員が入ったのを確認し、宇宙船のハッチを閉める。そして仲間の1人が俺に例の球体を渡した。

見るからに黒いが、これが死体を蘇らせたなんて見当も付かない。船長が「光つている」と言つていたのも謎だ。

いや待て、船長はあの現象を念力だと断言し、船長自身も明らかに念力を使つた。

超能力に何か関係あるとでもいうのか？

今はそれを考える時ではない。早くこの惨劇を伝えねば。

宇宙船の通信機に手を伸ばした瞬間、突然起こつた。

眩しい閃光、真空中だと言うのに激しい爆音、肌が焼ける感覚……

「……しつかり……貴方、しつかりして！」

妻に呼ばれ我を取り戻してふらつきながらも立ち上がった。どうやら閃光から長い時間が経過したらしい。

「大変なんだ！ 俺達は大丈夫だが、残りの2人が……」

仲間が示した先には床に倒れてピクリとも動かない別の仲間2人。左胸に手を当てたり、瞳孔にライトを当ててみたりしたが、生きている証拠は何一つなかつた。また、人工呼吸や心臓マッサージ、電気ショックまで試してみても全く動かなかつた。

「畜生！ 何て残酷なんだ……」

「どう考へてもあの閃光が原因としか考えられないわ」

「アーメン……」

「あの閃光は例の宇宙船の方角だつた。まさか……」

高倍率双眼鏡によつてその距離の物体を視認する事は可能だ。当然双眼鏡で窓越しに例の宇宙船の方角を見た。

宇宙船は消えていた。それどころか周囲にあつた岩、地面はクレーター状に綺麗に消されていた。

「しかし、何故俺達だけ助かつたんだ？」

死んだ2人だけ、ピンポイントに殺せるなんぞ爆発じやあ出来やしない。そもそも爆風で宇宙船自体壊れてるし。放射線の可能性もあるが、それでも俺達は全滅している筈。

あらゆる可能性を考え、検証してみる。有害物質、熱、ウイルス、音波、電磁波、放

射線、だがどれも無かつた。

「少なくとも俺達は無事だつて事が？ で、これからどうする？ 一応俺達の任務は

あの宇宙船を調べてくる事だが、もう無くなつてしまつては調べようがない」

「もう帰るしかないだろう。まあ収穫がゼロつて訳でも無いし、その球体は特に謎だ」「賛成だ。映像記録も取つたし、何より死んだこいつらを早く供養してやろうぜ。しかし、ごめんな、折角の新婚旅行が……」

「気にしないで良いのよ。私は火星に降り立つただけでも十分嬉しかつたわ。早く準備しましよう」

帰ろう。こんな優しい奴が妻でいてくれて良かつたな。

【コールドスリープ：終了 大気圏突入：あと2時間】
　　プシュー、という解凍音を耳にし、目を開けるがぼんやりとしている。上半身を起こし軽く体を伸ばす。

「……さみい……」

現在の冷凍休眠技術はまだ完璧では無い。起きる時にどうしても体温が低く、仕方なく保温シートに包まる。

「……ファア……」

「……おはよう貴方」

「おう」

　　1人の仲間のあくびと妻の挨拶に、やる気の無かつた俺は無愛想な返事をした。

　　しかしもう1人の仲間がまだ起きてないのか。コールドスリープ解除時間は皆同じな筈なんだけどな。普段なら誰よりも行動が早い奴なんだが、珍しいな。起こしてやるか。

「おーい、起きろお。起きないと弁当にから揚げ入れてやらねえ……」

　　俺はジョークを最後まで言い切る事が出来なかつた。俺の様子に気付いて2人も

傍に寄つて來た。

棺桶サイズの休眠装置、人が出入りする為の上面は開いてなかつた。側面のデジタル文字が「解凍：完了 搭乗者：死亡」と表記していた。

おかしいだろ！ 寝る前はあんなにピンピンしてたつてのに、休眠中に死んだつてのか？ ありえない事だ！ 冷凍・解凍に誤りがあつたのか、休眠中に誤作動があつて解凍されたのか……少なくとも安全の為に地球上で何百回と念入りにテストされ、安全確認されたんだ。

休眠装置に異常がないのなら考えられる事は……

俺はその仲間の死体を良く観察した。透視鏡で中身を調べた。しかし僅かな傷も発見されなかつた。

「後になつて死んだんだから放射線の類なんじやないかしら？」

「確かに一理ある」

が、妻の言う通り放射線だとすれば体の何処かに異常があつても良い筈だ。それでも測定機に掛けてみる、が放射線は無害なレベルだつた。

もしや火星で見たあの爆発が関係しているのか？
しかし、俺達はその答えを思い付く事は出来ず、やがて宇宙船は3人の乗組員と3体の死体を乗せ、地球へ帰還した。

西暦2026年、世界でも有数の某科学技術開発企業が宇宙船を飛ばし、見事有人火星探査計画に成功した。

到着から地球帰還まで起こった出来事はその企業の上層部によつて一般に秘匿され、唯一分かつた情報は、乗組員の内2名が火星で死亡、内3名が地球帰還までに死亡、内3名が帰還後2年後に死亡、計8名の乗組員全員が死亡し火星で起こった出来事を知る当事者は一切居なくなつた。

またその企業はそれから僅か5年で世界中でも圧倒的な経済力を有するにまで

至つた。火星から持ち帰つた成果によるものだと思われているが、真相は不明。

西暦2070年 起

銃の使い方というのはとても簡単だ。銃を正しく持ち、狙いを標的に定め、あとは引き金を引くだけ、たつたこの3つを正しくやるだけで敵が殺せる。実に簡単だ。

兵士として鍛えられた俺なら、小は拳銃、大は対物ライフルまで、歩兵が1人で使用する事を前提に設計された武器ならば大抵の物は扱える。銃に不慣れな民間人であっても正しい持ち方なら9ミリ拳銃でも扱える。狩り用のハイパワー拳銃も撃てば肩が脱臼すると言われるが、それは持ち方が間違っているからだ。

引き金を引く、という点に関しては使用者か銃自体の問題だ。

何度も人を殺して来た身であれば引き金を引く事に迷う事は無い。

また、21世紀も残り30年を切った現在では兵器工場が何らかのごく低確率の要因で欠陥品が出来てしまふ、などという問題は全く無いと言つても過言では無い。（そもそもそんな欠陥ばかりあれば軍需会社にはクレームが殺到する）要するに引き金を引けば100パーセントの確率で銃弾が飛び出る。

だがここでの問題は、狙いを定める事。これは銃弾を目標に命中させるために一番重要な事だ。針だつて急所に突き刺せば一撃で死ぬし、大砲だつて狙いを外してしまえば

全く意味が無い。俺は自慢では無いが視力は両目とも2・0以上はあるし、格闘で培つた動体視力だつて自信ある。別に今日に限つて体調が優れない訳でも無い。要するに、ナルシスト的に言えば、俺には欠陥は無いという訳だが……

ところで、現在直面している“問題”というのが標的だ。軍務に就いてから今まで十数年、俺は米国陸軍兵士として歩兵は勿論、重機関銃、バイク、大砲、装甲車、戦車、あらゆる敵を相手にしてきたが、どんな相手だつて自分の目に捉える事は出来たし、弾を命中させ破壊する事だつて可能だつた。

だが、

『○○大隊被害尊大！ 退却する！』

『こちら○○砲兵隊！ 敵の座標を教えろ！』

『お前ら！ この前線は絶対に……ぐわつ！』

『確認した！ 敵は現在前線を突破し……』

味方の通信機が壊れる音がし、ノイズ音だけが聞こえるのみとなつた。

前方で前線を支える味方の為に400メートル離れた後方で狙撃支援を行うのが俺の役割だが、ライフルのスコープから見えるのは、何も無い方向へ恐怖に駆り立てられながら小銃を乱射する味方達、戦意を喪失し武器を捨てて逃げ惑う味方達、そして倒れてピクリとも動かない味方達の死体の山。

あつ、今味方の1人が何の前触れも無く投げ飛ばされる様に俯せに倒れた。生の気配を感じない背中には何か太い物体に貫かれた、例えるならば雑な木製又は竹製の槍の様な、刺痕があり、恐らく心臓を一瞬で貫かれたのだろう。

近くで若い新兵がナイフを持つてやけくそに振り回している姿が見える。すると、新兵の胴体が突然血と肉を吹き出し、胸に直径1.5センチメートルはあろう大穴が空いた。あのサイズの穴や血や肉の吹き出し加減から見るに、恐らく対物ライフル級の銃弾を受けたのかも知れない。

ところで、俺はこの場に居る味方は皆今日この戦闘に派遣され、現地に着いてからまだ1時間も経っていない。にも関わらず、既に数師団級の戦力は半分にまで削ぎ落とされている。

対処するにもその対策し様が無い。理由は簡単、敵が見えないので。派遣されてから味方の最初の1人が死ぬまで想像すらしなかつた。突然、まるでF1カーにでも正面衝突したかの様な挙動を見せ、その時の衝撃で即死だつたのだ。

何なのかは分からない。だが確実にそこにある。

『狙撃部隊に告ぐ！ 中衛部隊を破られ、そちらに向かっている！』
「マジかよ！」

思わず声を上げていた俺。額が汗でびっしより濡れていた事に今気付く。

100メートル左方向に離れた所にある戦車隊の戦車1台が突如にして爆発炎上し、炎を吹いて裏返しになつた。

あの爆発の仕方だと外側に爆薬を仕掛けたのではなく、内側から爆発が起こつたのか。だが操縦員が爆薬を誤爆させた訳でもあるまいし、燃料タンクを撃ち抜くにしてもよっぽどの威力と精度が必要になる。

その爆炎と爆煙の中に向かつて、近くに居た兵士たちが銃を乱射する。
おかしいのはどの兵士も恐怖に駆られたかの様に怯えながら撃つてゐる、という事だ。

目視した兵士達は20人程、しかし、次の瞬間恐るべき事が起きた。

一瞬、1秒にも満たない時間、その間に20人余りの兵士たちが無音で銃弾を喰らつた様に吹つ飛び、絶命した。

ありえない、何だ今のは?!　何も見えなかつたし、何も聞こえなかつた。

「畜生!　誰が説明してくれ!」

驚き、未知の恐怖に怯えながらも俺は両手に抱えるライフルをフルオートモードにした。スコープから目を離し、状況を把握すべく全体を見渡す。

少し離れた所にあつた自走砲が縦方向に180度倒れていた。更にはエンジン部に大きな凹みが見えた。しかし、あの凹み、まるで漫畫みたいに誰かが殴つたみたいな手

形のある凹みが……

……誰か？ 手形？

倒れた自走砲の傍にストレートを打ち終わつた体勢の人だ。

身長は俺とそう変わらん、180センチメートル前半か。年齢はまだ若い20代の青年だろう。体格は普通、少々痩せても見えるがそれは鍛えられて引き締まつてあるからだろう。服装は別に何の変哲も無い軍服、左手にはアサルトライフルらしき銃を抱えていた。少なくとも見た目は人間だというのを確かだ。

オイオイ、冗談だろ?! まさかコイツ1人が師団数個をあつという間に半滅させたつてのか?!

俺の疑いを嘲笑う様に、この男は俺の視界から姿を消した。

次の瞬間、俺の9時の方向に居た別の兵士が、巨大な鉄球にぶつかつたかの様に軽々と吹っ飛び、後ろにあつた装甲車に衝突した。

突如再びあの男が姿を現した。腰に銃を構え、引き金を引いている最中だつた。

銃口の向いている方向にあつた、先程の兵士がぶつかつて停止した装甲車、そのエンジンルーム外壁に銃弾穴が開いた。それも一瞬という時間で数十個も銃痕がある事に気付いた。

火薬の点火による発光が見えなかつた。

銃声が聞こえなかつた。

男が立つてゐる足元には空薬莢が無かつた。

俺はある男が引き金を引き、装甲車のエンジンを貫くのを見た。だが技術が進んだ現代のどんな銃にですら必ずある（レールガンや隠密行動用の銃等は除く）発射光、発射音、空薬莢が無いとはどういう事なんだ？！

もつと良く見たら奴が引き金を引いた時、体が全く動かなかつた。

これはつまり反動すらも無い、という事になつてしまふ。

これが幽霊だつたらまだいい。何せ“見え”ないし、“聞こえ”ないし、“無い”からだ。でも俺の目の前で起つてゐる。まさか今日から今までの出来事が全部夢だつてのか？

男は地面を踏み込む動作を見せると、その姿が消えた。

後方で何か柔らかい物が破裂する様な音、例えるなら肉をミンチにする音が連續して鳴つた。

嫌な予感がしながら振り向くと、大量の味方の、体の何処かの肉を抉り出された死体が何十もあつた。更に、奥には味方1人の胸を、男の腕が貫いていた。

酷い殺され方に吐き気がし、味方の死体達も男の拳によつて一部を挽肉にされたと理

解した。

「落ち着け……落ち着けてんだよ！」

無意識に起ころる体の震えを自分に言い聞かせ歯を噛みしめて抑える。いつも通り、冷静になつて相手を見極めろ……十数年の経験が俺へ指令を与えていた。

味方の1人が奇声を上げながら突撃し、男に向かつて銃を乱射した。一方で男は何も動じることなく突つ立つている。

「野郎おおおおお!!!!」

マガジン1個分の銃弾が吐き出され終わり、至近距離の男に全弾命中した。

だが、男には血飛沫が飛びどころか一滴の血や掠つた程度の傷すら付いて無かつた。更にはその男が着る服さえ破れ箇所が無かつた。

途轍もない防御力だ。音速の3倍ものライフル弾を30発が全く効かないとは。あの調子では重機関銃も効くかどうか……

「これ意外と痛いんだよな。ザコには俺から天国行きへの切符を渡してやるつてのにしぶてえんだよ！」

無傷の拳銃、余裕な台詞まで吐いた。青年らしく男性にしては高めのトーンで、人を馬鹿にするような、見下すような、まるで自分が王か神であるかのような態度だった。

「うわあああああ＝＝＝＝＝」

味方が怯えながらナイフを取り出して突進する。ナイフを持つ腕は男の胸に伸び
……
ザクツ！

間違いない、鋭い物体が突き刺さる音だ。

しかし、男は何も変わった様子を見せる事なく立っていた。よく見れば、男の胸には
ナイフが突き立てられているが、ナイフは服の上から全く動かず切断どころか切り傷さ
えない。

あのナイフは人体を構成するタンパク質は勿論、純金属や柔らかめの合金でも容易に
斬り裂き、鋼鉄は切断までは行かなくとも傷を付けること程度は可能だ。だがそれすら
無いとはあの男はどれ程堅い皮膚を持っているのか……いや、皮膚ではなくあの
切れなかつた服自体もとんでもない防御力になる……

片や味方の方は、男の手刀が左胸を突き刺していた。

男は嘲笑を浮かべながら手を引き抜き、膝を着いた味方へ唾を吐いた。

「…………」

「何だ？ 聞こえんぞ。」

味方はまだ諦めぬ強い意志を見せるが、相手は余裕の蔑む笑いでそれを吹き飛ばす。

「…………まだだ……」

「これは驚いた。心臓を貫いてなお俺に刃向かうか。だがお前はもう死体も同然なんだよ。だからさつきと死ね」

「…………それはお前もだ！」

「な……」

男が「何だと？」とでも言おうとした次の瞬間、倒れた見方から爆発が起こり、爆風が辺りに広がり爆炎が周囲を包んだ。

「危なっ！」

叫びながら俺は咄嗟に地面に伏せ、衝撃と熱風が服を通して肌に伝わってきた。あの味方、新兵らしくまだ実戦には慣れてなかつたようだが、まさか自爆するとは。手榴弾かC4爆弾か分からんが、少なくとも決断力が必要だ。俺には妻と今年で10歳の息子と今年で6歳になる娘がいるから、俺は生き延びなければ……ともかくあいつの勇気だけは確かだつたな。顔も名前も知らないが、戦闘から帰還した暁には奴にウイスキーでも供えてやろう……無事に返れたらな。

俺は伏せたまま顔を上げる。

爆煙の中に立つ人物が見えてきた……奴だ……まあこうなるだろうとはう薄々分かつっていたが。

奴 자체는 무사らしい가、服は少々焦げており、破れている所もあつた。それに男は顔を顰めてもいた。

戦車さえ吹き飛ばす威力の爆薬でも死なんか……だがあの様子だと痛みを感じない訳でもあるまい。

対人銃弾やグレネードは効かんならば何をすべきか、俺は考える。
手はあるんだ。どんな壁だつて壊す事が出来る筈。

西暦2070年 承

今の所奴は俺を向いていない。気付いていないのか、わざと無視しているのか……だがチャンスはある。

男は既に姿を消し、別の味方を殺しに行つているようだ。
辺りを見回し、死体と瓦礫の中から使えそうな物を探す。

あれ程目に捉えられない移動速度だと動体視力も相當あるだろうから弾速の遅いロケットランチャーや無反動砲の類は使えないだろう。なら至近距離で撃つて自爆か、それともAP（撤甲弾）かHE（炸裂弾）の30ミリライフルで迎え撃つか。

爆薬を使うとすれば爆発は全体に広がるから人1人だけを殺すにはエネルギー効率が悪い。だから粘着爆弾かモンロー効果で指向性を持たせるべきだろう。しかしあのスピードだと直撃しそうにないからやはり周囲に爆散する方が良いか……：

考えながらも俺は運良く装甲車の残骸から無反動砲と30ミリライフルを見つける事が出来た。

予め弾をセットし、他の物資を捜索する。

それらは大して苦労せずすぐに見つかった。近くの兵員輸送トラックに搭載されて

いた。

「おっしゃあーラッキー。しかしこれ使うの久しぶりだな」

俺が喜んだのも無理はない。

全長2メートル、全身がチタン炭素複合鋼で覆われ、人型をしたそれは特殊重装歩兵用のパワードスーツだ。以前俺はゲリラやテロリストを壊滅させる為にこれに乗り込んだ事があつたが、凄かつた。というか俺はこれに憧れて軍隊に入つたんだ。重量が数百キログラムもの物体を持ち上げられるし、アサルトライフル弾は受け付けないし。何よりB級映画ごっこが出来るのも良い所だ……今は奴に集中するか。

迷彩柄の軍服を脱ぎ、体にフィットする疲労軽減機能や体温調節機能付きのスーツを着る。新兵時代から愛用の9ミリ拳銃をアンダースーツの上にホルスターごと付け、ようやく本体を装着した。

この時面倒なのが漫画みたいにスーツが変形してくれる訳じやないから自分で着なくてはならない。まあパワードスーツ変形とか脱着以外必要ない機能だしな。

重量120キログラム（操縦者含まず）、最大出力20000ワット、最大走行速度時速50キロメートル（操縦者重量80キログラムと仮定）、最大稼働時間6時間、標準装備は右腕に3銃身のガトリング砲と左腕にグレネード連射砲、両腕にワイヤーガン1本ずつ、両肩に軽機関銃1丁ずつ、腰にセラミック複合炭素鋼の剣、バッテリーが上がつ

て動けなくなつた時の為にスーツからの緊急離脱装置や備え付けの拳銃とサブマシンガン付き。（標準外装備は言う必要も無いだろう）

歩兵を守り、歩兵の力を最大限引き出せる。見事な設計だ。だが不完全だ。何故なら、全身を覆う訳だから体のどこが痒い時に搔けないからだ。だから宇宙飛行士は俺が一番尊敬する職業である。宇宙空間で体が痒くなつたら真っ先に脱ごうとする俺は間違いなく死ぬつて事。

「とりあえず武器はこれで良しと……」

問題はこれらをどう使うか。まさかこれらの装備を一気にざり押して使つても倒せまい。

今所1番男を倒せる候補は30ミリライフルと至近距離の無反動砲だけ。ガトリングやグレネードはせめてもの護身用だ。

味方達が引き付けている間、まだ時間がある。他には無いのか……

少しして見つけたのは同じく対物ライフルやロケット砲ばかりで全く違う物が出来ない。精々C4や硝安爆薬、手榴弾が良いところだ。その代わり大量にあるので爆薬で囮んだ所へおびき寄せて周囲360度から強力な爆風で押さえつける。下手して見つかつたら爆破する前にこちらがやられるかもれないが……

爆薬を瓦礫の中に仕込みながら考え、爆薬に関してはセット完了だ。俺から5メート

ル前方の開けた場所を中心に半径3メートル以内に等間隔でC4を、そこへ万遍なく硝安を設置した。勿論瓦礫に埋まっているから外側からは気付かれまい。

問題はどうやってその範囲に誘い込むか。奴が俺に気付いてこちらに向かつたとするとあの速さじゃC4のボタンを押す前に殺される。一番良いのは俺がこの爆薬設置範囲内に居る事だが、やつぱ自爆しか無いのかね……

だが俺にはパワードスースがある。かといって大量の爆薬はおろか当たり所が悪ければ対物ライフルにさえ負けてしまう。

俺は偶々近くに落ちてあつたスコップを持ち、地面を掘り始めた。当然爆薬設置内だ。どうでもいいが、どこぞのシユーテイングゲームではスコップで敵を叩き殺すなんて事が出来るそうだが、実際の軍人の俺から言わせてみれば使い方が間違ってる。第一ヘルメット被れば痛くも痒くもない。スコップは穴を掘つてそこに隠れる為にある。大砲の榴弾が爆発して破片を撒き散らすが、伏せて隠れる程度の窪みがあるだけでそれを防げる。手榴弾を投げ込まれれば御陀仏だが。

パワードスースの20000ワットという体感し辛い出力（理論上では1トンもの物体を持ち上げるだけの力を出せる）のお蔭で地面を掘るのが楽々、始めてから2分が経つて既に縦2メートル、横60センチメートル、深さ15センチメートル、これだけ掘る事が出来た。

あと深さ 35 センチメートル掘りライフルとロケットを中心に入れ込み、自分もその中に入り、粗い大きめの瓦礫と土で自分もろとも埋める。（土だけで埋めると隙間が無くなるので身動きが取れない）外側も爆発を自分が受けないようにする為出来るだけ土と瓦礫で囲み、仕舞いには爆薬を“外壁”の 1 番外側へ置いた。戦車の爆発反応装甲と同じく外側が爆発する事によつて内側の自分は助かるつて訳。

土に囲まれ身動きは取れないが、前方は広い範囲が見え、遠くても味方の悲鳴声が聞こえて来たり車両が爆発したりするのが見える。（更にはパワードスースの知覚強化機能によつてはつきりと感知出来る）もつと正確に状況を知る為にライフルのスコープを覗いた。男は丁度踵落として榴弾砲の砲塔を折つていた所だつた。

【対象物距離：520 メートル 目標：設定・捕捉】

バイザーヘルメットの裏側に表示されるメーターライフバー類、その中でも視界左下に映るレーダー、これに着目する。目標を設定して広角カメラだの赤外線センサーだの搭載された観測機器は勿論、ドローンや他の味方の感知情報、果ては観測飛行船・衛星まで、これらを基にその居場所を割り出してくれる優れモノだ。

目標は既に俺達の 1 個師団を壊滅させ、別な味方を殲滅しているらしい。所々レーダーに味方を示す点が見えるが、それは俺と同じく運よく奴に見つからなかつた所為だろう。

【目標：600メートル 地点を北上中 目標移動速度：1200キロメートル 毎時間】

「何だつて?!」

声はあの男の距離では聞こえなかつただろうが、辺りに響く程大音量だつた。大好物のウイスキーを飲んでいる最中だつたら高压洗浄機に負けない位、少々大げさだが勢い良く吐き出していただろう。

俺が驚いたのは「北上中」という単語、ではない。今の所昼3時過ぎ現在では太陽は俺の斜め左後ろに位置している。つまり男は俺から斜め右前へと移動している訳だが、当然俺に近づいている訳では無い。

本題の俺が驚いた事というのは、後半の「時速1200キロメートル」という所だ。何故かというと、まず音の速さが秒速340キロメートル、時速に換えれば1224キロメートル。男はほぼ音速で走る。

【目標距離：現在地点から北西へ1600メートル 目標：停止】

レーダー表示が更新されるまで3秒、それまでに移動した距離はジャスト1キロメートル、およそ秒速340メートル、即ち音速。間違いない。

信じられない光景を目の前にした今では、俺はあつさりと事実を受け入れていた。その代わり、俺は奴を仕留める事に集中する。

スコープで覗いて見たが、幸運にも地形の起伏や建物で隠れて見えない、という事は

なかつた。これまたラッキーだ。かといつて今日がツイているかどうかと問われれば
おれはツイでないと答える。今日見たテレビの星座占いだって最下位だつたし。
そんなどうでもいい事を考へてゐる時、レーダーが奴が丁度動きを止めたのを感じ
た。スコープ越しに見れば奴が笑いながら味方1人に何かを言つてゐるみたいだが、何
も聞こえないし読唇術を覚えてゐる訳でも無いが、恐らく何か馬鹿にしているのか何か
か。

「戦場ではそんな傲慢が命取りになる事を教えてやろう。銃弾もセツトで付けてお得
だ。オペレーターは一切増員いたしません。」

などと冗談を呟きながら俺は迷わずスコープの標点を男の頭に定めた。パワード
スツツ搭載のコンピューターが弾道計算をしてくれるから相手が止まつていればバイ
ザーに表示された標点を合わせて撃つだけ。楽勝だ。

指の手応えが無くなり、重く速い発射音と銃を抱えた体ごと後退する一瞬の圧力。
パワードスツツと周囲を土で固めたお蔭で大した事はなく、体勢を崩さずにスコープ
から男が見える。

およそ1・5秒後、突然だつた。スコープに映る男が急に体をよじらせたかと思う
と、弾道は逸れた。つまり躰された。

まさか銃弾が見えたのか？だがあの反応、少なくともダメージにはなるから避けたに

違いない。

身を捻った男がスコープ越しにこちらを睨んだ。

「あの野郎、まさか俺の位置をはつきりと分かつてやがるな！ 畜生！」

仕方ない、爆薬で一か八か……

『目標一瞬沈黙、攻撃を置み掛けろ！』

『了解！』

味方の通信を自動的に傍受して聞こえたのは反撃の命令。スコープ越しでも男の奥に居る味方達が一斉に各々の武器を向いた。

『対人ライフルは無効だ！ 爆発物か対物ライフルを使え！』

『出来るだけ相手の動きを牽制しろ！』

『相棒の仇だクソッタレ！』

通信機越しだと音量は人体に悪影響が出ないレベルにまで抑えてくれるが、気迫が伝わって来る。ありがとよ、会った事も知りもしない同僚達。

奴はとつくに俺の視線の先から消え、見えないが数々の銃弾や砲弾や爆弾を躰しているのだろう。

『もうすぐ海岸沖20キロメートルからの海軍による支援攻撃に入る。離れながら奴をこの場に押さえ付ける。』

またしても今日はラッキーだ。昨日食った中華のフォーチュンクツキーはやつぱり正しかつたな。

気を取り直して、

味方の放つた手榴弾が男の足元で爆発し、男は爆風で僅かに体勢を崩した。今だ！考える間も無く直感で引き金を引き、結果を見るべくスコープを凝視する。

今度はバランスが崩された中、上半身を後ろに逸らせていた。その後後ろへ1回転し、足が付くと再び攻撃の嵐を搔い潜るべく動き回る。

全く、どうやつたら何の装置も無くて1キロメートル以上離れた俺を正確に認識し、音速の3倍を誇る攻撃すら簡単に避けるのだか。

固いボルトを引く時間が惜しいので、予め弾を込めておいた対物ライフルを1発撃つことに投げ捨て、残りは3本となつてしまつた。

『支援まで5秒……』

味方は既に砲撃誤差範囲外にいるらしく、後退する動きを見せないが、

『4、3……』

男が攻撃に翻弄されて中々移動できないまま、

『2、1、弾着！』

突如スコープに映つたのは閃光。勿論爆発による物だ。それから爆風が巻き上げる

砂煙……

ドドドドドドドドドドドド!!!!!!

閃光から3秒ほど遅れて砲撃が着弾した爆音が1キロメートル離れた俺の耳にも響く。

爆音は1分ほど続き、それで音は止んだ。

『誰か奴を確認してくれ!』

『今確認している! ……うわっ!』

『嘘だろ?! あんなん受けてまだ生きてるつてのか?!』

味方の告げる声が中断し、代わりに人肉が殴られ弾ける音がスピーカーから忠実に再現された。こういう時だけ綺麗な高画質・高音質は必要ない、むしろ逆効果だ。

元々血飛沫とか爆散とかグロいのに慣れている俺はスピーカーの音を意識から外し、バイザーより越しにスコープを、スコープ越しに標的の男を……ズバン!

引き金を引くと次の一瞬で男の体が大きく横にスライドし、手応えを感じなかつた。味方達は依然と弾幕射撃で男を抑えてくれている。それに、男は1発目を放つた時は体を逸らしただけの最低限の動きで銃弾を躱したが、さつきは男は体ごと移動するとい

う無駄の多い動作をした。ならば男には余裕が消えている筈だ。

『あと30秒で空軍から戦闘機によるミサイル支援が入るぞ。』

よつしやあ、これまた頼もしい。何なら戦域核でも出しやがれ。

「俺も、せめて1発は当てたいぜ。」

俺は両手に持った武器を対物ライフルから無反動砲に持ち替えた。ちなみにこちらの残りは3発。

無反動砲は通常のロケット砲とは違つて反動の代わりに強烈な後方爆風を吹き出し、それによつて反動を打ち消している。後方爆風で砂埃が巻き上がって居場所がばれてしまうが、命中精度は良く、現代では1キロメートルも離れた所へ命中させる事も出来る。しかも俺が今使おうとしているのはカウンターマス方式と言つて後方爆風によつて弾と同じ重さの重量物を吹き飛ばす。これによつて後方爆風を減らし砂埃は巻き上がらないから居場所もばれにくいい。

弾は熱源誘導装置も画像誘導装置も付いていないから目視で狙いを定めなければならぬ。

狙いを定めて3連発、共に体が固定される様な圧力。ただ弾速のはこちらからでも目に捉えられる程遅い。大量に発射する訳でもなく、1発1発が特別強力な訳でもないから正直不安だ。

「頼むから、当たつてくれよ……当たれつての……当たらんかつたら飯抜きだぞ！」

などと弾が到達する前途中で独り言を呟くほどに間が空いた。

『あと5秒……』

最初のロケット弾が地面に命中した爆発。だが奴が体勢を崩した様子は見られない。続いてもう1発、今度は男より10メートル程離れた位置に当たつた。見るに特に爆風で怯ませる事も出来なかつたらしい。

最後の1発、これだけでも当たつてくれ……

キーン！

今のは技術的に軽減されたソニックブームの音か。つまり空軍はもう近くに居る訳だ。

『爆撃開始！』

スコープばかり覗いていたので気付かなかつたが、味方の爆撃機が数機男へ接近し、ミサイルやらロケット弾やら機銃弾やらを投下していた。レーダーも味方機体が男の居る座標のすぐ近く、大体あと200メートル地点まで来ていた。

そんな中、俺の放つたロケットは男より数メートル離れた足元へ着弾し、土を巻き上げた。

男が爆風によつて僅かに体が怯むのを視認した。後はやつてくれ。

男の身体は爆発の嵐でこちらから見えなくなつた。

しかし、驚くべき事は突然訪れた。

ピカッ、とスコープの右上方で何かが光つた。原因を確かめるべくスコープを向ける。

「……嘘だろおい?!」

さつきまで俺達の援護をしてくれていた爆撃機が全部爆発四散していた。
まさかあれを撃ち落したとでもいうのか?!

爆撃地点を覆っていた嵐が収まるごと、奴が銃口を上空、爆撃機が撃墜された所に向けていた。

前世期から戦闘機の材料だったチタン合金は現代において炭素纖維を加えたカーボンチタン合金となつており、硬度・軽さ・耐熱性・ステルス性、全てチタン合金を上回つており、30ミリライフル1発では仕留めるのも難しい。

それを奴はあんなアサルトライフルもどきで、しかも数機も撃墜した。銃弾の威力が高いのか、連続して当てる精度が高いのか。いや、両者だな。

そんな事を考えている間、俺はある事に気付いた。
奴がこつちを見ていた。

西暦2070年 転

『目標を確認！ 縛らか損傷を受けている様ですが異常なく動いています！』

『待て、奴の様子がおかしい。どこか変な方向を向いているぞ。』

味方の通信を余所に、奴は余裕の、人を貶す嘲笑を浮かべていた。
しかも俺に向かつて指を指している。それから指を銃の形にし、バン、と撃つような
ジェスチャーを見せた。

『今笑つたぞあいつ！』

『妙な行動を取りますね……』

撃つてみろ、と誘つてているのだろう。

「ふざけやがつて！」

幾らか理性を失つた俺はいきなり対物ライフルの引き金を引いた。

スコープの向こう側の奴は首を曲げて横を向いた。そこにあつた瓦礫には大口径の
銃弾と思われる銃痕、しかも砂煙が出たばかり。俺が撃つたのに違ひあるまい。

次の瞬間、スコープからは男の姿が消えていた。

『目標が目の前から消失！』

少し遅れて味方の通信。

来やがれ。例え俺は死んでもお前を絶対に殺す！

『……はあっちに……』

『……だ……しろ……』

もはや味方の通信も聞こえない程、俺の気分は高揚していた。

銃の向きを変え、男が真正面から恐ろしい速さで足を動かしつつ突進するのが見えた。こんなのは避けるのは余裕だつてか？完全に俺を舐めやがつて！

「待て待て、相手の思うつぼだ……落ち着けよ、最後の2発ぐらい当てるやろうぜ」

スー——ツ、ハア——、……深呼吸し、気を取り直してスコープを覗き直す。

いや、その前に。俺は銃を手放す代わりに右腕を前に突き出した。

ババババババババ!!!!!!

右腕に搭載された3銃身ガトリングが俺の意志に連動して回転を始め、銃弾を秒間50発という驚異的なスピードで吐き出す。

バイザेに映る拡大された映像では、男は大量の銃弾を前に躰す事も防ぐ事もせず、銃弾はそのボディに簡単に弾かれる。

ならもう1丁、今度は左腕も前に出す。

左腕に搭載されたグレネード連射銃が俺の思考を読み取り、毎秒2発のペースで発射される。ガトリングと比べ物にならない程遅い連射速度だが、それを爆発範囲で補つている。

右腕は連續するまるで勢いのある水道みたいに腕が後退するのに対し、左腕は一瞬の間でまるでパンチを受け止める様に強い衝撃によつて後退させられる。

ただし、やはり初速が遅いのが駄目か、男は難無くグレネードを避ける。ならこれでどうだ。

俺の意志に従つて、両肩に格納された2丁の軽機関銃がロボットアームによつて展開し、撃ち続ける。

両肩を押さえ付けられるが、パワードスーツの重量と出力によつて反動はへつちやらだ。

ただし軽機関銃程度の銃弾も男は受け付けず正面から突破される。

【グレネード：残弾無し 軽機関銃：残弾無し ガトリング：残り50発】

左腕と両肩の反動が無くなる。やがてガトリングから発射音が無くなり、モーターの回転音だけが空しく残る。

【ガトリング：残弾無し 残り武装：ソード、ワイヤーガン 目標：正面100メートル停止中】

音速で走れるはずの奴がガトリングの弾が無くなる程時間が掛かる訳ではあるい。
しかも停止中だとは、じやあ俺を舐めてる訳か！

いや、逆だ。向こうは俺を甘く見てる。ならこちらが……

「来いよ。どうした？　ただの人間の俺が怖いってのか？」

俺は寝そべつたままライフルを構えながら左手を前に出し、掌を上に、相手に見える
様に数回ヒラヒラさせた。向こうが100メートル以上の距離から本当に見えていた
ならばの話だが。

【警告：目標：急速接近　目標：前方10メートルで停止】

レーダーが示した通り、俺の10メートル先に男の姿があつた。まさか俺の手に乗つ
かるつてのか？

「おいオツサン」

遠くから、恐らくは俺を呼びかける声。

「なあ、聞こえてんだろ？　決闘しようぜ」

「……ルールは何だ？」

奴を「範囲内」にさえ入れられれば、俺はそれだけで良い。

男は少しの間黙り込み、拳句ニヤツと笑つて口を開いた。

「あんたは俺が戦つた中でも『普通』の奴らの中では相当強い。だからよお、ここは1

「つあんたが決めて良いぜ」

「それは本当か?」

「へつへつへつ、これだからオツサンは頑固なんだ。勿論、俺が嘘を付くような奴に見えるか?俺が不利な条件でも構わん」

見えるとも。お前みたいなヘラヘラ笑う若者はな。

でもルールが決められるのはこちらにとつてでかい。どうやつて誘い出す?……

「なら、殺した方が勝ち、ただしハンデとしてお前は武器を使うな」

「これを使わなければ良いんだな?」

「そうだ。良い銃だな」

「おつ、分かる?」

男は俺の要求をあつさり受け入れ、銃をゴミの様に投げ捨てた。

「しかし妙な銃だ。弾薬や反動はどうなつている?」

「簡単に言えば”俺達”的持つエネルギーを直接銃弾に変換して発射しているから弾薬は必要無いし、銃弾はエネルギーの塊だから反動も無いって訳。まああんたが知つても無意味だがな」

エネルギーを銃弾に変換……一体どんな技術なんだ?

現代の歩兵携行装備にレーザー光線や素粒子ビーム、又は歩兵サイズのレールガンや

らは開発段階にあつても実用化されていない。それは色々原因があるが、一番はエネルギー効率が悪いからだ。だがエネルギーを直接変換するなんて技術、少なくとも聞いた事が無いし、実在するならもつと世間に広まつて世界平和に役立たれても良い筈だ。

「それで、他は無いのか？何ならあなたを殺すのには右腕と両足を折られたつて出来る。だつたらあんたがもつと武器を持つて来ても良いんだぜ」

「いや、これだけだ」

「ほう……」

男の目付きが急に鋭くなつた気がした。

そういうえばこの男こそたつた一人で俺の所属師団を滅ぼした張本人である。こいつに沢山の味方が、それも僅かな時間で殺された。そう考えると俺の意識は怒りと恐怖に占められた。

だが考える力は残つている。

何か企んでいるのか？しかし爆薬は見えない様に置いているからばれてない筈だ。

「で、何時始める？ 決闘は12時丁度村の通りのど真ん中で始めるものだろ？」

「若いのに中々センスあるじゃねえか……じやあこうしよう、今だ！」

我ながらざるい方法で開始の合図を告げ、先手を打つた。つもりだつた。

即座に銃を目の高さまで持つて来て、スコープの中心を男に合わせ、引き金を引く。

だが、男は体を右に傾け、心臓を狙つた銃弾が虚空を貫通した。

「そんな程度か？」

「まだだ！ さつさと来い！」

挑発しながら俺は最後のライフルを抱えた。

当然今までと同じならばこれも避けられるだろう。勿論俺はその事に手を打つておいた。

銃弾を軽い小口径弾にしておいた。勿論口径が小さくなる分銃口に隙間が開いてしまうが、その分はその隙間を埋める補助発射体（銃口から飛び出た後に分離するのでもちやんと高速が得られる）があり、これにより、音速の3倍が音速の5倍にまで跳ね上がる。

今までとは違つて、軽く速い音がパワードスースの音声表示機能によつて高音質で俺の耳に届いた。

反動は今までとは変わらないが、確実に今までとは違うのが俺には分かる。

「ぬおつ?!」

男が咄嗟に腕を掲げ、腕は何かに当たつた様に僅かに後退した。

「へへっ、やつと1発当ててやつたぜ。どんなもんだ」

殺しは無理だつたが、俺はある種の満足感を覚えていた。

しかし、もう1つやるべき仕事が残っている。

一方、目の前の男はと、

「ふざけてんのかてめえ！」

その肢体は無事だが、俺のさつきの呟きの所為か、明らかに怒っていた。強力な能力を持つというのに短気だとはやはり性格は大した事がないらしい。

氣付いた時には、男は俺の目の前60センチメートルに居た。

「これは殺し合いなんだ、よつ！ そんな程度で満足する、なつ！」

男はパワードスーツを装着したままの合計体重200キログラムの俺を、片手で地中から引きずり出して持ち上げ前に放り投げた。

間も無く背中に強い衝撃を感じ、俯せの体勢で停止した。

痛いが、奴はあそこに立つたままだ。後はC4のスイッチを……

リモコンを携えている腰の辺りに手をやろうとした俺だが、途中まで動かしてそこから先が動かない。

見ると、俺の横には既に男が立つており、リモコンに伸ばす俺の手をがつちりと掴んでいた。

「どうやら俺を爆弾で囮み、それで俺を殺すつもりだつたらしいな。だが相手が悪かつたな。ハハハハハ！」

「……お前の言う通りだ。もはや俺の負けだ……」

「やつと認めたか、最初っからオツサンが勝てる訳ねえんだよ。早くくたばれ、このクソで無能でクズで目障りで……」

男は満足そうに俺に暴言を吐き続け、傍らで俺はあるイメージをする。そのイメージをパワードスーツが受け取り、思考通りにパワードスーツが動いてくれる。

小気味良い発射音が2つと、これまた小気味良い反動が両腕に1つずつ。

俺の目は視界に男に向かつて飛んで行く2本のワイヤーを確認した。

直後、右のワイヤーは男の足へ、左のワイヤーは男の首へ、それぞれ巻き付き、俺はそれを確認すると勢い良く引っ張った。

力を入れても動かした感触が全く無い。まさか体重までも変化している訳ではあるまいし。

直後、ワイヤーが千切られたのか引っ張る手応えを失つた俺は腕を空しく空振らせた。

「野郎！」

もはや俺はこいつを殺す事なんかどうでも良い。

俺は考える暇も無く左腕で勢い良く体を起こし、同時に右手で腰の剣を抜く。

「うおおおおお!!!!!!」

奴に一泡吹かせられなければ俺として悔しいだけだ。

雄叫びを上げながら地面を蹴り、右腕を振り出す。

目に映つたのは剣を真横から受け止める男の腕。本当に切れないのか……

そこから先は意識が朦朧として良く分からなかつた。

何故なら、突然頭に強い衝撃を受け、そのまま後方に吹き飛ばされてしまった。

不時着した俺は、次に豪快な破碎音を聞いた。

そして俺の肌は風を、つまり外気に触れたのを覚えた。

ヘルメット部が外れ、目の前に居た男がそれを投げ捨てる。

「お前達」はな、何か武器を持たなければ戦えない、そんなザコなんだよ！」

男から罵声を浴びせられ、男が手を俺に向かつて突き出す。

突然襲い掛かつた激痛に、俺の感覚は一気に鋭さを増した。

男が尖らせた手を突き出し、左肩から先の感覚が無くなつた。

男が俺に向かつて足を振り下ろすと、両足の付け根に圧力を感じすぐに感覚は無くなつた。

意識が回復する代わりに襲い掛けたのは激痛。左腕、右足、左足を千切られた張り裂ける様な痛み。

「うあああああ!!!! ぐつ、ぐわあああああ!!!!」

我慢できず、情けない悲鳴を上げた俺。

俺は今まで軍人として戦場に赴き、あらゆる傷を負つてきた。例えば銃弾など何発も受けた事があるが、俺の気配りが良かつたのか相手が下手だつたのか、どれも致命傷には程遠かつた。

人体の一部を抉り取られるという傷を負つた事のある者など中々居ない筈。
俺の友人に片足を失つた奴が居たが、そいつは敵の爆弾による物だつた。

だが問題の俺は、目の前で手足を無理矢理人力で引きちぎられるという残虐かつショッキングかつクレイジーなやられ方だ。何なら今の俺と同じ状況を全世界の五体満足の奴に味わわせてやりたい。

「殺して欲しいか？」

男が俺の目の前に、千切つた血の滴る俺の腕や足を見せびらかす。

「……まつ、たく、だ……おれ、は……ま、まだ……まだだ！」

最後まで奴を殺せは出来なかつたが、俺は最後まで抵抗してやる。
何もしないまま死ぬか、馬鹿をやつて死ぬか。答えは決まつてる。

俺は慣れた動作で、唯一残つた右手を腰の位置に持つて行き、そこにある硬く重量のある物体を掴む。

腕を前に伸ばし照準を合わせる間も惜しく人差し指を曲げる。

パン！

乾いてあつさりした軽い発砲音。

確認しようにも力が入らず首が曲がらなかつた。

「まだ懲りねえのかよクソ野郎！ さつさと俺に殺されろ！」

ああ、もう俺に出来る事は何も無い。

妻と息子と娘よ、戦場に立つてから覚悟して來た事だが、お前達を残して先に逝つてしまふ俺を許してくれ。

味方の姿は周囲には見当たらぬ。通信機を剥がされて情報が無いが、きつと対策を練るべく一時撤退したのだろうか。こんな時だけは頼りないぜ……

「あんたのその銃も良いことだけは認めてやろう。結構古いタイプ、オーストリア製の9ミリプラスチック拳銃か。カスタムが効いて良いよなそれ。俺は生憎45口径派だがな」

「……あ、た、り……かんつう、する、から、な……」

「まあ俺には傷を付ける事さえ出来んが」

男が勝ち誇ったように言うと、俺の拳銃を手中から奪い取り、俺に銃口を向けた。

「これで死ねるならお前も本望だろう。ほんの少しの時間だつたが、久し振りムカついたぜ。これで清々する」

「……あ、あ……」

俺は目を瞑つた。

「あばよ」

あばよ、皆……

西曆2070年結

死ぬ覚悟は出来ている。だから後は向こうが引き金を引くのを待つだけだ。

だが、拳銃の発砲音は、いつまで経ってもしなかつた。

「……氣の所為か……」

目を開ける気力も無く、男が何か呟いたのが聞こえるだけだ。

「いや、違う！」

何が違うのか、俺には果たして分からぬ。

「……ハメやがつたなてめえ！ どうりで俺を誘つて来た訳だ畜生！」

…ハメやがつたなてめえ！ どうりで俺を誘つて来た訳だ畜生！

その時、突如鳴った轟音、地震、瞼に遮られても分かる閃光
俺は成すがままに飛ばされるだけ。

堅い地面の上を転がされる。

一瞬が数時間にも感じられた。

まだ止まらない。

やがてそれらは収まり、静寂が流れた。

俺は好奇心と義務感に駆られ無意識的に目を開けた。

目の前に居た男は消えていた。

代わりに、少し離れた所に巨大なクレーターが出来上がっていた。

クリエーターの表面は何かに溶かされた様に熱気を帯びているのが見える。

「……きえた、の、か……」

俺の問いに誰も答えてくれない。

俺は仰向けになり、昼下がりの空を見上げた。

太陽と青い空が見えるだけ。

だがそこにある。

聞いた事があるぞ、軍が人工衛星による戦術レーザー砲を開発していたそうだ。

奴の速さでは狙いが定まらないから、俺が引き付けている間に照準し撃つてくれたという訳か。

偶然俺には命中しなかつたのが何たる幸運。やつぱし今日はツイてるな。

「……が……が、ははは、はは、は……は」

俺は勝利の高笑いをしたが、弱々しい声は俺のみに響くだけ。俺の強運もここまでか

な……

やがて、俺の意識は永遠なる漆黒に塗り潰された。

「映像が回復します」

司令部の白いノイズだらけのモニターがパツと切り替わった。

画面に映るのは瓦礫と荒れ果てた住宅地と、中央に大きく存在するクレーター。

「周囲に動的反応はありません。目標は沈黙、いえ、消滅しました」

コンピューターを操作するオペレーターの報告を聞き、中心のデスクに立つ指揮官ら

しい高齢の男性がホツと安堵を着いた。

「ようし、待機命令解除、出動させていた兵員を向かわせ様子を調べさせろ。しかし高速移動体、それも人間程度の大きさの目標には照準が合い難いという衛星レーザー砲の弱点を、あの1人の名前も分からぬ兵士が引き付けてくれたお蔭で何とかなつたものだ……」

「言つておきますが、私は最後まで衛星兵器の使用は反対でしたががな」

反論するのは隣の補佐官らしき30代の男性。

「仕方あるまい。あのままでは更に大量の兵士が殺されていた。それもあるたつた1人の人物の所為で、だ」

「上層部にはどう伝えます？　まさかたつた1人の人間相手に衛星レーザー砲を使用したなどととても言えませんでしよう」

「常識的に考えてはそうだ。だがこの出来事が常識だと思えるか？　データも取つてあるし、それを説明に使えば良い」

「ですが……」

「問題は今まででは無い、『これ』が何なのか、それを突き止めなければならぬ」「はい」

反論しようと口を紡ぎかけた補佐官だが、指揮官に先を越されてしまいようがなかつ

た。

「まあこれでこの一件は終わつたつて事でしようかね……」

突如、何の前触れもなく警報音が鳴つた。

「何事だ?!」

反射的に指揮官が驚いた様に問う。

「……そんな、嘘だ……あ、失礼しましたつ。何と言いますか、その、こちらを……」

「口」もつた様な言い方をしたオペレーターがモニターを示す。

衛星兵器の状態を示すモニターには【撃墜】の文字が大きく示されていた。

「どうなつてる?! あの衛星の位置は他のどの軍にすら知られていないのだぞ!」

指揮官は怒鳴りながら机を叩いた。

「少将、落ち着いてください。もしやさつきの射撃で逆探知され衛星の居場所がばれたのでは……」

「落ち着いていられるものか! 馬鹿を言うな! 射撃から2分半も経たずに場所を特定され撃墜される、いくら何でも早過ぎる!」

「確かに、逆探知してからミサイルで撃ち落としたとすればもっと時間が掛かるでしょうし、砲撃ではそもそも大気圏外射撃は届きませんし……」

結論が出ない所へオペレーターが話に割つて入つた。

「待つて下さい、成層圏観測飛行船から見た地上のさつきの男が消滅した地点の近くです。これをご覧下さい。」

別の衛星からの映像が大画面に流れた。

画面の真ん中には、見知らぬ男がこちらを向いて銃を構えていた。

「何だ奴は？　まさか新手か？！」

「それじやあ衛星兵器はひよつとしてあの男が……」

補佐官が言い終わる前に、画面の中の男は引き金を引いていた。

そして数秒後、画面は突如ブラックアウトした。

「……これで決まりだな」

「……はい……」

「……か、観測飛行船も撃墜された事を確認！」

「そんな事は分かつている」

オペレーターがモニターを慌て見した報告に対し、指揮官が苛立つた声で答えた。

直後、外部から、具体的には出動中の師団からの連絡が入った。

『こちら〇〇師団！　司令部へ報告！　現在突然現れた別のターゲットと交戦中！　人型ですが先程の男と同じく強力な力を持つています！』

「そうか……」

指揮官は諦めた様に呟きながら再び拳を机に叩きつけた。

『小隊長！ あれは！』

『2人居るぞ！』

『いやあそこにも、4人だ！』

『違う、もつと……』

兵士達の声は突如ノイズに変わった。

「何という事だ。あんなのがまだ存在してるだと?!」

周波数が同調した兵士達の通信を聞き、指揮官は恐ろしさに体を震わせた。

『撤退だ！ 撤退しろ！』

『化け物めえ！ 死ねえ！』

『駄目だ！ 追い付かれた！』

「海軍と空軍はどうした！ まだ援護が入らんのか！」
爆発音のBGMの中で肉の裂かれるSEが聞こえると、司令部の人間は皆顔を顰めた。

「それが、海軍と空軍も謎の勢力と交戦中だとの事です。これも恐らくは……」
思わず頭をがっくりと下げた指揮官。

「それで、「奴ら」について何か分かつてている事は？」

代わりに補佐官が尋ねる。

「はい……敵の数は陸軍が戦闘中のが少なくとも8体、海軍が交戦中なのは12体という情報です。空軍は現在地上と海上に分かれそれぞれを援護中。どの「人物」も例外無くやはり強力な力を持つているそうです」

それを聞いた補佐官は怒りそうになるのを堪え、拳を握り締めた。

次の瞬間、

『第一級警告！ 敵の侵略を受けています！』

施設内の警報と共に合成音声が敵襲を知らせた。しかも第一級警告は敵が内部まで侵入してこちらが追い詰められているという事だ。

ガコン！

警告を予兆にしたかの様に、タイミング良く重い無機質の物体が大きく響く音がしたかと思うと、指揮官の丁度真後ろにあつた金属製の扉が大きく凹み、壁から外れ、倒れた。

「ああ、神よ……我々に勝ち目なんて始めから無かつたんだ……」

指揮官はあつさりと現実を容認した。

「本部へ連絡。敵の指揮官を発見。抹殺します。」

「……我々に勝ち目なんて無かつたんだ……」

「……核だ！ 核を要請……」

若い男の声を聞き、指揮官、補佐官、及び司令室内の人物は皆2度と目を覚ます事はなかつた。

西暦2070年某日、フランス国ノルマンディー地方にて米仏連合軍が謎の勢力によつて壊滅され、最終的に戦域核が使用され勢力は壊滅されたものと思われた。

またアジア・中東での発展途上国同士での小規模な戦争が行われていた事も重なり、この事件によつて間接的ではあるが世界中に波乱が呼び起こされ、後の「第三次世界大

戦』が勃発した。

21世紀

西暦2000年。

「貴方達に集まつてもらつたのは他でも無い。人類は、地球は今、様々な危機に直面している。しかし人類は気付いていない。自分達が自らを滅ぼしている事を。だから我々の様な存在が必要なのだ。基礎理論から先端技術まで、分野・国籍を問わずあらゆる専門家を集めたのはその為だ。人類を救うには人類より優れた存在が必要なのだ。今ここに、「世界救済組織」を設立する」

「世界救済組織」は当事者達以外からは一切秘密裏にされ、国際社会の裏で暗躍し始めた。

西暦2045年。

「教授、始めましょう」

「うむ、観測開始だ」

目の前にあるのは巨大で厳重そうなパイプラしき円筒形のものが横たわっており、よく見れば僅かにカーブを描いている。その直径は20メートルにも達するだろう。

「量子加速器稼働開始」

「ゴウン、と低音が辺り一帯に響いた。研究者達は驚きもせず、暫くは待っていた。

「何か変化はないか?」

「今の所はただ加速中の素粒子によるエネルギー反応だけですね。まだこれからでしょう」

「ああ、ちと気が短かつたかもしけんな」

何十分と時間が経つたが、研究者たちは依然として持ち場に着いたまま変化が起ころのを待っていた。

「……来ました！ 例の反応です！」

「おおつ！」

研究者達が一斉にモニターを見る。

「やはり同じです。素粒子が存在するのは観測されている筈なのに、質量・弱い相互作用・電磁気・強い相互作用、どの力も検出されません」

「ではこれに信号パターンエネルギーを与える」

操作盤の前に座る研究者が指示通りにコンピューターを操作する。

今度は待つ必要が無かつた。

「素粒子の存在が消失！ 代わりに熱エネルギーが検出されました！」

「よし、今回はこれで終了だ。皆良くやつたぞ。今日は私の奢りだ」

轟音は止み、研究者達はそれぞれの持ち場から離れた。

「あとは検証を重ねて結果を確かめるだけですね」

「そうだな……それ自体は存在するのに何も「無い」、だがさつきの様に少なくとも熱エネルギーには変化する事は確かめられた。もしこれが他のエネルギーにも変化するのならば、きっと人類に繁栄をもたらしてくれるに違いない」

西暦2050年。

「「エネリオン」が検出されました」

「では測定しろ」

画面を見る科学者やオペレーター達。彼らが見ているのは地表から数十万キロメートルも離れた地中から送られてくる映像だ。

「測定完了。間違いありません、火星で発見された球体と同じ構造をしています」

「やはり地球にも存在したのか」

「しかし非常に微量です。これを集めて精練するにはどれ程手間とエネルギーが必要になる事でしょうね……」

「これが将来人類にとつて膨大な利益を生み出してくれるとは思いもしないな」

西暦2060年。

「テストを行います」

研究者たちが観察するのは周囲をコンクリートと強化ガラスで囲んだ部屋の中に居る1人の男。

その人物は正面にあつた一辺2メートルのコンクリート塊へ歩み寄る。次の瞬間、コンクリート塊は破壊音がすると同時にその半分の体積が粉々に碎けた。

対照的にコンクリートより遙かに軟らかいタンパク質で出来て いる筈の拳には異常が見られなかつた。

次は高速ライフルの様な発砲音がし、それとほぼ同時にその人物の身体が大きく横へスライドした。

男に傷は無かつた。代わりに男の後方にある壁に銃弾がめり込んでいた。

今度は人物の前にレーザーガンらしき装置が現れ、案の定レーザーが発射された。発射口の直線上に居た人物に命中する。

しかし、人体どころかあらゆる物質を切断する筈のレーザーは、男の体に穴を開けるどころか火傷痕さえ作れなかつた。

「攻撃、速度、防御、エネルギー量、知覚処理、全て予想以上です」

もはや「彼ら」に喜びなどなかつた。「目的」の為、結果を出す、それだけ。

西暦2060年、アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市マンハッタン島。突如謎の大爆発が起き、当時ニューヨーク市の人口1200万人に対し実に600万人が死亡した。

何者の仕業かは不明。また核反応による放射線や対消滅によるニウートリノも検出されず、質量のエネルギー転換によるものだと結論付けられた。

西暦2070年。

「以上の結果から「トランセンド・マン」の能力行使におけるエネルギー源は「エネリオン」と判明、また「ユニバーシウム」の構成物質や「エネリオン」を含む全ての素粒子やダークエネルギー、ダークマターは「インフォーミオン」によつて構成されていると考えます」

西暦2100年。

「必要な条件は揃つた。国家に代わつて我々が人類を管理する時が来た。我々が所謂神という存在、いや、我々こそが人間や神を超える存在なのだ。人類を絶対に破滅させてはならない。必ずその時が来るまで。ここに「地球管理組織」を設立する」

「第三次世界大戦」で滅びた諸国家に代わつて「地球管理組織」が人類の統制を行いはじめた。また翌年から西暦を廃止し、「地球暦」を開始した。

Category 0 : Birth 0 : Escape

逃げろ。とにかく走れ。

逃げるにはどのようにすれば良いのか、ただ足を動かして地面を蹴る事しか分からない。

どこへ逃げたら良いのか、出口はおろかここは何処なのかすらも分からない。
何から逃げているのか、後ろを向けば追つて来る奴らが見えるが彼らの事は何も知らない。

どうして逃げているのか、分からぬが、捕まりたくない。ただそれだけ。
逃げなければならない。

壁・床・天井が全て白い廊下を駆け抜ける最中、曲がり角で彼らの仲間の1人に遭遇した。皆同じ服装なので奴らが同じ所属である事は分かる。

黒い上下の防弾・防刃スーツに包まれた兵士、いや、特殊部隊と思われる格好をした人物。顔はバイザーヘルメットに覆われて見えない。銃等の武器は持っているらしいが発砲はして来なかつた。自分を捕える事が目的らしい。

正面から自分に向かつてジャブを放ち続けてストレート、自分は両腕を咄嗟に頭の高さまで持つて行きガードした。

相手が腕を引こうとするよりも速く、相手の腕を左手で掴み、一瞬止まつた所へ右手で側頭部へ拳を打ち付けた。相手は軽く吹つ飛び、倒れると起き上がらなかつた。

今度は追つて来た奴が後ろから自分を羽交い絞めにし、他の仲間が正面から棒状の物体を突き出した。

足を踏み付け自分を拘束する力が抜けたのを感じると、地面に着けた足を軸に体を回転させ相手を回した。バチつと火花の音が聞こえ、更に相手の力が抜けた。棒状の物体はスタンバトンか。

扱いだ人体を投げ捨て、スタンバトンを持つ奴が自分の頭を突き刺す様に出していくのが見える。

バトンを持つ右腕の手首を左手で受け止め、更に来る左フックを正面から腕で掴み取つた。

繰り出される膝蹴りを右肘で受け止め、相手の真つ直ぐな左手首を一気に折り曲げる事で相手が痛がる素振りを見せた。

振り向くと後方から來ていた別の仲間3人が同じくスタンバトンを自分へ突き刺そうとしていた。

……遅い？

自分は慌てる事無く、突き出されるバトンを持つ手を3連続蹴りでその手から弾き落とした。

自分を抑えていた奴の右腕を両手で掴み、後ろへ投げ飛ばす。後方に居た1人に当たつて倒れた。

残り2人が自分を挟む様に位置取る。右方の連続パンチを腕で左右に交互に逸らし、左方の前蹴りを左手で受け止めた。

右方の奴が更にパンチを放ち自分を左方へ追いやる。勝利を確信した右方が自分へストレートを放つた。

咄嗟に左方の受け止めている足を引っ張り、頭を下げる。右方のパンチが左方の顔面へ命中した。

そこを逃さず、自分は右足で右方の膝を蹴り折り、更に左方の頭部へ右足を綺麗に当て吹っ飛んだ。

膝の痛みに負けた右方はひざまずき、自分は後ろへやつた右足を反動と合わせて曲げ戻し、その勢いを合わせて相手の顎へ膝蹴りを決めた。相手は後頭部から壁へ叩きつけられ、動く気配を見せなかつた。

シユバツ！

空を裂く破裂音と同時に自分の肩に何かが突き刺さったのを感じた。針状の物体は血管に刺さつており、直感的に素早く引き抜いた。恐らく捕獲用の麻酔弾だろう。

後方に銃を構えた大量の人影があつた。黒く塗られた金属質の表面は一切表情と人の気配を感じさせない。人型兵士ロボットである事は一目見て分かつた。

素早く移動し廊下の曲がり角を盾に次々と迫り来る弾丸を防ぐ。こちらへ来る前へ逃げ切らなければ……

今度は正面に3体、ロボットが待ち構えていた。次の分岐路はその丁度後ろ。少ない方がずっと良い、そう判断し体を前方へ加速させる。当然向こうは銃を構える。

妙だな……自分がそう思つたのも無理はない。
見える。

銃弾の軌道に合わせて体をスライドさせ捻る。銃弾は体ギリギリを掠めて後方へ飛んで行つた。

横に広くばら撒かれた銃弾に対し体の正面からの表面積を出来る限り小さくしてスライディングする。遂にロボット達の足元へ辿り着いた。

低姿勢の自分を狙つた銃弾に対し体の正面からの表面積を出来る限り小さくしてスライディングする。遂にロボット達の足元へ辿り着いた。

真ん中のロボットの足元へ滑り込みながら蹴りを決めバランスを崩す。

起き上がりながら左方へロー・キックを決め地面へ倒し、右方が銃を向ける。次の瞬間、視界が揺らいだ様に思えた。銃弾が遅く見える。

自分の胸へ刺さろうとしている銃弾を横から手で掴み取り次第捨てた。

自分でやつた事なのに驚いていた。しかし状況を打破する方が先だ。

銃を構えたままのロボットへ突進し、勢いを乗せたブローを腹部へ決め、破碎音が聞こえた。

改めて見ても金属で出来ている筈のロボットのボディは割れ、内部の機関部が覗き見えた。

不意に足を引っ張られる感触。倒れていたロボットが足を掴んだのだろう。

対策すべく掴まれた方とは反対側の足を倒れているロボットへ振り下ろした。潰れる音と同時に火花が散り、そのロボットは動かなくなつた。

続けて正面のロボットが殴り掛かつて来るのを確認し、ストレートを頭を傾けて避け、カウンターへもう一回装甲の破れた部分へ拳を叩き入れる。こちらも火花を散らしてがっくりと倒れた。

最後の1体が後ろから銃を構えていた。引き金が引かれ、針状の麻酔弾が発射される。

迫り来る銃弾に対し体を後ろへ逸らした。倒れ際に銃弾が自分の胸の上を掠めたのを感じた。

後方に倒れながら後ろへ回転し、丁度あつた壁に足を着ける。折り曲げた足を勢い良く伸ばし、突進しながらナツクルをロボットの顔面に決めた。

頭を抉られたロボットが動かなくなるのを確認し、自分が来た道から足音が聞こえて来た。

勝てない、そう思い交差点を曲がり走行を再開する。

廊下の途中で人間やロボットが飛び出して來たが、大半は振り切り、しつこく付いて來たり掴んだりしたのは撃退した。

これなら逃げられるかも……

「お前は逃げられない」

自分の考えを拒否した様な声。自分に掛けられたものだということはすぐに分かった。何故なら声の主は自分の正面に堂々と立っていたから。

自分よりも頭一個分大きい男性が一人、その引き締まっているが大柄な身体は行く手を遮るのに十分過ぎた。横にある筈の通路の隙間が無い様に感じた。

次の瞬間、5メートルもあつた距離が一気にゼロとなり、男は右ボディブローを放つている最中だった。

直感的に腕を腹の所へ持つて行き、どうにか肘付近で受け止めた。しかし、強い！

受け止めるだけでも威力は抑えられず、そのまま後ろに吹き飛ばされ背中から不時着した。

後ろを見れば他の兵士やロボット達が集まっていたが、自分を捕えようとはせず、あの男に一任している様だ。

余程あの男が強いのか……しかし他に手段は無い。

手を着いて反動で素早く起き上がり、次なる攻撃に備えようと身構えた。その時既に男の姿は自分の正面1メートルの距離にあつた。

慌てながらも男の両腕から繰り出される連続撃を躱し、両腕で抑え込んでいる隙に前蹴りを放つた。

しかし、蹴りは男の手によつて阻まれ、掴まれる。勢い良く引かれ、出した足の付け根に強い衝撃を感じた。

自分の腰に手刀を当てた男は、自分がよろめくのを見ると足ごと自分を持ち上げ、真横にあつた硬く白い壁に叩きつけた。

背中に柔らかみも存在しない感触がし、更に前方からパンチの嵐が襲う。

腕を必死に動かして防御を試みるが、それを上回る速さで拳がガードをすり抜け自分

に命中してしまう。

自分からは見えないが、直径2メートルにも及ぶクレータ―が壁に形成されていた。負けてはいられない。

自分を奮い立たせ、今にも自分を殴ろうとしている拳を両手で受け取った。伸びた腕の先にある肩に一発手刀を当て、男が腕を放しながら一瞬後退した。

その隙を逃さず、自分の両手を勢い良く前後に回転させ、威力は無いが多数の拳を浴びせる。男はあらゆる角度から来るそれらを冷静に払い除けてみせる。だが相手が防御しようと後退しているのが分かる。それを知り、一気に攻めに転じようとした。

「確かに強いし、技もある」

相手が何か自分に向かつて喋つて来た。何が言いたいのだ。

「だが……」

男の右腕が今までよりも格段に速く動いた。男の腕が光つた様に見えた気がした。腕をかざして攻撃を防ぐが、男は自分の腕を掴んで離さなかつた。

「お前と俺とでは根本が違う」

男の掌が光り、輝きは自分の身体へ流れ込んだのが見えた。次の瞬間、体が揺さぶられる様な感覚を覚え、力が抜ける。

「アンダーソン、やはり見込み違いか……」

倒れた自分へ何か言う男だったが、次第に何も聞こえなくなつた。瞼も重くなり、視界が塞がれた。後は皮膚に張り付く床の感触……やがてそれも消えた。ただこの世界が嫌なだけなのに……

「支援ありがとうございます」

「いつもサンキューな、ハン」

『ああ、ただし30分程度しか持たないから気を付けろよ。』

茂みの中で通信機とやり取りする声の内、前者はまだ20代前の少女という感じがし、後者は落ち着いた20代後半の雰囲気を漂わせていた。

「はい、分かってます」

「土産はあまり期待しないでくれよ。帰つたら一杯やろうや」

『リョウ、安いフラグは回収されやすいから言わんでくれ』

通信機越しの声は冗談と分かっていながらも不安そうに言つた。それを見かねたので、

「じゃあ二杯ならどうだ？」

『いや、どうだ？　じゃねえよ。数的な問題じゃないぞ』

「リョウさん、任務前だから集中しましようよ」

と冗談を更に効かせようとしたが2人から叩かれる始末だつた。

「ほら、お前の所為でアンジュちゃんにも怒られたじゃないか。」

『知るか！　お前は何で何時も空氣を読まないんだ？』

「どうとかちゃんと付け止めて下さいよ！」

しつこくジョークを繰り返しても打開策にはならず、2人に叩かれる始末。ので今は

集中する事にしようか、と気を引き締めた。

『それじゃあ始めるぞ。30分経つたら攻撃するからそれまで脱出しておけよ』

通信が切れ、2人は腕時計のタイマーを残り30分に設定した。そして2つの影は目の前1キロメートル先にある建物へ向かって走り出した。

1 : R e s c u e

少年を捕えた男は近くの兵士に気絶した少年を預けた。そして歩み寄つて来た中年の男性に報告した。

「中佐、捕えました。ついでに起きない様に薬を打つておきましたよ」

「ご苦労だった。しかし、覚醒したのか？」

「いえ、まだその途中段階に当たる所でしょうね。手応えもそれ程ありませんでしたし。お蔭で被害は少なく済みましたが……ところで制御は効いて無かつたのですか？」

「いや、「チップ」は埋め込み済みだ。それに反抗したのだからまだ調整は必要だろうな」

「それにしても、何故精神があんなに不安定状態を起こし、逃走という行動を取ったのか

……

「……うむ、記憶は無い筈だというのに不思議な事だ」

中佐と呼ばれた人物、その額に一滴の冷汗が流れていた事は誰も気づかなかつた。

廊下を駆ける一つの姿。

その姿に監視カメラのレンズが向けられるが、別に気にする事ではない。少なくともあと20分は。

仲間の一人が遠隔でこの施設内のシステムコンピューターを操作し、例えば監視カメラが姿を写しても映像記録には残らないし、その他監視・警報システムを切つてもらっている。

それでも“彼女”は気を緩めない。少しでも役に立ちたい。彼女、この施設に忍び込む前に仲間からアンジュと呼ばれた少女、の思考は緊張と願望で埋められていた。

彼女の任務の一つは“可能な限り”この施設が持つ機密を盗み集める事。外側からハッキングしてくれる仲間が言うには外部から侵入出来ない独自の回線や紙媒体によ

る機密は調べられないとの事らしい。

“可能な限り”とは、この施設を一斉攻撃する予定であるからで、遠隔操作が解除されて侵入がばれると思われる時間までがこの任務の終了時間であり、攻撃開始時間でもある。

また、同時に攻撃し易くする為にもこの施設内に爆薬を設置するという任務もある。というか本命はこちらだ。

(流石ハンさんですね。お蔭で任務が捲りそうです)

監視システムがダウンしているとはいっても、内部の人員等に見つかれば意味が無い。一応走つても足音が出来るだけ抑えられる靴を履き、服装も動作によって生じる音を最小限に留められる特殊なものではあるが、透明でも光学迷彩でもないので視認されるリスクが一番大きい。

それでも彼女は運良く誰かに遭遇する事は無かつた。というか

誰も見当たらないので寧ろ不審に思つた程だ。

(どうして誰も居ないんだろう？ 少しぐらいそこら辺を歩いている人が居てもいいのに……)

そう考える中、彼女は数々のドアを出入りし（鍵が掛かっているものは解除ツールを使用した）、それっぽい情報媒体をかき集める。しかし一見パツとしないものばかりで

重要機密と思われる物は無かつた。当然爆薬の設置も忘れない。

（今の所爆弾は順調ね。良い情報が手に入ればもつと良いんだけど……）

「お前に与える物は此処には無い」

自分の考えに対して回答がなされた。声のしたのは後ろ、慌てて振り向き、姿を確認しながら後ろへ飛び退いた。

身長185センチメートル前後、横に広がる長めの茶髪と青い目、恐らく金属複合カーボン製のプレートアーマーを全身に纏い、存在感を見せつけるかの如く堂々と立っていた。

「存在を隠し切れていた。まだ若く経験が足りない。何より、俺より出来が悪い事だ」

（そんな、いつも注意していたのに……）

腕時計は爆破まで残り5分である事を示していた。戦う以外に手段は無いと判断し、構える。

「大人しくするつもりは無いらしいな。良いだろう」

（こうなつたら……）

少女は決心して素早くベルトに仕込んでいた通信機を取り、早口で言つた。

「リョウさん、ばれました！ 爆破します！」

『ちよつ、おまつ……』

通信機越しの仲間が返事し終える前に彼女は爆弾に繋がるリモコンのボタンを押し終えていた。

「なぬ……」

突如施設内を振動と轟音が襲い、廊下の奥から爆炎が見えた。

男は咄嗟に身を守るべく姿勢を低くし腕を胸の前で交差した。爆風で体が僅かに揺れ動き、爆炎がチリチリと熱を伝え、残った粉塵が視界を塞いだ。

防御体勢を解き、塵に視界を奪われている中、男は見回していた。まるでそこにある物が見えているかの様に。

「……自爆と見せ掛け、「障壁」を自分の外側へ広く展開し、爆発に巻き込まれず逃走……

不意を突かれたとはいえ考えも「能力」も中々だ。いや、突発的なアイデアだろうか

男が感心して呟く最中で施設内は侵入者の存在を告げる警報が鳴っていた。

『もうバレちまつたのか?! やべえな……』

「ごめんなさい、不注意でした……」

耳に当てた通信機から聞こえる驚き声に少女は謝った。

『今は気にすんな。でも爆弾は仕掛け終えたんだろう? じゃあ予定より少し早く脱出す
りや良い』

「はい、ありがとうございます」

『そういやハンには言つておいたか?』

「あ、しまつた」

『オッケー、俺が伝えるぜ。その代わり後でコーヒーでも奢ってくれよ』

少女は二度も感謝し、通信が切れると駆け始めた。もうドジはこりごりだつた。
途中で施設内の人員やロボットに遭遇したが、彼女の前には無意味に等しかつた。銃
弾は効かず、目に捉えられないスピードで走り、邪魔であれば軽々と吹き飛ばされる。

先程彼女の気配を察知した男やそれと「同じ」奴に遭遇しない限り、順調に進んで方達がこの施設を思い切り攻撃出来る筈だ。いや、進めなければならぬ。少女は使命感に囚われていた。

『アンジュリーナ、話は聞いたよ。予定より5分早める、それで大丈夫かい?』
「大丈夫です！　ハンさんありがとうございます。』

仲間からの通信に合わせ、腕時計のタイマーを5分早めた。

実質妨害者は居ないし、出口への行き方もきちんと分かっている。しかし、彼女は足を止めた。

彼女は目的を達成しなければならない時、もしもその行為によつて人命が失われるなら、彼女は間違いなく命を助ける行動を選択する。

今まさに、目の前に名も知らず氣絶している少年が横たわっている、それだけで彼女の疾走を止めるには十分だった。

「大丈夫?!」

傍に寄り、生きている事を確認する。心拍はあつたが、触つても体が冷たいし、反応もなくだらりとしていた。

(助けなきや!)

彼の正体なんて関係ない、困っている人を助ける事に理由なんて要らない、かつて教

わった事が彼女へと無意識に命令を下していた。

少女より少しだけ高い程度の身長の少年をおぶり、全速力で走る。

腕時計は残り20秒を示していた。しかし今のペースでは良い方に見積もつても出口へ到達するまで30秒掛かるだろう。

『アンジュちゃん大丈夫か?!』

「今、あとちよつと……」

心配して仲間から通信が掛かつて来た。どうやら向こうは既に脱出完了らしい。今は自分をちゃんと付けられた事に黙つていた。

(早く……速く……!)

その時だつた。

ガクン、と体が急に動いた。自分の意志ではない事は明らかだつた。

背中越しで見えないが、少年の身体が一瞬光つた様に見えた。彼が力を与えてくれたのだろうか？

自分でも驚くべきスピードを得た少女はそのまま施設の出口を飛び出し、大地を駆ける。腕時計は丁度残り0秒だつた。

「撃つて下さい！」

通信機に叫び、言い終わつたのとほぼ同時、少女の正面に見える山々からオレンジ色

の微弱なフラッシュが大量に見えた。

少女は走る事を止めず、後方の施設から爆発が起きても振り返らなかつた。助ける、その一心のみ。

「本当にすみません！」

「そう気に掛けなくて良いよ、結果的に攻撃は成功して壊滅状態を持つて行くことが出来た。君の設置した爆弾もあつての事だ。それに中々重要な機密も持つて来たみたいだし」

背中まである黒髪を揺らしながら頭を下げる少女と、それに合わせて首を横に振つているのは坊主頭を少し伸ばした程度の短髪の男性。

黒髪の少女の名はアンジユリーナ・フジタ、17歳。肌は白く、顔は目鼻立ちが北欧系に近いが日系要素もあってか平均的な白人よりは鼻が低いし目つきも柔らかいだろう。黒目と黒髪は見方や光の当たり方次第では濃い灰色にも見える。身長は160センチメートル前半。日本人女性としては至つて普通の身長だが、白人としては低いと言わざるを得ない。

彼女は「敵」の研究施設へ侵入した事をばらしてしまつた事（彼女の考へでは）を悔やんでいたのだ。だが目の前の男性はそれを許すと言つてはいる。が彼女はまだ自分が悪いと思い込んでいる。

男性の方の名前はハン・ヤンティ、26歳。中国人と韓国人のハーフでいかにも東アジア人という顔立ちだ。身長175センチメートルは東アジアでも割りと高めではある。短髪の印象でそれらしく武術が出来そうな雰囲気も醸し出している。

「落ち着いてアンジユリーナ、でも彼は無事なんだろう？」それは紛れも無く君が助けていたと思つてしまつた行動であり、彼を助ける事が出来た。君が望んでやつた事が君の「人を助けたい」と言う願いを叶えたんだよ

「ハンもそう言つてるし、いい加減立ち直れよアンジユちゃん」

と横から別の声が介入して来たのは不意だった。アンジュリーナは反射的に振り返り、

「もう、何時になつたらちやん付け止めるんですか」

「死ぬまで、いいや死んでも言う。だつてかわいいやん」

声の主はリョウ・フロイト・エドワーズ、28歳。赤系統に近い茶目茶髪が目立ち、茶髪は肩に掛かる程長い。日系の名前が入つてはいたが、子供扱いされるのが何となく気に食わなかつたのだ。（かといつて子供らしい行為をするのもどうかと思うが）

「すまんすまん……でアンジュちゃんが連れて來た奴だが、見に行くか？ ハンも、来て

くれよ」

アンジュリーナはわざと頬を膨らませるという子供じみた行動を見せた。彼女はアンジュという愛称を気に入つてはいたが、子供扱いされるのが何となく気に食わなかつたのだ。

（かといつて

リョウに連れられ、2人は簡素な布のドームで覆われたテントの内部へ入つた。

ところで彼らが今居るのは独立行動用師団が仮設した移動基地である。彼らは「本部」の直接の命令は受けず、殆どの場合その師団長の命令によつて行動する特殊師団

だつた。

数時間前に行われた研究施設強襲もこの師団長独断の作戦だ。そして反撃されぬようひつそりと去る。

話は戻る。3人はアンジユリーナがその施設内で助けたという少年が横たわる粗末なベッドの前まで来ていた。

青がかつた黒い髪、表情どころか動作すら垣間見せない顔。見ただけではまるで生きているのかすら分からない。皮膚に触れても最小限の熱しか感じず、脈はあれど2秒に1回という非常に遅いペースだつた。

「本当に生きてるのか？」

「リョウ、不吉な事は言わんでくれ」

少なくとも死を告げる証拠は何一つ無い。かと言つて生きているとしても非常に弱々しい。

「大丈夫なんですか？ チヤツクさん」

「詳しい事は言えないね。体内に生体活動を抑える薬は中和し終えた。しかし不思議な事に、数時間診ただけでは、この、所謂昏睡状態から良い方へも悪い方へも動かなかつた。何かを待つてゐるんだろうか、まるで彼自身が目を覚ます機会を窺つてゐるみたいだよ」

「待つて いる、ですか……」

アンジユリーナの質問に答えたチャックと呼ばれた男性、彼はチャック・ストーン、42歳。師団内で内科外科問わず医師を“主な”生業としている。彼は更に付け加えた。

「それと、「チップ」が見つかった。早く摘出しなければ」

「それってこちらの居場所がばれてるつて事じやないですか?!」

「そう慌てる事でも無い。「チップ」は生体電気によつて動くが、出力が低ければ電波を発する範囲は限られる。こちらから接近するか向こう側から接近されるかしない限りは大丈夫な筈だ」

「でも今こちらの居場所がばれていたら……」

「悲観的になるな若者よ。まあ確実な事は言えないがね……手術はすぐ行うとするよ。手伝ってくれんか、メスと麻酔を。どんな医師や手術ロボットより早く正確に執刀出来るのは私くらいしか居ないだろう」

アンジユリーナはそのチャックの冗談と思われる台詞を決して過言だとは思わなかつた。何故なら、彼女達は「超越」しているのだから。

2 : Sleeping

兵士達が生存安否の報告をしている傍らで、2人が会話を交わしていた。

「申し訳ありません、実力差で油断していた私の完全な誤算でした」

「そう謝るな。私にとつてはどうでも良い事だ」

頭を下げるのはアンジュリーナを捕え損ねた男。興味無さそうに返事をしたのは中佐と呼ばれた男性。

「施設の軍事能力は大幅に削られたが、襲撃で壊された研究成果はほんの一部に過ぎない。侵入者はこの施設の表層しか漁つていらないらしい。しかし……」

中佐は一旦間を置いた。話す事を少し整理する為か。

「しかしだ、侵入者は「アンダーソン」を盗み去った。アレクソン君、これがどういう事だと考えるか？」

中佐と呼ばれる男は静かに、見様では冷酷に責める様な口調で尋ねた。アレクソンと呼ばれた男はその態度に動じず訊かれた事に答えるべく考え、少し経つて口を開いた。

「まさか奴らが「計画」に感づいているのでしょうか？ しかし、あの研究の記録は外部に漏れ出ない、極秘媒体を使っている筈……」

「その通り、直通回線で侵入された訳もあるまい。「お前達」の中にはきっとステルス能力が使える者も居るかも知れない」

「それでも「エネリオン」や「インフォーミオン」の存在に変化は無いですから「私達」が気付くでしよう」

「……」の話は一旦置こう。結論が出ない、本題に入ろう

中佐は近くにあつたコップの中の水を半分程飲むと、別の話題を持ち掛けた。

「ところでお前は「アンダーソン」についてどこまで知っている?」

「……奴が最初の「成功例」だという事位でしようか。しかし何故元の「能力値」が低い者を実験に選んだのですか?」

「知つての通り「トランセンド・マン」は何故か複製の困難さがあつて分化し終えた細胞からではIPS細胞が作れない。被験者が持つ卵子や精子を直接操作するという原始的な方法でしか増殖が出来ない。それに細胞分裂開始から胎児へ成長させる段階でも何故かしら異変が起きてしまう」

中佐は一旦休み、一呼吸置いて再び話し出した。中佐の口調は感情が無かつた。

「お前の言う通り「アンダーソン」は最初の成功例だ。出来れば成功した要因を調べたいし、薬で昏睡状態にしているとはいえこれ以上「計画」に関与した事を知られたら不味い。「アレクソンEX級特殊戦力」へ命じる。施設を襲った「反乱軍」分子を一掃し、「ア

ンダーソン」を奪還もしくは破壊せよ。その他戦力は幾らでも用意して良い。用意の際には私から上層部に報告しておこう

「了解」

中佐の長話とは反対に、短く返事したアレクソンと呼ばれる男は振り向き、指をボキボキ鳴らしながら何処かへ歩いて行つた。

一方、中佐はハアー、とため息をつき、コップに入つた残りの水を全部飲み切つた。

「そ
うか分
かっ
たぞ！」

医療テント内に大声が広がった。

「ストーン先生、怪我人が居るのでちょっと静かに……」

「ああすまん。ところで外で待たせているリョウ達を呼んで来てくれんか?」

「分かりました」

チャックは表面では部下に謝ついていても、自分が発見した事に驚いていた。
部下に命じた通り、3人がすぐに来た。

「チャックさん、大声出してどうしたんですか? 彼は無事なんですか?」

「一番最初に部屋に入つて来たアンジュリーナが他2人を代表して尋ねた。

「勿論手術は成功したとも。摘出成功だ」

チャックが指し示した先の台の上にあつた金属トレーの上には、体液が付いた手術道具、そしてマイクロチップがあつた。

「だが面白い事が分かつたのだ。何だと思う?」

この医師はまるで生徒に対する口調で訊き返した。3人はそれぞれ首を振つて否定の言葉を述べ、チャックが口を開いた。

「彼は、まるで生まれたての胎児なんだ」

言葉の意味が分からず、黙つたままの3人。リョウが一番早く言葉を返した。

「じゃあこいつは妊娠何年目なんだ? こいつを生んだ母親は大変だろうなあ」

「全く、冗談の絶えない奴だ」

「でも一体どういう事なんですか？　彼はこれだけ、少なくとも十数年間は胎盤の中に居たという事ですか？」

リヨウの疑問をハンが代わりに問う。チャックは考える間も無く質問に答えた。

「色々調べてみたのだが、彼の細胞分裂回数を示すテロメアは少なくとも15年分細胞分裂を続けて来た事は判明している。しかし、成長している筈なのに身体的な老化が全く無いのだ。それに、彼の消化器官中に入っていた液体が、羊水と同じ物質で出来ていた。更に液体には未知の有機物まで確認された。私が思うに、彼は体外受精によつて誕生し、その後何らかの設備によつて促成培養されたのだと思う」

説明は3人共黙つて聞き、説明が終わつても暫くは黙つたままだつた。（尚、アンジユリーナは話の半分が分からなかつた）

「管理軍」は何を考えてるのかサツパリだな……」

「こんな話聞いた事も無い。もしこれが極秘研究の一部だとすれば……アンジユリーナ、これは思わぬ収穫かも知れない」

「ええっ、本当ですか？」

リヨウが呟く中、ハンの嬉しそうな声に釣られ、アンジユリーナも声を上げる。

「まあ今は何とも言えないが……彼のゲノムはどこまで調べていますか？」

「まだ詳しい事は分からん、ここには良い設備も無いしな。ハン、本部にもつと言つてやつてくれ……で、時間は後2時間程掛かるだろう」

「分かりました」

チヤツクは愚痴混じりに答え、ハンは答えを聞くとアンジユリーナへ次なる質問をした。

「アンジユリーナ、彼について何か変わった所は無かつたか？」

「へつ?……」

少女らしい抜けた声が聞こえた直後、短い沈黙が流れる。再び動いたのは3秒後だった。

「私が脱出しよとした時、彼が光つた様に見えました。ひよつとすると彼は「トランセンド・マン」なのかも知れません」

「成程、そうか……参考になつた」

ハンは感謝の念を表すと、1人考え込んだ。

「「チップ」の反応が消えました。摘出されたと思われます」

「だが場所は分かつた筈だ。攻撃を開始せよ」

「了解」

一番先に医療テントから出たりヨウは大きく背伸びした。時計に目をやると既に深夜2時を過ぎていた。後ろをハンが出で来る。尚、アンジュリーナはテントに残つたままだ。

「あーあ、やつと寝れる。酒も飲みてえし」

「気を抜くなよりヨウ。「管理軍」の力は底知れない。この場所がばれて攻め込まれるかも知れないから油断するな」

「分かつてるぜ」

親指を立ててみせたりヨウは笑っていたが、目つきは真剣だった。

シユタツ

リヨウ達の正面を何かが横切つて行つた。その存在は目の前を通らなければ分からなかつただろう。

「ん? どうしたトレバー……」

トレバーと呼ばれたのは当然先程横切つた男性を指す。既に数メートル離れている今、顔は見えないが黒髪と前進を覆う黒い伸縮素材の軍服が特徴的だった。トレバーは訊かれても答えず、何処かへ走り去るだけだ。

「行つてみようぜ。あいつが考えも無く動く筈が無い」

「賛成だ」

リョウ達が走つて追い付く中、トレバーがちらと後ろを見た。そして言葉を発した。

「助かる」

「良いつて事よ、でもどうしたんだ?」

「後だ」

トレバーは最小限で返事をした。すると突然立ち止まつた。

背中のリュックから何か金属製の物体を次々と取り出した。どれも形が違つていて、一体何なのかは分からぬだろう。

だがトレバーは慣れた手つきで物体を動かし早回しの様に組み立てた。何時の間にかトレバーが握つていたのはライフル型の銃だつた。

「まさか敵襲か?!」

「確信は持てん。研ぎ澄まして気付いた。」

ハンの台詞にきちんと返事はするもののトレバーは前を向いたままだつた。横側から夜の僅かな明かりでも分かる彫りの深い男性だつた。

トレバー＝マホメット＝イマーム、31歳。名前からでも分かる通りイスラム系の混血。リョウよりも少し大柄で身長190センチメートルにまで迫る。

引き金に掛けられた指が動いた。銃口と思われる所からは何も発射するのが「見え」なかつた。火薬の音も発光も、空薬莢も反動も無い。

恐らく、いや確実に「普通の人間」からすれば何もしていないとと思うだろう。しかし、リョウとハンは銃口から細長い針状の「銃弾」が発射されたのを「感じ」取つた。

「銃弾」は斜め上へ飛び、3秒後、ピカッ、と上空で何かが光つた。遠くて見え難いが、リョウ達には発光に照らされて爆発塵が見えた。

「ナイス」

「早く知らせるぞ！」

リョウが親指を上げ、ハンが敵襲である事を知らせに行つた。トレバーは依然としてその場に立つたままだ。

「敵はまだ15キロメートル先だ」

2人にそう言い残すと、引き金を更に引く。それも連続で。その度に空中で爆発が起つた。

兵士達は思わず驚いた。

何せ発射した砲弾が何の前触れも無く着弾前に爆発したのだから。着弾まで残り10キロメートル地点、残り3分の2もある所で撃ち落された。

「砲撃防がれました」

「分かっている。砲戦は無駄だ。直ちに歩兵隊と機甲隊を出撃せろ」

「了解」

アレクソンは部下に命じると指をポキポキ鳴らしながら戦闘指揮車から出た。出る途中で机の上にあつたサブマシンガン型の銃を2丁、腰のホルスターに収めるのを忘れた。

「泥棒共を皆殺しにして来る」

「チャックさん、彼はあとどれ位で目を覚ますんでしょうか」

そう訊いたアンジュリーナの顔は申し訳ななそうな表情だった。訊かれたチャックはそんな事は気にせず自分の口調で話した。

「分からん。死ぬ事は無いだろうが、昏睡状態が覚めるのは分からんよ。1日後かも知れんし、1年後かも知れぬ……そう暗い顔になるな」

「はい。でも……」

「それ以上言うな。物事は明るく考えろ」

「先生、こちらを手伝つて下さい」

「今行く。アンジュリーナ少し待つとれよ」

遮蔽布の奥から聞こえた声に答えたチャックはマスクを付けゴム手袋をはめて向こう側へ行つた。

アンジュリーナが椅子に座る丁度前には彼女が助けた少年が横たわっている。その顔は表情すらなく冷酷さが感じられた。

「戦争には勝ちたい。でも誰も傷つけたくない……だから貴方を助けた」

少年に呼びかける様に呟くが、当然彼は全く動じない。それでも喋るのを止めなかつた。

「もう人が死ぬのは嫌。敵も、味方も、皆打ち解け合えれば良いのに……」

それが不可能な事は彼女自身が分かっている事だ。少年はまるで話を無視する様に眠り続けている。

不意に、ビーツ、と敵襲を伝える警報音が鳴つた。（基地内だけ聞こえ、基地外には殆ど聞こえない）

バタバタと多数の足音、ガチャガチャと武器を準備する音、呼び掛けを行う大声。

（きっと彼を狙つて来たんだわ！ 待つてて！）

使命感に動かされ、アンジュリーナは医療テントから勢い良く飛び出した。

3 : Warfare

リヨウが両手に抱えたライトマシンガン型の銃。引き金を引くだけで音も光も無く敵が怯み倒れる。大量の敵兵の死体がリヨウの通つた跡を示していた。

よく見れば敵兵はリヨウが向けた銃口の直線上に当たる所で血を吹き出し肉体が弾け飛ぶ。もつとも、「普通の人間」には気付く筈も無いが。

しかし、リヨウには視覚的に「感じ」取つていた。銃口から秒間100発の勢いで「銃弾」が発射され、敵兵達に命中して吹き飛ばすのが「見え」た。

銃弾に当たれば例外なく誰もが被弾したその部位を失い、脳や内臓に命中すれば即死、腕や足等末端部分であつても出血多量やショックで死ぬ。

銃弾が発射される度、つまり0.01秒に1回のペースで、銃の向く方向を生きている敵兵の方向を向く様に細かく変える。敵兵に1発だけ当てれば良いので条件が整つてさえいれば1秒に最大10体の死体を生み出せる。（実戦ではそう楽な条件は揃わないが。）

負けじと敵兵も装備の常備しているアサルトライフルやグレネードで応戦するが、銃弾は当たつてもその肉体に弾かれ、擲弾は当たる前に避けられる。それでも恐れず対面

しているのだからそこだけは評価できよう。

歩兵を圧倒し、余裕があるリョウは他の事にも気付く。100メートル程前方から殺意を感じ取った。

全高4・5メートル、重量12・5トン、チタン鋼で出来た全身、端的に言えば箱型の操縦席から手足が伸びた形状、（人型だが首が無い）、二足歩行型戦車（足で立つが機動時には足に取りつけられたタイヤで走行する）だ。二足歩行戦車はリョウに向けて両腕に装備した30ミリマシンガンを向け、引き金が引かれた。

音速の3倍、秒間10発、リョウは驚きもしなかつた。それどころか詰まらなさそうな表情でのろのろ飛んで来る銃弾を見る。言うまでも無いが彼にとつての出来事だ。当たれば戦車の外壁に穴を開ける事も出来る銃弾は、リョウが体をスライドさせて簡単に躱された。

接近しながら今度はリョウが銃口を向けた。引き金を引こうとしたが、途中で止めた。

対面していた二足歩行戦車から予兆も無しに火花が散り、その腕と足がだらしなく垂れ下がり、動かなくなつたからだ。

正確にはリョウには「予兆」が見えていた。イメージ的には後方から光弾が発射され、それが二足歩行戦車に命中、そして倒れた。

「サンキュー、ハン」

「集中しろよ。どうやら俺達を食い止めに来たらしい」

後ろに居たハンへと簡潔に礼を述べたりョウ。対するハンは目の前に立つ2つの人影を指して注意した。

どちらもリョウ達と同じ20代に見える。片方は片手にナイフを、もう片方は両手に槍を、それぞれ持ち構えていた。

一方、リョウは右手に刃渡り75センチメートルの湾曲した片手剣を、ハンは何も持たず素手で構える。

地面の四か所が蹴られ、空中の2か所で衝突が起こった。

リョウの剣が長さ1・8メートルもある槍を受け止め、ハンの掌がナイフを握る腕の軌道を逸らした。

周囲に居た他の敵兵や味方兵は彼らを置いてそれぞれで交戦し始めた。

敵味方双方の兵士達が一斉に引き金を引く。機関銃や戦車や装甲車、二足歩行戦車も同じだ。

数では明らかに攻めて来た「敵」側の方が勝っていた。それでもアンジュリーナが率いる「味方」側が戦況を有利にしていた。

人数はおよそ敵対味方で300人対200人、それぞれ中隊程度の規模だが人数差は大きい。それに機甲兵器もその分差もある。

それでもアンジュリーナ・フジタという一人の少女の存在が戦況を大きく変えていた。

味方の銃弾や砲弾は敵へ命中し、次々と数を減らす。だがその逆はなかつた。

敵の攻撃はこちら側に届かなかつた。正確には攻撃が届く前に、銃弾であれば突然止まり、砲弾や爆弾なら飛翔中に爆発する。

敵側からは見えないが、味方側からは見えない壁が爆風を押し止めている光景が見え

る。

落ち着いて、自分のしたい事を頭ではつきりと念じる。今ならば敵の攻撃を受け止め。そうするとアンジュリーナは自分から「何か」が放たれるのを感じた。まるで自分の中に存在する隠された力が湧き上がる様な、そんな感覚だつた。

自分から半球状に発射された「何か」は敵の放つた銃弾や砲弾へ衝突し、銃弾の持つ速度をゼロにし、砲弾の信管に刺激を与え、爆風が味方側へ広がるのを防いだ。攻撃を無力化された敵達はもはや蜂の巣も同然、味方達があつという間に制圧した。

「よっしゃあ！ 次へ行こう！」

味方兵の一人が気分を高揚させて言つた。一種の油断ではあるが、他の皆の士気は上がる。

敵側が全滅なのに對し、味方の負傷・死傷兵は無し。短時間で済ませたので兵士達の疲労も少なく、心配は弾薬残りだけだがそれも今は気にする程でも無い。

「皆さん無事ですか？」

「いつも通り、皆大丈夫だ。毎回感謝する」

アンジュリーナが念の為呼びかけたが、無用だつた。

喜ぶべき状況の中、それでもアンジュリーナは悲しみを胸に秘めていた。酷い死体姿の敵兵を見ると憂鬱な表情になつた。

（出来ればこの人達も助けてあげたい……でも今の事を考えても仕方ない。未来へ繋げなきや！）

首を横に振つてロングヘアをたなびかせながら、弱気を自分で打ち払つたアンジュリーナは先頭の味方達に続いた。

拳を前に突き出す。それだけで敵兵達が簡単に身を破裂させる。

蹴りを前に繰り出す。それだけで敵の戦闘車両が壊れる。

実質それだけやつていてアレクソンは退屈に思つていた。この調子では後方の味方

兵達に何もさせないで良いだろう。だから自分単独と残り全員と戦力を分けた。

対物ライフル弾を片目に避けながら走つて一気に接近し、敵兵の胸に指を突き刺す。当然敵兵は心臓を貫かれて即死だ。

足元に投げられた手榴弾を視界に認めるに斜め上に飛び上がり、1回転して着地地点に居る敵兵を降下キックで頭を潰した。脳が弾け飛ぶ様は彼にとつて見慣れた光景だから忌む事も無い。

離れた所に居る戦車が砲塔を吹く。ほぼ同時にアレクソンが腰にある銃を一瞬で取り、狙いを定めず直感的に向け、引き金を引く。

砲弾がアレクソンと戦車の中間の距離で爆発した。彼には銃口から「銃弾」が砲弾の中心に命中したのが「見え」ていた。

地面を蹴つて加速し始めてから1秒にも満たない時間、それだけで戦車の正面から5メートルまで距離を縮めていた。

車体の下に潜り込み、スライディングしながら後方へ抜け出る。地面を踏ん張り急ブレーキを掛けて止まり、今度は反対側へ走る。

走行の勢いを乗せたパンチが戦車の後方にあるエンジンルームに当たる部分に命中し、戦車は動かなくなつた。

「仲間の仇だ！」

右方向から彼を怒鳴る声、振り向くと三脚に固定されたガトリング砲を向けた敵兵が憎しみを込めた眼差しで睨んでいた。

「死ねえ！」

自棄になつた敵兵は引き金を引き、秒間50発という恐るべきペースで銃弾が吐き出される。アレクソンは全く動じなかつた。常人なら痛みを感じず命を引き取るという銃弾の逆風に逆らつて歩き、ついに目の前までたどり着いた。

ガトリングの方も弾を失つて虚しい回転音が聞こえる。アレクソンの姿が目の前にある事に気付いた敵兵は表情を憎しみから恐怖へ一変。

次の瞬間、敵兵の意識は暗闇に包まれた。アレクソン視点だと自分の手刀が敵兵の首を切り飛ばした。

一段落着いた彼はやれやれ、と腕を組み、他の味方達の戦況を知る為に通信機を取り出した。

「こちらポール・アレクソン。こちらの損害を教える。相手の確定している勢力もだ」『了解、指揮官殿。「反乱軍」勢力は約50000。こちらの勢力は最初70000だったのが既に60000まで減つております。機甲勢力に関しては……』

会話が途切れた。

通信不良でも電波妨害でも無く、原因は通信機の故障によるものだつた。何故分かつ

たかというと、彼が手にしていた通信機が突如にして碎け散ったからだ。

ポール・アレクソンはその直前、身を後ろに引いていた。前方から向けられる殺意に気付いたのだ。自分は攻撃に当たらずに済んだが、結果的に通信機が壊れたという訳だ。

「ステルス能力か。俺には及ばないが見事だ」

「身体技能だ。『能力』はまた別だ」

「ほう面白い」

ポールよりも少し背が高い男性。肌の浅黒さや彫りの深さは間違いなく中東系だ。そしてこの男こそがトレバーだった。（当然互いに名前は知らない）

3メートルの距離を取り、トレバーが左半身を前に拳を顎の高さに掲げる。一方で

ポールは右半身を引いた所は同じだが、右手は顎を左手は腹を守っている。

トレバーが右手を後ろに引きながら距離を詰める。ポールが同時に左足を前に出した。

前蹴りを左手で叩き落としたトレバーは曲げた右腕を勢い良く伸ばした。それをポールが左掌で正面から掴み止める。

ポールは左足を地面に着けるとその足を軸に右足で上段回し蹴りを繰り出した。

トレバーは首を後ろに曲げて簡単に蹴りを避けた。躱されたがポールは空振りから

勢いを増加させ、今度は下段へ回し蹴りを放つ。

次なる蹴りを自分の右ローキックで防いだトレバーは、左足をポールの頭に向けて蹴り出す。

自分の頭を狙った蹴りを両手で受け取つたポールはそのまま掴んだ腕を回し、相手を回転させると手を離した。

きりもみ回転したトレバーはまだ落ち着きを保つてゐる。回転を利用して勢いを乗せた回し蹴りを仕掛ける。

投げられた相手から反撃が来ると思つていなかつたポールは慌てて体を後ろに引く。トレバーは蹴りを空ぶらせたが身体を異常回転させながらも無事に着地した。

「成程、他の奴らとは違つて手応えがある。良い勝負が出来そうだ」

ポールは無表情のままだつたが口調からは楽しが聞こえる。

「……」

対するトレバーは無表情なのは同じだが言葉が無い。内に潜めた意志が読み取れない。

沈黙。

先にトレバーが動いた。しかしポールは動かなかつた。

本能的に危険を察知したトレバーは左へ向くと腕を体の前に構える。銃弾が連續し

て襲い掛かつて来たのが見え、腕を連続して動かし銃弾を防ぐ。

「どうやら何か袖の下に隠しているな」

銃弾を撃つて来たサブマシンガン型の銃を持つた人物が尋ねた。

トレバーは破れた袖を引き裂いて即席ノースリーブを作り、両腕に装着された黒く硬そうな籠手を見せた。

「良い武器だな……この男の相手がお前の役目だ」

「了解」

ポールは無表情のままトレバーへ関心を向けていると思われる台詞を吐いた。銃弾を撃つて来た人物は顔を覆うステルス素材マスクの上からポールに返事した。

（違う）

トレバーは察知していた。

自分の背後から長さ1メートルにもなる刃が首目掛けて飛んで来たのだ。体勢を低くして避け、足元へ蹴りを入れようとする。

（届かない）

そう判断したトレバーはスライディングの体勢から前に出した左足を右上に突き上げた。

ガキン、と金属同士が打ち合う音。トレバーの脛に装着された「アーマー」は『2本

目”の刃を防いだ。

改めて刃を振つて来た人物を見ると、こちらも先程銃をぶつ放して来た人物と同じく顔が仮面に隠されていた。その人物は受け止められた方とは反対側、つまり右手に握つた剣を頭から振り下ろす。

左足で受け止めている剣を振り払い、体を捻つて起こしながら次なる刃を躱し、相手の顔面にジャブを決めた。それ以上は追撃を行わず間合いを取るトレバー。気付けばポール・アレクソンの姿は消えていた。代わりに銃を撃つて来た人物が両手に剣を握っていた。

「指揮班へ報告。そちらに「トランセンド・マン」が1人向かつた。「能力値」は少なくとも50を超えるだろう。近接戦闘が得意なタイプだ」

返答が聞こえ始める前より耳に当てた通信ユニットを素早く片付けたトレバー。こうしてトレバーはたつた独りで4本の刃を相手にする事となつた。

4 : A l l y

頭に向かつて突き出された槍を剣で上に逸らしたリョウは、剣を相手の横つ腹へ叩きつける。だが攻撃は素早く引き戻された槍の柄に受け止められた。

リョウの頭を狙つた振り下ろしを槍の中央部で受け止め横に受け流され、胸に向かつて繰り出される槍先を横から剣で叩いて軌道を逸らした。

リョウがまたも剣を横に振り、槍に受け止められる。だがそれだけで終わらなかつた。

槍に固定された剣を今度は同じ右手で逆手に持つて、抑えていた槍から刀身を引いて反対側へ抜け出し、そのまま突きを放つ。

突きは変わらず槍に受け止められるが、今度は右手に握った剣を投げ飛ばすように左手に持ち替えたりョウ。その左手で相手の身体の中心へと剣を突き出す。

斬撃を受け止める為に出した槍の柄をリョウの右手が掴んだ。槍が自由を失つている所へリョウが剣先を胸に向かつて突き出す。

槍はリョウの腕と相手の腕が絡め合う様に引っ張り合つて互いを譲らない。リョウが出した剣はそれを持つ腕を掴まれ動かなくなつた。

対峙した状態から一変、リョウは剣を故意にその場で落とした。

意識を集中し、自分の体表から「エネルギー」が流れ込んでくるのを感じる。思考を込める、自分がこれからする事を。

「エネルギー」は体表から脳へ集められ、『作り変える』。その「エネルギー」は脳から出力器官、この場合は掌へ向けて流れれる。

掌に集められた「エネルギー」はそこから一気に発射される。
 「エネルギー」は「見え」ない。「聞こえ」ない。「嗅げ」ない。「味わえ」ない。「触れられない」。

だが「感じる」事は出来る。現にリョウは自分が吸収し変換しこれから発射する「エネルギー」を認識していた。

吸収時間0・5秒、1発のみ、発射する際の「弾速」は秒速3400メートル、物質に命中した時に熱エネルギーへ変換するようになされた。

至近距離で発射された「エネルギー」は相手の体の中心目掛けて勢い良く発射、するつもりだつた。

相手がリョウの行動を察知したのか、掴んだ手首を更に外側へ逸らした。「エネルギー」は何処か離れた所へ飛んで行つた。

次の瞬間、リョウの掌の延直線上にあつた敵の装甲車が爆発、内部の機関部が壊れた

のかそれ以上動かなくなつた。

「これでどうだ！」

リョウがニヤリと笑いながら勝利に近い声で言つた。対峙していた男は突然槍と共にリョウから手を離した。声にびびつた訳では無い。

リョウの肘から先を見れば分かる事だが、空気が“揺らいでいた”。熱によつて加熱された空気の屈折率が代わり、それが外側へ流れる事によつて陽炎の様に見えるのだ。つまり相手はこの灼熱から逃れる為に離れた訳だ。

相手はリョウの足元に置かれた槍と剣を一目見たが、無理と判断してすぐに視線を戻した。

左右の掌が相手に向けられる。掌から大量の「エネルギー」の弾丸が放出される。

「逃げんなよっ！」

後方へ下がりながら弾丸を避ける相手、それを許さないリョウは接近しながら弾丸をばら撒く。狙いを決めない、所謂乱射だが、

その差は大きかつた。リョウはあつという間に逃げる相手へ追い付き、「エネルギー」の弾丸を数発命中させる。

怯んだのを確認したので至近距離まで近づいたリョウはその顔面に横蹴りをヒットさせる。追撃に首へ手刀を思いつきり当て、腹部へ大量のブローを当てる。

倒れかけた相手の首を右手で乱雑に掴み、「エネルギー」を一気に送り込む。

次の瞬間、相手の首が熱による水蒸気爆発で、電子レンジに入れた卵の様に爆散し、頭が弾け飛んだ。胴体はぐつたりと倒れ、二度と動く事は無かつた。

「あの野郎、意外としぶとかつたな。まあせいせいしたぜ」

「そんな呌く暇があつたらさっさと次行つて働いてくれよ！　トレバーのお蔭で不意打ちを防げたのは良いものの戦力差が大きいんだよ！」

ハンがまだナイフを持つ男と格闘を繰り広げていた。リョウは詰まらなさそうにそれを見る。

「ハイハイ、行けば良いんだろう？　でもお前も気を付けろよ」

「もうすぐ片付く、大丈夫だ。そちらもな」

「ああ。俺は戻つてくるぜ」

リョウは笑顔で親指を立てた。それをハンに見せたまま何処かへと走り去つた。方向から見て多分前線だろう。ハンも親指を立て返し、気を取り直して相手に集中する。まず右手のナイフを持つ腕が突き出される。ハンは右手首を右拳で殴り逸らした。

次にナイフを痛みと同時に捨てた相手から、4連続で拳が飛んで来る。ハンの腕が交互に右、左、右、左、と逸らした。

今度はハンが拳を連續して繰り出す。腕の回転を利用して出しては戻し、相手に攻撃

の隙を与えない。

腕を胸の前に掲げて防御する敵だが、ハンの拳がその隙間をすり抜け、顎に一発決めた。

まだ際限なく拳を叩き続け、次は首の側部へ手刀を叩きつけ、ロー・キックで相手の膝を蹴りバランスを崩す。

倒れそうになつても倒れずしぶとさを見せる敵。それをハンは腕の隙間を搔い潜つて威力を犠牲に確実に攻撃を決める。その腕の動きは中国でも広東系の拳法に近いだろう。

相手がパンチを放とうとするのに対し、丁度その肩に1発拳を入れ、相手の攻撃は中断された。敵がキックを出そうとすると、その根元の腰に1発横蹴りを決め、相手の攻撃を強制終了させた。

攻撃を受け続けてよろめいた相手は残った力を振り絞つてハンに掴み掛かつた。

ハンの左手が相手の右手に捕まれ、ハンの右手が相手の左手を掴んで固定する。体表から吸収、脳へ送つて変換、掌から放出。リヨウの時と同じ。

ただし違うものがある。

放出された「エネルギー」はそのまま相手の腕に直撃。相手は突如自分を襲つた衝撃に驚いた。

掴んでいた右手はすぐ離したから良いものの、掴まれた左手は全く動かない。痺れる
ような衝撃は徐々に残つた力を奪う。

ハンが表情を一変、力を込めた。

バチッ！と弾ける音、同時に火花。それが暫く続いた。

大量の電流を受けて接触面を焦がされ、電気ショックで静かに命を引き取つた。
ちなみにハンはこの「電子操作」を利用し、あらゆる電子機器や複雑なコンピューター
に電気信号を送る事で操る事も可能だ。数時間前に見せたとある施設のシステムの一
時的ハックも彼がこの能力を活用したものだ。ハンはまさに身近にも戦闘にも利用で
きる万能な「能力」を持つているのだ。

倒れた死体から掴んだ手を離し、息を整えながらハンは耳に装着した通信機に手を
やつた。

「こちらハンだ。今から防衛に向かう」

何処か慌てている様を見せる早口で言い終えると、すぐさま何処かへ走つて行つた。

左右から攻めて来る人物の連續して繰り出される斬撃を、左右の腕に装着された籠手で防ぐ。

トレバーは合計4本の剣を相手に防戦一方だつた。しかし策が無い訳では無かつた。

右方の右手に握られた剣を持つ腕を掴み、腕の籠手でもう片方の剣を防いだ。掴んだ剣を利用して左方の敵の両方の剣を防いだ。空いている左拳を左方の胸に決め、後方に吹き飛ばした。

右方が塞がれた左の剣を引き戻し、下からトレバーの腹部へ向かって突き出す。

左籠手で腹目掛けて来る斬撃を防いだトレバー。もう一度引き戻そうとする腕を左手で掴み、自分の両腕を開く事で相手の両腕を無理矢理交差させた。

両腕を止められた状況を打開しようと相手は前蹴りを放つ。しかし蹴りはトレバーが放つた踵落としに打ち落とされ、振り下ろす足はそのまま相手の足を踏み付けた。

トレバーが横へ目をやると先程吹き飛ばした相手が剣を振りかざそうとしていた。右の脛当てで振り下ろされる刃を蹴り止め、そのまま右足を横に振つて同じ脛当てで横から迫る刃を蹴り払つた。

右足を後方へやつて地に着けるとその足へ体重を掛ける。掴んで動きを封じた方を後方へ投げ飛ばした。

引き離して連携を封じればトレバーはもはや余裕だつた。

トレバーが突き出された刃を正面からその横面を両手で止めた。同時にミドルキックを相手の腰に命中させると、相手が吹き飛ばされるのと同時に相手の手から剣を奪い取つた。

別の方が戻つて来て、同じく2本の刃を振るう。しかし今度は勝手が違つた。

トレバーが持つ1本の刃が器用に攻防を同時にを行い、防御に押されてしまう。更にトレバーの刃に気を取られた所為で足元が疎かになつていた。不意に左脛に衝撃を感じるとそのまま左膝を地面に着けてしまつた。

別な敵が後ろからトレバーを突き刺そようと突進している。トレバーは跪いた男の肩を両手で押し、1メートルばかり飛び上がる。男の肩を支えに前方へ1回転しながら反対側へ。

着地する直前、トレバーは縦方向の回転を利用して後方の敵の背中にキックを決め飛

ばした。突進して来た男が慌てて刃を引っ込めるが、仲間との衝突を防ぐ事は出来なかつた。

着地したトレバーは後ろで止まつた敵2人の元へ駆け込み、彼から見て手前の方に右手で振り下ろしパンチを発射する。

間一髪で相手が掌で拳を受け取り、もう片方がトレバーへ起き上がりながらミドルキックを放つ。トレバーはそれを左の拳で迎え撃つ。

トレバーが思考を左右の籠手に送つた。オン・オフというだけの単純なパターン、そ

のお蔭で一瞬の内に素早く切り替える事が出来る……今の様に。

右の籠手から長さ20センチメートルの刃が腕に沿つて飛び出し、拳骨を掴む掌を貫いた。左の籠手から腕に沿つて突き出した同じ長さの刃が迫り来る足を突き刺した。

痛みで手と足をそれぞれ引っ込める敵達。声は出なかつたが表情の歪みは隠し切れていなかつた。容赦なくトレバーが襲う。

2人の頭を両手でそれぞれぐいと掴み、2つの頭を胸の前でぶつけた。そこへ刃が付いたままの籠手を叩きつける。

グサツ、と子氣味良い音と同時に2つの命がこの世を去つた。

頭に突き刺さつた刃を引き抜き、トレバーは表情一つ変えずに前を向いた。

離れた所についさつき倒した敵達と同じ格好をした者が5人も居た。それぞれ例外

なく2本の剣を……

(どうやら俺の邪魔をするのが目的らしい……)

突進する10の足音、風を切る10の刃。トレバーは何も動かなかつた。

トレバーの姿が揺らいだ、様に見えた。

かと思つたらシユタツ、と地面を軽く蹴り、先頭の2人へ急接近したトレバーはその腹部へ左右の拳をそれぞれに叩きつけた。しかし、籠手には刃が付いていなかつた。既に格納されていたのだろうが、何故わざわざ武器を隠したのか。

トレバーは拳が敵の表面に触れると同時に思念を送つた。体表から脳そして腕を経由し手に、ゼロ距離で発射された。接触瞬間の僅かな出来事だ。

トレバーに触れた2人の人物は二つの出来事に驚いた。一つ目は目の前の男が一瞬で目と鼻の先に移動していた事。2人はトレバーの速さに付いて来れて無かつたのだ。そしてもう一つ、何の変哲も無い様に思われたボディブローを喰らつた瞬間の事だつた。パンチ自体の衝撃は当然あつたが、攻撃を受ける立場の彼らにとつて余計なものがあつた。

体が動かない。疲労でも麻痺でも無く、誰かに掴まれて固定された訳でも無い。自分の意志で体が動かせなかつた。

ほんの一瞬の事だけの出来事。それでも効果は絶大だつた。

動作不能になつたのは意識的に動かす筋肉だけでなく、無意識的に脳が操作する器官を含む。バランス器官を一時的に止められただけで2人は成す術も無く地面に寝転がつてしまつた。

続けてトレバーは残る3人の攻撃を避け、打撃を的確に命中させた。具体的には、1人目の飛び蹴りを体を半歩横に移動して避けそこへラリアットを決める。2人目のストレートを頭だけ傾けて躲しながらカウンターのストレートを顔面にめり込ませる。3人目の回し蹴りを体勢を低くして避けながら腹に回し蹴りをヒットさせる。

例外なくそれぞれ相手に触れた手足に「エネルギー」を送り込み放出していた。その度に地面に人体が倒れる。

起き上がるうとする5人を容赦なく、籠手から生えた刃が5人の左胸を貫通した。
死体に目もくれず、トレバーはその場から姿を消した。戦闘中に感じた疑問を残しながら。

（妙だった。全員が“同じ”だった。人物としての違いはある筈なのに「本質」がまるで同じだった。「標準」に比べて劣る様でもあつた……）

移動しながらトレバーはこの事を後で報告すると決心した。

5 : Surround

「前に出過ぎるなよ！ 危なかつたら下がれ！」

仮説基地の防衛線に立つ中隊長らしき人物。彼らの前には即席で作られた土嚢が防弾壁の役割を果たしている。

「負傷者を寄こしてくれ」

チヤックが運ばれて来た味方の兵士達を眺め見る。誰も致命傷では無かつたが傷が痛々しい。頬つておけば出血多量で死ぬ者も居るだろう。

「待つておれ。少々痛みはあるが、すぐ治る」

チヤックは下腹部に被弾し激痛でうずくまる兵士のその傷に左手を当てながら、右手に持つたピンセットを入れて血の付いた弾丸を取り出した。

すると驚くべきことに、左手が当てられた傷がたちまち塞がつた。傷痕は見えるくらいに残っているが、兵士に痛みは残つていなかつた。体を動かしても何も支障は無かつた。

「有難うござります」

兵士が驚いた様に傷痕を見ながら感謝を述べた。

「これが仕事だからな。違和感は無いか」

「大丈夫です。動けますよ」

まるで負傷した事が無かつたかの様に兵士は武器を取ると防衛線へ復帰し、銃弾を敵に見舞うのだった。

チャックは次々と運ばれる兵士達の傷痕に手を当ててはそれを治し、戦線に復帰させる。撃つても撃つても相手が減らないのは弾薬不足や死者が出ない限りは敵にとつてまさに鉄壁。

手を当てる、この行為こそ一番重要だ。仕組みはリョウやハンが手から熱や電気へ変換する「エネルギー」を放ったのと同じ。

この医師の体表から脳へ、脳から腕、掌へ、そして傷口へ。ここでの「エネルギー」は簡単に言うと、当たった部分のタンパク質を作り替え、損傷した組織を修復する。

人工的なタンパク質の合成は複雑で手間が掛かる筈なのだが、それをこの男は意志を込めて手を当てるだけの僅かな事で複雑な工程をいとも容易く行う。

こんな「超越した」能力を持つているからこそ彼が軍医という役割を担っている理由でもある。

「トレバーさんから報告がありました。「トランセンド・マン」が一体こちらに向かつています。「能力値」50以上はあるそうです」

「何つ？ 前線はどうした？」

「前線は拮抗状態が続いているが、混戦の中を抜けられた様です。この事と関係しているのか、我々と対峙していた敵隊が離脱し始めています」

「誰か向かつていてるか？」

「ハンさんが支援に向かつています」

チャックは頭を捻った。彼の「有機物合成」という「能力」は医療には最適かも知れないが戦闘には向きだと見える。（爆発物を合成する方法もあるが、その合成に使われるエネルギーで直接攻撃した方が効率は断然良い）それでも彼はテーブルに治療器具とごちゃ混ぜに置いていたアサルトライフル型の銃を抱えた。

「仕方ないが、私が行つて来る。済まないがお前達は別の隊の支援に入つてくれ」「了解、任せました！」

返事に頷いたチャック。そして中年に見合わないダッシュで土嚢のバリケードから飛び出し、銃弾の飛び交う戦場の中を駆け巡る。

「ハン、挟み撃ちだ」

『分かりましたよ』

チャックは通信機越しに仲間の声を聞きながら、前方百数十メートル先に普通とはかけ離れた存在を発見した。歩兵を触れるだけで殺し、戦車や装甲車を重いパンチで動か

なくする存在を。

だが次の瞬間、その姿はチャック達の挾撃を察知した様に彼から見て左方向へ大きく方向転換・加速・移動した。

「速い?!」

『しまった……まだ追いますよ』

「勿論だとも」

足を止め急ブレーキしながらチャック達も方向転換する。ハンとの距離も数メートルにまで近づいており、2人は並走し始めた。年齢の若いハンがすぐにチャックを越したが。

「お先に行きますよ」

「そうしてくれ、ご覧の通り走るのは慣れてないんだ……」

アンジュリーナは味方達を守る事に懸命だつた。

「障壁」は最前線の兵士から正面10メートルの距離に張り巡らされている。それはアンジュリーナが、体表、脳、掌、対象空間、と「エネルギー」を送つてゐる結果に過ぎない。

敵からの攻撃を受け付けず味方の攻撃は通す。「障壁」によつて圧倒的な差が生まれていた。「超越した者」を一人連れた味方側のこの1個中隊はほぼ無傷で敵側の1個中隊を全滅にまで追いやつた。

「大丈夫ですか？」

「怪我人ゼロ、機体も皆損傷無しですよ」

「良かつた……」

仲間達が無事と聞いて胸をなで下ろしたアンジュリーナ。味方の兵士達はやる気に溢れ、疲れを感じさせない。

彼女が一番嫌なのは仲間が傷付き、死ぬ事。それを防ぐためならばアンジュリーナは

自分の命に代える覚悟もある。彼女が発生させ味方を覆う「障壁」は彼女の望みを実現されるのに最適だ。

だがこの「障壁」は相手側から来る攻撃を認識する必要があり、認識出来なければそのまま通り過ぎる。また、銃弾なら止めるか逸らすだけで良いし、砲弾や爆弾なら内部の信管に刺激を与える、こうする事で大抵の汎用兵器は防げる。「障壁」はガスや閃光、爆音も防ぐ効果があり、常人とはかけ離れた知覚能力を持つ彼女にとつてはこれらを防ぐ事も出来る。認識さえすれば彼女自身のエネルギーを越えない限り何でも防げるのである。

しかし、このエネルギーを越えればどうなるのか。または攻撃を認識出来なかつたら。

認識は曖昧だつた。完全に不意を突かれ、「障壁」を発動させるのに時間が掛かつた。一方、「それ」は自分の進行方向の反対側に掛かつた圧力に対し、正面から対抗し、圧倒的な「力」でねじ伏せ「障壁」を突破した。

次に見たのは味方の歩兵の胸を貫く1本の腕。二度と目を覚ますまい。

腕を辿つて見るその顔はアンジュリーナにとつて見覚えがあつた。

彼女より頭一個分かそれ以上背が高く、戦闘用のプレートアーマーを身に着け、獲物を仕留める猛禽類の様な冷酷な目付き。間違いない、アンジュリーナが数時間前ある施

設に潜入した際に遭遇した男性。

「逃げて下さ、いつ、＝、＝、＝、＝、」

少女は大声で叫んだ。彼女にとつて最悪の事態が起きない為に。子供らしさが若干残る声に従つて大勢が向きを変え、一目散に走り出した。

しかし、音速を超える、常人には目に見えぬスピードで襲い掛かる「超越した」男相手に逃げられる筈も無かつた。足音やタイヤやキヤタピラ、どれもあの男の前には無意味だつた。超速で歩兵や戦闘車両をなぎ倒す様は鷹や鷲が獲物を狩るのとはかけ離れている。街を襲う怪獣と言つても過言では無いだろう。

怪獣に対抗できるのは怪獣しか居まい。アンジユリーナもその「怪獣」という存在である事に変わりは無い。だが、坑道採掘の為に開発されたダイナマイトが人を殺す為に使われたのと同じ様に、この「怪獣」としての力も何か役に立つ。使い方の問題である事は彼女が既に理解している。

男に向けて両手を突き出した。作用するのは男の身体。運動エネルギーを中和し、相対速度をゼロにしようとする。

（お願い、止まつて！）

(何だ?)

ポール・アレクソンは体の違和感に思わず足を止めた。

(念動力系の能力か、何処だ?……)

違和感の発信源はすぐに見つかった。10時の方向に見覚えのある黒いロングヘアの少女が自分に向かつて手を伸ばしていた。

(あの時の小娘か。あの時爆風を防いだのもこの能力だろう。「アンダーソン」を連れ去ったのも奴の仕業か)

ポールにとつてはちよつとした邪魔が入つたに過ぎない。彼は「対象」を自分自身に向けた。体表から取り入れた「エネルギー」を脳で作り変え、体表から放出。

自分を抑制していた念動力が取り払われるとポールは再び動き出そうとする。

自由を取り戻したはいいが、敵の歩兵がこちらに携行ミサイルの弾頭を向けていた。だが慌てない。冷静に相手がその引き金を引くより前に腰のサブマシンガンを抜き、こちらが引き金を引いていた。

果たしてミサイルを撃とうとしていた敵兵は自分が死ぬ事に気付いただろうか。音速の10倍、しかも常人には見えない「銃弾」が発射機の内部のミサイルに命中し、爆発して死んだ、という事を。

爆発は広がつて周囲の歩兵にまで及び、吹き飛ばした。

次は重機関銃がポールから4時の方向で弾を吐き出し始める。

振り向いて銃弾を身に受ける。しかし、人体を引き裂き鉄板やコンクリートを容易く貫く筈の銃弾は彼の身に傷一つ付けない。

飛翔物の発生源は装甲車。更にその上部に取り付けられたグレネード連装砲が火を噴いた。

音速を超えるスピードで動けるポールはそれ以下の弾速の擲弾を躊躇ない筈がなかつた。呆氣無く装甲車の懷まで接近し、エンジンのある車体後部へと拳を叩き込む。外観に大きな凹みが出来た装甲車は内部の機関部まで潰され、動作不能。ポールは1メートル程ジャンプした後、装甲車の側面を両足で蹴る。

装甲車が横方向に倒れ、そこに居合わせた歩兵2人が巻き込まれ潰された。方やポールの方は反作用で反対方向へ移動し、次なる獲物を求める潤歩する。

(ここまでは簡単な仕事だ。早く全滅させ……)

「させない！」

今まで無視していた少女の声がポールの考えに反するように言つた。

再び自分を拘束する「力」。動こうとしてもそれに反抗される。

しかし同じ人物が放つのだから同じく打ち破るのは可能な筈だ。だから余裕に思つていただけに不意打ちは効果的だつた。

「ハイヤツ！」

アジア人のものと思われる掛け声と同時にポールは後頭部に感じた強い衝撃で前方へ飛ばされた。

ダメージはあつたが動作に支障はない、地面を転がつて受け身を取りながら判断した。起き上がりて振り向く。

彼の後頭部に衝撃を与えた張本人と思われる人物が左足を上げて立つていた。やはり声が示す通りアジア風の外見の男だつた。

「今やつと来たぞお！」

今度は中年男性の、疲れた様にも聞こえる掛け声。その方向から大量の銃弾が……

音速の10倍程度の銃弾ではポールに命中しなかつた。それも1秒間に何十発という連射速度でも。

相手が銃弾を発射するのを止めると、その顔を確認。中年の白人で戦いに不慣れという感じがする。

「ハン、お前早すぎないか？」

「先生が戦闘に不向きなのは貴方自身で分かつていてるでしょう」

「だからといってしなくちやならん事だ。人員が足りないから仕方あるまい」

「まあなんですがね……」

「それに戦う医者など評判が悪いに決まってる」

「その話は忘れて下さい」

「青年の方は既にマーシャルアーツ風の構えをしていた。中年の方は仕方ない、と手を振つてぎこちなく正面にいるポールに立ち向かつた。会話の通りこちらは戦闘に慣れてなさそうだった。

「アンジユリーナ、奴の事で何か分つたことは無いか？」

「ええつと……確か私の集中させた中和障壁を破りました。能力なのか、それだけ強力なのかは分りませんけど……」

「十分だよ。なら後者だな。トレバーからは「能力値」が50を超えていると推定してい

た

少女の報告に青年が考えを伝えた。残りの中年男性が続けて言う。

「若者達よ、前衛は任せたぞ。私は後衛しか出来なくて済まんが、氣をつけて掛かれよ」
「分かってます！」

少女が真剣に答え、同じく真剣な顔でポールから目を離さない。4方から囲まれた
ポールは表情を浮かべなかつたが、内心面白がつていた。

（3対1か……面白い！）

ポールが殺し損ねた兵士達が退散する中、「超越した者達」は睨み合っていた。

6 : Birth

何処かに横たわっている。

眩しい……目が開かない。

騒音……はつきりと聞こえない、意味を持たないノイズの様な音。何なのか分からぬが、匂いがする。不快ではない。腕に何か触れている。手探りで探し当てようとする。

「……ゴホッ！」

息を吸つた途端、大きく咳き込んだ。空気は埃っぽくはないが、まるで息をする事に慣れていないかの様だ。

それをきつかけに、全てが明瞭になった。

首を動かして見えたのは簡素な医療室らしき部屋。

「負傷者を運んで来たぞ！」

「今そつちへ行く！」

「早くしてくれ、血が止まらないんだ……」

「大丈夫だ、助けてやるからよ！」

医療室は混乱状態だ。次々と負傷者が運ばれ、医療スタッフ達が休む暇なく勤しむ。

「ストーン先生はどうしたんです？」

「相手の『トランセンド・マン』と交戦中だと。切羽詰まっているんだとき」「それにもしても施設は崩壊させたってのに、どうして奴らここまで戦力があるんだ？」遠くからは微妙に大砲の発射音や爆発音が聞こえる。

匂の源は分からぬが、匂いからしてどうやら消毒薬によるものらしい。

腕の違和感の原因も判明した。腕の皮膚を針が突き刺し、針は細いチューブに繋がつており、チューブを辿ると点滴パックが見えた。

躊躇なく針を引き抜く。多少痛みはあつたがどうでも良い。

後はベッドから起き上がり……：

「おい、君、待つてくれ！」

自分を呼び止める声だと分かつたのはその人物が自分の正面に来たからだ。起きようとする自分を寝かせようとする。

「まだ安静にするんだ。昏睡状態だつたし、無理に動くと……」

それでも自分は忠告を無視し、立ち上がつた。呼び止めた男はそれでも自分を止めようとする。

「やめろ」

「でも君……」

制止する手を振り払い、逃げるようその場を去る自分。だが同時に何かをしなければならない気分だつた。

割と近くから銃砲撃が耳に入つて来る。何だろう。

「あそこだ、止めてくれ！」

先程の看護要因の男性が自分を指さして言つた。近くにいた兵士と思われる人物らが自分へ走つて来る。あつという間に3人の兵士達が自分の周囲を囲んだ。

「おとなしくしてくれ、悪い様にはしない。頼むよ」

前方の兵士が言つたその言葉に偽りは無い。だが自分は拒否していた。

次の瞬間、自分は地面を一蹴りしたかと思うと、3人の包囲から抜け出していた。後方で聞こえた狼狽。

行かなければならぬ気がする。嫌な予感と言うべきか。

知りたい、何が起きているのか、自分は知らない。

「あの少年さては、「トランセンド・マン」か！」

他人の言う事など意識の外。行きたい、その一念のみ。やがてテントの外へと足を踏み出し……

身震いした。

広い、何があるんだ？

反射的に涙が出てきそうになつた。

“それ”が何なのか、自分には分からなかつた。外に出て一歩ずつ歩く度にその感覚がこみ上げてくる。だが戸惑つている暇は無い。

何かが“見えた”気がした。強い発光だ。

周囲のあらゆる場所に散在し、まるでそれぞれの光が争い対立し合つてゐる様に見えた。光は強弱や色まで、どれも違つて“見える”。

その中で一番近い場所で対立している4つの光。3つと1つに分かれているが、数で劣つてゐる筈の1つがその強さで勝つていた。

この光は何なのか。そもそも光なのだろうか。疑問だ。

知りたい。だが進もうとすると体が震える。

進みたいのに止まってしまう。自分の体が自分の意思を拒否している。進み始める。

ハンはポールからの正面蹴りを受けた衝撃で地面に叩き付けられた。受け身を取つて起き上がつたハンは視界の右端に銃を乱射するチャツクの姿を捉えていた。

アサルトライフル型の銃は1秒で100発の銃弾をばら撒く。しかしポールには命中しない。間もなくチャツクは腹に拳を叩き付けられ、後方に吹き飛ばされた。

ポールは続いて丁度チャツクの反対側に居たアンジュリーナ目がけて突進する。

「2人とも準備してください！」

アンジュリーナが叫んだ。既に起き上がつているハンも、地面を背に付けているチャツクも、その言葉に同意した。

アンジュリーナが両手を前に突き出し、ハンが右手を突き出しながら駆け寄り、

チャックが銃口を向け引き金を引く。

ポールはまず自分の進行を妨げる不可視の圧力に行動を妨げられた。

抜け出す事は可能だが、今回は時間に余裕が無い。後方から迫る銃弾を捕捉し避けようとしても体が追い付かない。

チャックからの掃射に対し正面から見える体の表面積を最小限にする為、飛び上がり体の向きを地面と平行にした。

それでも避け切れず、腕に衝撃を感じながら痛みに耐える。チャックの銃弾に意識を傾けていた。

気を取られていたので、ポールから見て3時の方向に居るハンが、銃も使わず掌から「弾」を発射した事を察知するのが遅れた。気付いた時には仕方なく腕を振り払つて「弾」を防いだ。

ハンの「能力」は「電気操作」。空間から吸収した「エネルギー」を「弾」に変換して掌から射出し、その「弾」は命中した物体に対し電気エネルギーを発生させる。

痺れる感覚と同時にポールの体はただでさえ身動きが不自由な空中で一瞬硬直した。

それを見たアンジュリーナが更に両手に力を込め、表情も幾分真面目に見えた。接近中だったハンは右足で地面を踏み、左足を横に大きく突き出す。チャックはまだ引き金から指を放していない。

固定されたポールヘウエイトの乗つたキックが炸裂。銃弾が申し訳程度に命中する。吹き飛び地面を転がされるポール。3人は表情を緩めない。

「……済まんが、やはり私は要るのか？」

「2人だったらこんなに上手くは行きませんよ」

チヤックがそう言つたのは接近戦闘が殆ど出来ず射撃にしてもそれ程精度が良いとは言えない、という自虐的なものではあつたが、ハンは間接的ではあるがそれを否定した。

「でもこれなら勝てるかもりせませんね」

「まだ早い、相手はまだ手の内を隠している。まだ油断しちゃ駄目だ」「で、ですね……」

安心して言つたアンジユリーナだが、ハンに厳しめに（アンジユリーナ視点）言われて自分のドジな面を思いながら氣を引き締めた。

丁度起き上がったポールの方へ振り向く3人。体中砂埃にまみれた姿でもその表情には余裕が読み取れた。冷酷な、相手を昆虫や小動物の様に観察する目。

「……」

しかし何時までも何かを仕掛けてくる様子がない。何か考えているのだろうか？
「一体どうした？」

「……」

ハンが沈黙を破つたが、返事は無し。不審がつて手を出そうとしなかつた。アンジュリーナも同様に攻撃する気になれず、チャックに至つては首や関節を曲げてストレッチしていた。

「……そこの小娘が我々の研究所からある少年を誘拐した、そうだろう」

ポールの指はアンジュリーナを指していた。当然3人には思い当たりがある。やはりあの少年が目的だつたのか、3人は確信した。

「ああ知つてるとも。妙な少年だつたぞ。成長しているのに老化レベルは胎児と同じ。一体どういう事だ？」

「お前達は知る必要が無い」

チャックが質問に答え、その後の眩きを一蹴された。

「奴を引き渡せ。そうすれば我々は引き上げる」

その条件にハンとチャックは迷つた。あの少年を引き渡すだけで犠牲は抑えられる。だが、ハンは相手の機密として、チャックは研究対象として、興味があるものをそう簡単に捨てられない。

しかし、条件に乗るか乗るまいかの判断を表明したのはアンジュリーナだつた。彼女に迷いは無かつた。

「彼を渡したりなんかしないわ！」

「……理由を聞こう」

ハンとチャック、そしてポールが一瞬驚いた顔をした。ハンとチャックはどうしようか戸惑つたが、ポールはすぐに表情を戻した。

「彼が可哀想だからよ！」

ポールは呆れた顔をしたが、アンジュリーナの話は続く。

「あんな昏睡状態にさせるまで大量の麻酔を使って、しかも私が彼に初めて会った時は床にまるで捨てられたように横たわっていたのよ！ 一体彼に何をしているの？ 私は誰かが苦しむのは見たくない！」

「駄目か……」

今のはアンジュリーナの意見に対する返事ではなく、単なる独り言。交渉が無理なら力ずくで奪うまでだ。

次の瞬間、ポールの姿がアンジュリーナの視界から消えた。チャックも殆ど見えなかつた。何とか見えたハンでも反応するのに間に合わなかつた。

アンジュリーナは足元に衝撃を感じるとそのまま地面に仰向けに倒された。次に彼女は背中を踏まれ、彼女が自慢の長い髪の毛を引っ張られた。

「クソッ！」（何だ今のは⁈ いくらなんでも早過ぎる！）

「私には何が起きたのかさっぱりだ……」

ハンが何時もと違つて荒い口調で叫び、心の中で驚いていた。チャックの方は一瞬で何が起こったのか戸惑いを隠し切れていた。

「奴は何処だ」

「……」

返事が返つて来ないと見るや否や、ポールが左手に握る細長い物体の束をもつと引つ張る。

「いやあああああ!!!!!!」

「俺が右手の指をこの小娘に突き立てているのが見えるな？ 誰か言わんと指が小娘の心臓を止める。と言え」

ハンが仕方なく言おうと口を開きかけた。しかし、言う事は出来なかつた。

ポールの視線は、少なくとも3人の内誰かを向いてはいなかつた。その視線は丁度ハンとチャックの間。目の焦点から見ると距離はもつと遠いだろう。

何を見ているのか、疑問を解消すべく後ろへ目をやつた2人。

噂をすれば、と言つたところか。今まさに話題にしていた少年だつた。

真夜中のキャンプや兵士達の照明や月明りに照らされ、黒い髪と瞳が青く輝いている様に見えた。

ガウンの様な白い病人着、紫外線を浴びた事のない白い肌、足元が覚束ない弱々しい立ち方、何より目は眩しそうに閉じ気味だつた。

「アンダーソン……」

ポールが呟いた直後、彼はアンジユリーナを無造作に放しハンとチャックの間を通り過ぎていた。

一番早く反応したハンはその後ろを追い掛け、遅れたチャックは銃口を向け、アンジユリーナは倒れたまま両手を前に突き出す。

しかし、3人の行動はどれも間に合わなかつた。ポールの手がアンダーソンと呼ばれた少年に下された。

猛獸の様に突き出された指が少年の側頭部へヒット。少年はそのまま成す術もなく脱力したように倒れた。

「止めて！」

最初に食つて掛かつたのはアンジユリーナ。

「せめてあと一人誰か来てくれば……今は食い止めるしかありませんね」

「私が頼りなくて悪かつたな。だがやることはするさ」

ハンとチャックもそれに続く。

地面に倒れた少年はほんの少しだけ瞼を開いていた。何かを求めていた。

7 : Invisible

「ヒヤツハー！」

前線の中で1人だけ大声で笑いながら敵兵達を圧倒する存在が1つ。その名をリョウ・エドワーズ。ミドルネームはフロイト。

敵兵をサンドバッグみたいに殴つたり、静止した的みたいに銃弾を次々と浴びせたり、奇声を上げながらストレス発散の如く暴れまわる様は気が狂っていると言われても無理はない。

とはいえリョウは四六時中こうも荒くれている訳ではない。彼は前述の通りストレス発散をしている。

「てめえらの所為で折角仕事終わりの酒飲もうと思つても飲めねえじやんかよ！　おまけに超過労働だぜバカヤロー！」

愚痴を吐き叫びながら一番目立つリョウだが、彼は敵軍の撃退に最も貢献していると言つても良い。

最前線で慣れ回る事でまず味方達の負担や損害を減らす。次に大声を上げる事で敵の注意を逸らし、これも味方達の負担減に繋がる。そもそもリョウ自体が「特殊な存在」

なのでそれすらも敵を集中させる効果を持つ。そもそも彼の役割が陽動だつた。

（ハン、お前らの手助けは出来そうにないかも知れないが、頑張つてくれ。俺も頑張るからよ）

彼は見かけでは笑いながらも中身は真面目に考えていた。

前方に居る3体の二足歩行戦車がそれぞれの腕に抱える機関銃をリョウ目がけて掃射。

リョウは音速の3倍を誇る対物ライフル弾を体の動きだけで躲す。それも何十発と、ミスなく。彼にとつては慣れた余裕の動作だつた。

一瞬で中間の1体へ自分の銃の照準を定め、引き金を引く。しかし、銃弾は全く異なつていた。

今まででは対人用の一秒に100発と連射を重視したものだつた（それでも十分に対人物には使えるが）。しかし、人間より大きな機械を相手取る為の銃弾に切り替わつていた。

具体的には、弾速は今までとは変わらず音速の10倍。しかし、連射速度は1秒にたつたの2発。その代わり、銃弾一発当たりの威力は比べ物にならない。連射速度が50分の1だから威力は実に50倍にも上る。

こんな銃弾（砲弾と言つても差し支えないだろう）は現在の技術でも火薬と金属弾に

よる仕組みでは生み出せない。

速過ぎて操縦者には何が起きたのか分からなかつたに違いない。リョウからは狙いを定めた操縦席に穴が開き、操縦者もろとも二足歩行戦車背部のエンジンや燃料タンクまで貫き、爆発したのを確認した。

同じ銃弾をあと2発、隣の二足歩行戦車にも命中させ、爆発四散。

ため息をつく暇もなく、耳にバババババ、というプロペラの羽音を聞き取る。

振り向くまでもなくその正体は知っている。ティルトローター式（2基の角度可変メインプロペラが機体の左右に付いている）兵装ヘリコプター。どうでもいいがメインローター1基のみの軍用ヘリコプターは50年前にはほぼ廃れている。

ヘリコプターは左右の羽根を飛行機の様に前にして飛んでいる。側面の開閉部に居る兵士、そしてヘリに固定された重機関銃。そのうえヘリ下部に取り付けられた対地ミサイルやロケット弾が火を噴く。

リョウが飛び、先程まで彼が立っていた地面は銃痕や爆発による焦げやクレーターが出来上がった。

「通じねえよ！ 僕を倒したけりや原爆でも用意しな！」

飛び上がった勢いで銃弾が飛び交う中ヘリへ距離を詰め、その機体の外壁に足を着けた。

折り畳んだ足を一気に伸ばし、ヘリが前方へ揺らぐ。リョウは反動で反対側へ。彼の目の前には1台の戦車。言うまでもなく敵のものだ。

重力加速を上乗せしたスピードで頭より高く上げた右足を着地と同時に振り下ろす。戦車の豪快な破碎音と同時に、後方で宙から爆発音。

上部を大きく抉られ動作不能の戦車を確認しながら、後方のヘリが爆炎を上げながら墜落したのが見えた。

「ナイスだぜ、誰かさん」

今のはロケットランチャーによる爆炎か何かだと見当は付いている。どちらにせよ撃墜した事に変わりはない。味方兵が居る方向へ親指を立てて見せたが、誰なのかは分からぬ。

「さあて、もつと来やがれ……」

咳きながら別の敵戦車に向けて走り出そうとした。

しかし、リョウは途中で足を止めた。目標の戦車が突然爆発したのだ。

爆発寸前、リョウは戦車のエンジンを貫く様に穴が開いたのが見えていた。

「俺の獲物を横取りすんなよ」

『いいや、俺の獲物だった。空対地攻撃とあらばこの俺にお任せありだ』

『宣伝するくらいならさつさと手伝え』

『今さつき邪魔すんなとか言つてたじやねえか』
「記憶に無いな』

リヨウの発言に合わせて耳の通信機から返事が来る。若く強みのある青年の声だ。予想外の事が起きてもりヨウは手あたり次第という感じで敵戦力を削っていく。時々、敵の機甲車両に大穴が穿たれる。

「よく来てくれたな」

『まあ、偶々近くを「飛んで」たもんね。リヨウ、調子はどうだ?』

「最悪だ。くつろぎの時間を邪魔された。レツクス、お前の方は?』

『まあまあかな。今そつちへ「降りる」ぜ』

通信が切れて間もなく、上空から大量の銃弾が降り注ぎ始めた。死角からの攻撃に敵兵達は成す術もなく撃たれ死ぬだけだった。

敵が上空に意識を向けるや否や、リヨウがそれを許さない。隙を見せた敵兵はたちまちリヨウの餌食になつた。

数秒後、バコーン！　という隕石でも落ちたかの様な音と共にリヨウの目の前にあつた戦車が押し潰された。

衝撃音がした所を見れば、リヨウと同じかそれより年下に見える青年の屈んで着地した姿があつた。

「待つたか？」

「遅えよ、最初からお前も来てれば良かったんだよ」

愚痴を吐きながらもリョウの顔は友との再開を喜ぶように笑っていた。2人は一瞬で近づき、ハイタッチをした。

レックス・フィットシユバーン、23歳。身長はリョウより僅かに低く、184センチメートル。ラテン系の黒髪の白人だ。口調はリョウと似て軽いが、見た目はそれとは対照的に整っている。

「前線へようこそ」

「前線？ そんなもの海辺まで押してやろう」

「よっしゃあ。それじゃあ皆、聞いてるか？」

『どうしました？』

リョウが通信機を付け、味方の兵士の一人から返事が来た。

「半分は前線から離脱して他の援護に当たってくれ。まあ俺達2人でも足りん事は無いだろうが、念の為だ」

返事も聞かずリョウ達は通信機を切ると改めて正面を向いた。

だ。

「見え」ない。

動きが速すぎる。存在は分かつても何をしているのかは分からぬ。一瞬、ドカツという衝撃音。同時に視界からはつきりしたもののが見えた。

……頭が痛い。

まだ側頭部に受けた打撃のダメージから回復し切れていないらしい。冷たい砂の上に置かれた自分の体が思う様に動かない。首を動かして辛うじて見えたのは……

吹き飛ばされ、地面に足を着けてブレーキを掛けで停止する真剣な表情の青年。起き上り、地面を蹴る。青年の姿が見えなくなつた。

何が起きている？

どうやつたら「分かる」？

「喰らえ！」

何も分からぬ状態の中からはつきりと男性の叫びを聞いた。そしてまた「止まつた」。

銃を前に向けるいかにも不味そうな顔をした推定40代の男性。そして、その銃口の延直線上を避ける様な体勢にしながらその男性の胸にブロー気味のパンチを当てるのは先程自分へ打撃を与えた張本人である若い男性。

この男性は表情を変えずに怯んだ次に下段回し蹴りで中年男性のバランスを崩し、アツパーで宙に浮かせた。

身動きが取れない中年男性へと飛び上がりつつ連続蹴りを決める。そして一番高い位置に達した時、若い男性が一回転して勢いを付け、その回転を蹴りに繋げて目の前の相手に叩き付けようとする。

「チャックさん！」

今度は少女の心配する声。その方向を振り向くと、月明りに照らされて輝く長い髪が

目に入った。

その表情は、他の3人とは明らかに異なっていた。迷っていた。戦場に居るというのに虫すら殺せなさそうな、優しい顔だった。

自分には彼女が嫌々この戦闘に参加している様に思われた。

ところで、少女は中年男性に向かつて名前と思われる言葉を発したかと思うと、空中の二人に向かつて両手を突き出した。

若い男性が今にも蹴りを放とうとしている時、その男の回転が遅くなつた。まるであるの少女が何かを手から何かを発して止めた……

何か？

少女の手を見る。「何か」が見えた。

起き上がりつてテントから出た時、同じものを見た。光っているように見える「何か」。何なのか分からぬ。

その光の筋を辿つて見る。何故か回し蹴りの勢いが落ちた男へ向かつていた。あの光が止めたのだ。そう「感じ」た。

状況はまだ回転速度の落ちた男のキックは中年男性に命中しない。そこへもう一つ人の気配を「感じ」た。

地面から飛び上がり、蹴りを出す最中の男へ向けて蹴り上げが炸裂した。

「見え」ない筈のものが「見え」た。いや、「感じ」取つた。

やがて3人はそれぞれ体勢を整えて着地し、少女の方も向けていた手を戻した。

「危なかつた……済まんな若者達よ」

「ハンさん、誰か動ける人は居ないんですか?」

「まだ皆苦戦中だね。リョウは相変わらず先頭で頑張ってくれているし、トレバーは敵の戦力を割いてくれている。先程レツクスが来てくれたのは良いが一番危うい前線の方に行つてる」

「せめてあと一人誰か居てくれれば良いのだがな……」

3人の会話だ。

一方、3人を相手にしている1人の男は、無表情のままそこに立つていて。所謂棒立ち状態に見えるが、それは余裕の為だろう。

男が一瞬こちらを向いた……が、すぐに無視する様に視線を逸らした。自分を放つておいても問題無いと判断したのか。今は起きているこちらに手を出すつもりはないらしいが……

すると、この1人と向き合つていた3人の内の少女が相手の一瞬の視線に気付いたらしく、こちらを向いた。

先程の1人の男性とは確実に違う、視線だった。自分を受け入れ差し伸べるような

....

変わらず身体は動かない。それでも動きたい。
辛うじて手を前に出す事が出来た。

アンジュリーナは相手の男がチラッと横を向いた気がした。だから若年の好奇心に釣られて彼女もその方角へ視線を向ける事となつた。

さつきの少年が、砂に身を伏せながら朦朧とした定まらない視線で何かを見ている。
何かを求めているのか。動きたいのに動けない。砂まみれの病人着を着た挙句真っ

白な肌と霞んだ眼が弱々しさを物語つている。

（早く助けてあげたいのに……）

相手の男がそうさせない。それどころかその少年を更に傷付ける。

傷付いているのが老若男女問わずそして敵であつたとしてもアンジュリーナの心は動く。

少年が、その重力で今にも垂れ下がりそうな手をこちらに伸ばした。

（苦しんでいるの？）

アンジュリーナは完全に気を取られていた。

視野の端に「エネルギー」が、そう感知した瞬間既に手遅れだつた。振り向いた時、隣のチャツクが殴られる光景が見えた。

チャツクを挟んで反対側のハンが咄嗟に反撃を試みる。両腕を手数重視で素早く自在に動かし、あらゆる角度からの攻撃を可能とする。

相手はそれをも上回る速さでハンの攻撃を確実に防ぎ、威力に重点を置いた攻撃でハンの攻撃を巻き込み不発させながらハンの余裕を削る。

ハンも負けじと握った拳を平手に変え、逸らして防御し、相手の腕を自分の腕に絡める。

引き離そうとする相手だが抜けない。その体勢で前蹴りを放つが、ハンの膝に阻まれ

る。

相手が出した足を素早く畳んだかと思うと踵をハンの膝裏に入れ込み絡ませる。そのまま足を後ろに引き、ハンを引っ掛け倒そうとする。

投げられる途中で体勢を変え、綺麗に着地したハン。絡めたままの両手で体を支え、地面を一蹴りして両足蹴りを繰り出した。

「ぬうつ！」

不意に出た相手の男の声は驚きよりも掛け声に近かつた。直後、ハンの全力を注いだ蹴りが男の胸にクリーンヒット。

だがどういう訳か、蹴りを真正面から受けた男の上半身が僅かに後ろに逸れるだけ。それ以上は何も起こらなかつた。

対するハンの方はといふと、まるで堅い壁を蹴った様に反動で大きく後方に飛んだ。当の本人であるハンは勿論、その光景を見ていたアンジュリーナも驚きと疑問を隠し切れなかつた。

味方から突き放され、呆然としていたアンジュリーナ。彼女に向かつて相手の男が右手を熊手にして勢い良く繰り出す。

少女は突然の早すぎる出来事に何も出来ず、ただその場に身を任せしかなかつた。しかし、何も起こらなかつた。いや、起こさせなかつたのだ。

次の瞬間、アンジユリーナの目の前には彼女とほぼ同じ身長の少年が立っていた。そして、その弱々しく細い両手は相手の拳を正面から受け止めていた。

そ

「見え」た

8 : Convergence

「何がだ？」

「“それ”がだ」

次の瞬間、ポールは阻まれた右手を十数センチメートルばかり引き戻すと再び同じ所へ打ち付ける。少年の方は同じく攻撃を掌で受け止めようとする。

接触。少年はしつかり受け止めたにも関わらず、後方へ大きく吹き飛んだ。その様子は大質量のトラックに跳ね飛ばされる人間か。

予期出来なかつた少年はそのまま背中から地面に不時着。取り残されたアンジュリーナ。

ポールは1メートルの距離に居るアンジュリーナを見詰め、動かない。

「何故俺に向かつて来ない？」
「……」

アンジュリーナは言えなかつた。例え敵でも命を奪う事は彼女の望む事ではない。
だからこそ戦闘においては味方の防御を行う役割しか担えない。

「ならば……ぬおつ?!」

手を下そうとした。ポールは結局行動を想定通りに終わらせる事が出来なかつた。彼は突然上体を後ろへ反らした。

その体を掠める軌道で銃弾が通り過ぎた。その様子はアンジュリーナにも見えた。
（……あの男、まさか全員片付けたとでもいうのか？）

ポールの視線の先には、ライフルを構えたトレバーがスコープでこちらの様子を窺いながら銃口を向けていた。

「……味方の残存状態を教えろ」

『現在こちらの戦力は半減しています。ですが相手の損害は3分の1にも満たないで
しよう』

『お前達は先に撤退しろ。私は後で行く』

『了解』

通信が切れため息をつくポール。それは諦め、ではなく面倒さだつた。

周囲にちらちら見える敵兵達は皆撤退を始めたらしく慌ただしく後退している。

「良くも「奴ら」を全員片付けたものだ。その点は称賛しよう」

「大した戦力ではない、俺の足止めが目的だつたのだろう。やはりあの少年が目的か」
ポールの心が籠つておらず抑揚のない褒めの言葉に、トレバーが見通すように言つた。二人はまだ地面に背を着けている少年を見た。

「なら破壊するまでだ！」

「むつ?!」

ポールが地面を蹴り体を後方に移動させながら右手を体の後ろへ折り曲げ、トレバーがそれを追おうとする。ポールがアンジュリーナを通り越し、トレバーは未だにポールが今さつき立っていた所にさえ届いていない。

アンジュリーナがワンテンポ遅れて追跡すべく振り返り、懇願する様に手を伸ばす。だがその速度はポールに到底追い付かない。

ハンが側面から阻止しようと動いていたが、それでもスピードに違いがあり過ぎた。
(止まつて！)

その少女の願いに応えたかのように、

「止まれえい——！」

ハンの反対側から大量の銃弾。

ポールはそんな事態を予想しておらず、咄嗟に腕で頭部を守り立ち止まるしか方法はなかつた。

立ち止まつたポールを直ちにアンジュリーナ、ハン、トレバーが囮んだ。

「やつとまともな出番が来たらしい。しかしやつと命中とは……」

と呟くのは離れた位置に居たチヤック。言うまでもなくさつきの銃弾は彼が放つた

ものだ。それにアンジュリーナだけが会釈程度に礼をした。

「どうする？　お前は勝てん、そりゃどう」

「確かに、味方は殆ど撤退したし、お前達四人相手では歯が立たないだろう。」

トレバーが尋ねたのに対し、ポールはその内容をあつさり認めた。だがポールはまだ何か言いたげな顔をしていた。

「だが、お前達など目的の範疇ではない」

次の瞬間、4人の視界に映る敵の姿が揺らいで見えた。そして目の前から消えた。

(速過ぎる!)

慌てて少年の方を向く。1番目に反応したトレバーと2番目に反応したハンが追いかける。3番目に反応したアンジュリーナが手を向け、4番目に反応したチャックが銃を向け引き金を引く。

ポールがまだ倒れている少年に向かつて拳をナックル氣味に振り下ろす。

ガコッ！　効果音にすればそんな何か物が潰れた音だ。

起きかけていた少年が一瞬にして地面に伏した。ポールが少年へ突き出した拳を引き、通り過ぎ去る。

アンジュリーナが出した手が脱力し垂れ下がった。トレバーとハンが少年に駆け寄る。チャックが銃を下ろしその場に座り込んだ。

「……頭蓋骨の右半分にヒビが入っている。脳のダメージも大きいだろうな」

トレバーが見透かしたように言つた。触れても調べた動作もなしに、だが他の3人は本當であると知つてゐる。

少女は目を涙で滲ませながら少年の元に来るとその場で座り込んだ。長い髪が少年の顔に掛かりそうだ。

「お願い、生きていて……」

ホールが爆破された研究施設の非常事態用仮設テントに戻ると、中佐が椅子に座つて

待っていた。

「兵士達は撤退させたそうだな」

「戦力は思つた以上でした。こちらがこれ以上用意するのは難しいでしょう。ですが「アンダーソン」に関しては捕獲こそ出来ませんでしたが、脳に損傷を与える事は出来ました」

「まあそう立つてないで座れ」

中佐は興味なさそうに言うと、手で自分の正面にある椅子を勧めポールはそれに従う事にした。話は再開する。

「……では「アンダーソン」は始末したのか？」

「いえ、覚醒状態と思われる兆候にありましたので、確実に仕留めたかどうかは分かりません」

「そうか……ならば次の機会を狙おう」「と仰りますと?」

「次の制圧作戦だ。奴らもそう遠くまでは行かないだろう。行先など見当が付く奴らが仮拠点としていた地点から半径200キロメートル圏内を中心に調べろ」「了解。分かれば掃討作戦という事ですね」

「そういう事だ。「アンダーソン」の確認はついでとして行えば良いだろう。今回は相手

を把握出来ていなかつたとはいへ必要程度の戦力だつたが、次ならばもつと用意出来る。それでだ……」

2人の会話はまだ続く。2人は椅子から体を前に傾けていた。

「よし、生存者は確認完了したらしいぜ」

「では引き上げる準備をしよう。ベースキャンプを片付けるぞ」

リヨウの発言に対してもハングが味方の兵士達に指示を与えた。闇夜を照らすライトを頼りに、慌ただしく動き始める者、マイペースに動き回る者、それぞれが行動を開始す

る。

「しかし、来てくれて助かっただよレックス」

「いえいえ、俺だけしか近くに居なかつたものですから」

「謙遜しなくて良いよ。君のお陰で敵が撤退を早めたし」

ハンの褒めにレックスが頭に手をやりながらリョウの時とは打つて変わつて礼儀正しく答えた。

「そういえばアンジュちゃんは？」

リョウが訊く。

「終わつてからずっと自分の任された部隊の死んだ仲間達を弔つてゐるよ。今は例の少年の所に居る筈だ」

「一応聞いたが、敵の目的はそいつだつたんだろう？」

「らしいね。あの少年は今脳に衝撃を受けて意識不明だ。だが、もし彼が「トランセンド・マン」ならば、また起きる筈だ」

「そん時に詳しい事を訊こうつてか」

まあね、と答えたハンは兵士達に混じつて片付けを始めた。リョウは嫌そうな顔で参加せず逃げたが。一方でレックスは去るリョウを見ながら、仕方ないな、という顔をしてハンに加わった。

「言つておくがここは教会ではないぞ。私は医者であつて死者を蘇生する神官ではないのだぞ」

「違う。今詳しい分析が出来るのは貴方しか居ない」

チャツクがトレバーに向かつて冗談を交えて言うと、トレバーの方は真面目な顔を変えず応じる。

「分析かね、分かつた。しかし、こんな気味の悪いのをよく持つて来たな。最近の若者はどんどん過激になるのか?」

チャツクが吐き気を示す様に口に手を当てたのも当然だろう。何故なら、トレバーは先程この医療テントに平然と生々しい傷跡の付いた死体を抱えて入って来た。しかも、死体は頭と胴体が離れ離れになつてゐる特典付きだ。腕や足程度の肉体欠損は流石に軍医であるチャツクは平氣だが、こう慣れていない惨い死体を見れば誰だつて気持ち悪く思う。

「トランセンド・マン」にしては標準よりも劣るし実戦向きとは思えない奴らだつた。俺はこいつらに足止めを喰らつた。一人一人の実力は大したことが無いが、集団で対「トランセンド・マン」に関してはかなりのものだつた。これと同じ奴があと15体も居たが、それらの死体は全部焼失した」

長い話にチャツクは平手を前に出して中断させた。

「要するにこいつを調べてくれつて事だろ？が、待つてくれ。『焼失』だつて？」

「死んでから死体が突然発火して止める間もなく全部燃えた。だが、この死体だけは脳と身体が繋がつていない。脳からの命令によつて発火が起こつたのかも知れない」

「成程……」

「それと他の同じ奴らを「視た」のだが、奴らは「同じ」だつた。身体的特徴に多少の違ひはあつても精神の区別が付かなかつた」

体から切り離された頭を見ながらチャツクは吐き気を我慢しながら考えた。

「……」んな話は聞いた事もない。トレバー、こりやお手柄かも知れんぞ。あの「管理軍」の施設は特に「トランセンド・マン」に関する研究を行つてゐるとは噂に聞いた。その一部の可能性が高いだろう

「それはあの少年もそうだろう」

「だな」

ベッドに横たわる少年を目線で示して言つたトレバー。少年は幾らか顔色が良くなつた気もするが、顔が動いていない。呼吸も実質的にゼロだ。

「しかし、アンジュリーナのやらも看護熱心だな。ナース服を着せてやつたらまさしく天使だろうな」

トレバーはチヤックのジョークを無視し、少年とそれに付き添う少女の姿を暫く眺めていた。

アンジュリーナはまだ少年の傍に寄り添つてゐる。

「ごめんね、私のせいでこんな目に合わせてしまつて……」

その罪悪感は少年の容体が良くなつても悪化しても消えないだろう。彼が目覚めた
ら彼はどう思うだろうか……

頭蓋骨骨折はチャック医師の「物質合成」によつて新しい骨を生み出し動いても支障
がないまでに治つてゐる。だが無傷の身体であつても脳のは必ずしも治る保証がない。
脳細胞は本来増殖機能が無いからだ。作り変えるなどしたらとんでもない事になる。

少年の顔は動いていない筈だが、彼女には彼が怒つてゐる様に思えた。

あの時、彼を助けるべきだったのか。自分の信条に反した事までも考へてしまつてい
た。

「でも今は、治つて欲しい。私の事をどう思つてゐるかなんていい。貴方が無事なら
……」

俯きながら彼女は左手に違和感を覚えた。長い髪で視界が邪魔され見えなかつたの

をどける。

アンジユリーナがベッドの端に置いていた手に、誰かの手が置かれていた。手は他でもない、少年の肩から伸びていた。そして、半分だけ開いた目が太陽でも見るかのようにこちらを覗いていた。

Category 1 : Recognition 1 : Infant

眩しい。目が開かない。何故眩しいんだ。

何も見えない。手探りで辺りを調べる。

すぐに何か柔らかい触感がした。それが人の手である事は見なくても分かつた。こちらに合わせて向こうが手を握り返した。

誰なんだ？ 頬が見たい。だが見えない。

「どうして眩しいんだ？」

握られた手から困惑が読み取れた。

「えっと、眩しいの？」

答えた声はまだ20代以下であろう少女のものだ。きっと彼女にとつては普通の明るさなのだろう。

「そうだ」

そう答える。眩しくて良く見えなくても相手の動きは大体分かる。何かを探して見まわしている様だ。

「これでどう?」

少女が自分の顔に何かを覆い被せた。それがタオルである事は見るまでもない。これまで目への刺激は丁度良くなつた。

「何故手を握つている」

そうだ、何故放さない? それに、あまり良い気分ではない。

「えつ? あつ、ごめんなさい……」

別に悪く言つてゐるつもりでは無いのだが、何故か彼女は戸惑いながら謝つた。手は直ちに解放された。

まだ知りたい事は沢山ある。

「ここは何処だ?」

「医療テントよ。まだじつとしてて、貴方頭を強く打たれたのよ」

医療テント、一度起きた時と同じ所か。頭を強く殴られたのは覚えてゐる。あの時は速過ぎて何が起こつてゐるか良く分からなかつた。

いや、そう訊いたつもりじゃない。

「外は乾燥した砂地みたいだつた。何処に位置してゐる?」

「い、位置?」

困つた様に言つた少女から答えは返つて来なかつた。代わりに大人の男性の声が答

えたのだ。

「カルフオルニアの砂漠地帯だ。」

砂漠、何故そんな所に？

「説明してやりたいのは山々なんだが、話すべき事は山ほどあるし、その前に色々やらなければならぬ事もある。少年、お前もまだ起きたばかりで体が辛いだろう。だから今は休めよ。医者としての命令だぞ」

「……分かつた」

滲んだ涙はまだ引かなかつた。

「貴方は誰？」

今度は先程の少女の声。自分への問い合わせという事は明らかだ。

「私はアンジユリーナ・フジタ。アンジユとも呼ばれているわ。」

誰か……名前……確か……頭が痛い。

いや、思い出した。というより何かが教えてくれた気がした。

「……アダム……それが名前だ……多分……」

確信のない声だが、相手からは不信感を読み取れなかつた。

「アダム、良い名前ね。」

そうなのか？　いや待て、名前はこの際分かつたとしよう。だが、それ以外は……

「何も分からぬい……」

こうして少なくとも対話する為の知識はある。しかし自分に関する事が分からぬい。

自分の手が安心を求めて無意識に意味のない動きをする。

「何も覚えていないの？」

「……自分は誰なんだ？」

息が苦しい。耳にも入つていなかつたノイズが煩い。眩しさが欲しい。教えてくれ。その時、何かが触れた。忙しく動く右手を抑えた。

息が戻つた。静かになつた。光を浴びてもいよいよに明るかつた。

「大丈夫、落ち着いて」

何の説得力も無かつた。だが自分でも心拍が下がつたのが分かつた。何故なんだ？

「貴方を助けてあげるわ。今はまだ思い出せないかも知れないけど、少しずつで良いわ」

左手でタオルを取つた。

見えた。眩しい……

アンジュリーナは目を閉じた少年に多少崩れた毛布を掛けなおしてやつた。

「寝たみたいです」

「そのようだな。やはり私の考えは間違つてはいない様だ」

「考え、ですか？」

少女に訊かれたチャツクは得意げに語り始めた。

「前に言つたろうが、この少年は所謂出産間もない赤ん坊と同じだつて事だ。さつきの行動を見るだけでも分かる。外界と繋がる為の知識はあつても、実際に今まで外界なんかと関わりを持たなかつたに違ひない」

チャツクの得意な口調は次第に真面目さに変容していた。

「あの子は記憶が無いつて言つてました。きっとその事も関係するんでしようか？」

「記憶喪失だつてのは私も聞いた。しかし人格的なものは記憶を失つても残るのだよ。」

記憶は電気信号だが、人格というのは大きくは成長過程の環境に左右される。要するに記憶と人格は別物なのだ。つまりあの少年は記憶が無いどころか人格を形成する機会が一切無かつたという訳だが……」

話を一旦止めたチャック。自分が言いたい事ばかり言つてるのでアンジユリーナがついて行けているのか確かめる為だ。それを察知したアンジユリーナは、大丈夫、と頷く。チャックが頷き返して再び口を開いた。

「で、あの少年についてだが、先程彼の遺伝配列を調べた結果が出た。戦闘中でも電源が切れなくて良かつたよ」

発言後、チャックは少年の横たわるベッドの隣にある椅子に座つた。表示された机の上にあるコンピューターのLED画面を指さして言う。アンジユリーナがチャックの傍に立つて見る。

「遺伝子配列の結果で分かつたのが、彼が「トランセンド・マン」であるという事だ」「やつぱりそだつたんですか？」

「そうじやなきや説明出来ん事もあるだろう。しかし、興味深い所もあつた。これを見てくれ」

視線ポイントによって画面に表示された二重螺旋の構造物が動く。チャックが指を指したところで動きは止まつた。

「この部分だ。分かるか？」

「ええっと……」

少女の困惑した反応も無理はない。素人にいきなり専門知識を教えたってどうせ覚えない。

「済まん、説明する。生物のDNAが4種類の塩基対からなるのは知っているだろう」「はい、アデニン、グアニン、シトシン、チミンでしたつけ……それで、これのどこが興味深いんですか？」

アンジュリーナは画面を見てもさっぱり分からなかつた。そこでチャツクが指を目を素早く動かして何回かクリック音が鳴つた。

新たに表示された6種類の画像。物質の構造を示す立体CGだ。

「この右4つは生物なら皆持つてある塩基対だが、問題はこの左2つだ……」

チャツクは何故か間を置いた。気分が高ぶつてているというかこれから言う事に緊張している感じだつた。

「未知の構造物だよ。残念ながらDNAの塩基対は性質が決まつていてのを利用して検査するから、条件に当てはまらないこれらがどんな構造かは分からぬがね」

「……それじゃあ、彼はそのDNAの所為で何か異常でもあるんでしようか……」

「可能性は否定出来ないね。まあここにある装置では分からんよ。帰つたら詳しく調べ

られる」

「そうですね……あつ、皆さんもう撤収準備しているみたいですよ」

「おおそろか。話に夢中になつていたな」

「話は一旦終わり、椅子から立ち上がるチャック。アンジュリーナは既に手伝いに入つていた。

「テント片付け終わりました。他ももうすぐ終わります」「そのようだな。皆、ご苦労。早く帰つてゆつくり休もう」

ハンが気を緩めて兵士達に向かつて言う。兵士達は「終わった」だの「疲れた」だの言いながらそれぞれの車両に乗り込む。

「しかしレックス、君も良くやつてくれた」
「いえいえ、なんのこれしき。スピード出動なら俺にお任せあります。そういうやりヨウはどうしたんです？」

手を横に振ったレックス。ついでにと、いう感じでハンに訊いた。

「さあね、まだストレス発散足りてないだろうし……まあ先に帰つてるんじゃない？」

「あいつらしいや。さて、俺達も帰りましょーや」

「そうだな」

後ろを見ればもうすぐ顔を出す朝日に照らされて、もうすぐ片づけが終わりそうな兵士達の姿が見えた。

「ハン、言つておきたい事がある」

第三の声、レックスやハンよりも年配で落ち着きがある。そして明確な意思がある。不思議と抑揚は無かつた。

「勿論だ。君が自分から言つてくれるのは正しい事だと信じている」

トレバーの表情は固く簡単に変わりそうになかった。その雰囲気に影響されて2人まで難しい顔になる。

「ハン、考えてみろ。敵基地を奇襲し大打撃を与える筈だつた。だがこちらが襲撃された時、相手は少なくともこちらの戦力を上回つてている程残つていた。どういう事か分かるか？」

「……まだ何か隠されているとでも言うのかい？ それじゃあこの作戦は……」

「責めるつもりは無いのだが、まだ秘密が多く残つている筈だ。あの少年や俺が持つてきた死体だつてそうだろう」

トレバーの無機質な断言はただ現実を伝えるだけ。ハンは頭を押さえていた。

「これは失敗だな……2か月も前から練つたというのに、入念に調べたつもりだつたのに……犠牲者をこんなに出す上にまだ判明していないことがこれだけ出るとは……」

「自分を責めないで下さいや、ハン師団長」

独り言で押し潰されるハンを見かねて、慰めようとレックスが声を掛ける。

「それにこれから気を緩めてなるまい。帰還しても奴らはあの少年を狙いに来る筈だ」

「……ああ、まだ分からぬ事が沢山だ……もつと念入りに調べないと……」

ハンが独り言の様に言う。上司の迷つた様を見かねたレックスが声を掛けた。

「いや、もう念入りに調べたんでしよう。敵の機密管理は少なくとも俺達を内部の深い所に入れさせないだけの防諜技術があるつて事でしようよ。でもハンさんならきっと

火の壁だつて破れる事も出来ますよ」

「……いや、外部から侵入して調べた時にシステムの全容は既に分かつてはいるんだ」「と言うと?」

「恐らく向こうでは外部との関係を持たない独立したシステム回線を持つているに違いない。それも自分が調べたよりも大規模にね。外部からの侵入が出来ない以上どうやつて調べるか……」

具体的に言つたハンの顔は悩みが幾分消えていた様に見えた。

「それつて無理じやないっすか?」

「違うんだ。カイルやドニーの力を借りたいと思つて」

「ああー、カイルなら障害物お構いなしだし……でもドニーさんはどうなんでしょう?

?

「彼は言つていたよ。必要な時が来れば分かる、つて」

「あの人らしい言い方ですね」

レックスが笑いながら答え、ハンの表情は更に和らいだ。ちなみにトレバーは話に加

わる意思を表明する代わりに、腕を組んで少し離れた車両にもたれ掛かっていた。

「さて、帰ろう。リョウも言つていたな。明日の事は明日考えれば良い、つて。まああいつが単に面倒臭がりつてだけだが」

「もうお腹ペコペコです。朝食は焼き立てのタコスでも食いに行きましょうよ」「賛成。ポークのタコスなんてどうだい？ 激辛にして、あとフレンチのコーヒーも一緒にね」

「韓国人の嗜好は分かりませんわ。第一朝だつてのに濃すぎません？」

「それが丁度良いんだ。高級な日本牛よりも安上がりなアメリカンポークの方が僕にとつてはご馳走だ。脂身がたまらないのさ。食にこそ刺激が必要だ」

二人は笑いながらジープの運転席と助手席に座り、ジープは発進し既に走行中の車両の群れに加わった。

2 : Calm

「チキンタコス3つだ。1つは唐辛子3倍にしてくれ」

「あいよ。仕事は大変だったかねリョウ」

「おう、お陰さまで。別に元気だ。そつちこそどうなん? あつあとコーヒーも3杯、

こつちも1つは濃く淹れてくれ」

「オツケイ。最近かね、変わらんよ。でもそう安心出来ない世の中だからなあ……」

「働いた後で嫌なフラグ言うなよ」

「すまんすまん」

リョウが通りに面したカウンター席から頬杖をつきながら後ろを見渡した。

朝日に照られたロサンゼルス郊外。通りには飲食店が並び、賑わいを見せている。

太陽はロツキー山脈から八割方顔を出した所だ。リョウからはテーブルを正面にすると右側にある。

遠くを見れば都市の中心部にあるビルが見える。せいぜい60メートル程度だろうが。

第三次世界大戦によつて世界の重要な都市の殆どは破壊され、戦争が終わつて西暦が廃

止され、それから17年後の「地球暦」0017年現在となる。アメリカ合衆国は戦争が始まつた西暦2070年から真っ先にあらゆる国家の敵となり、崩壊を余儀なくされた。経済的理由、宗教的理由、何であれアメリカ合衆国は主に発展途上国、中南米国家、イスラム教国家、多数から爆弾やミサイルを浴びせられた。

メキシコ国境に近かつたカルフォルニアは真っ先に攻撃を受け崩壊した。しかし、アメリカ合衆国に敵意が向けられなくなる程衰退すると、州規模の経済圏の上で大戦終結前から再建が進んだ。あの中途半端な高層ビルも一応復興が進んだ証なのだ。

「浮かない顔してどうした?」

「取つておいてくれたみたいで助かるよりヨウ」

ぼんやりと見渡していたリヨウに声が2つ掛けられ、目の前のメキシコ料理店に引き戻された。

「よう、チキンタコスとコーヒーにしといたぜ。ハン、お前の分は両方とも濃くしてもらつた」

「どうも。僕はポーカーが良かつたんだけどね」

「てカリヨウ、途中で抜け出しやがつて大変だつたんだぞ」

声の主達である、ハンがお礼と独り言を述べ、レツクスが軽く顔をしかめた。リヨウはそれぞれの反応を見せる2人にタコスとコーヒーを手渡した。

「どいつもこいつも働け働け言うくせに何もくれねえんだよ。産業革命からプラツク企業つて何で無くならねえんだよ」

「さあ。言つておくが「僕ら」は法に従つた企業なんかではない、法から外れた「組織」だ。その事は分かっているだろう」

「おう……何でアジア人はこんな説教が好きなんだ？」

リョウは話を聞く気が無い様に返事し、愚痴を冗談を利かせて呟いた。

「ほれ、出来たぞ」

「サンキューおじさん。こここのタコスは良いっすね、特にこのサルサに入つてるアボカ

ドが良いんですよ。あと焼き方も最高」

「分かっているなレックス」

「でもこれ、何か辛過ぎだと思いますが……」

「そこは好みだ。生まれつきでね」

「どうか？　あんまり物足りないぞ。いつもよりマイルドじゃないですか？」

レックスの意見といがみ合つたのはハン。2人は頭をひねつて自分のをもう一度一
齧りする。

「……やっぱ辛い。てか痛いし涙出て來た」

「……やっぱ辛くない。店長、唐辛子をもつとくれ」

レックスは口直しに、ハンは唐辛子が来る僅かな合間に、それぞれのコーヒーを一口含んだ。リョウがニヤリと笑つた。

「苦つ！」

「薄つ！」

「ハハハハハ！」

予想を超える苦味で口の中の液体を吐き出したのはレックス。期待していたより薄くて驚いて思わず一気に飲み込みむせたのがハン。そして、それらを予め起こるのが分かつていた様に笑い出すリョウ。店長はリョウを呆れ顔で見ながらため息をついた。

「またお前か……」

「へへっ、まさかそのまま食うとは思わなかつたぜ」

「てめえ、後でなんか奢れよー」

「分かった分かった。昼飯は俺の代だ」

「全く、昔から変わらんなお前は」

「まあ、お前らはもつと楽しめよ。そうじやなきや生きてられるか」

「お前は何時も能天氣で良いよな……」

リョウは三人から呆れの視線を送られても笑顔を崩さなかつた。3人も過ぎた事だ、
トリヨウに加わつて笑つた。

「ところで、他の皆は元気か？　あのアンジュとかいう可愛い女の子が居たろう」「アンジユリーナは良くやつてますよ。ただ今は元氣無さそうですが……」

ハンの沈みがちな返答に店主も声を落とした。

「……なら今度会つた時伝えてやつてくれ、今度来たらタコスでもトトポスでもブリトーでも何か一つタダで食わせてやる、と」

「良いなあー。じゃあ俺も超過労働だから何かくれ」

「お前は敬語というのを知らんのか？　それにさつきは元氣と言つてなかつたか？」

「さあ、健忘症でね……ハア、分かつたよ」

店主のしかめ面を見たりヨウは諦めた。店長は笑いながら鼻をフンとならし、店の厨房奥に調理する為か姿を隠した。

少しの間、リヨウはタコスを完食し、ハンとレックスは持つていてのを交換して食べている途中だ。ハンは何故か首を曲げて骨を鳴らしていたが。

「で、ハン、何か言いたい事でもあるのか？」

「良く分かつたね」

「これでも7年の付き合いだろ？」

リヨウからの提言でハンが意外感を覚えた。レックスも「良く分かるな」と表情に出していた。レックスは3人の中で一番年下であり、2人との関係もそう長くはなかつ

た。

「……例の少年がまた起きたそうだ」
「本当か？」

「言葉は話せる。歩きも可能だ。チャック先生によればやはり「トランセンド・マン」だ
そうだ。今は先生とアンジュリーナが付き添つているつてさ」

「本当に大丈夫なのか？」

チャックはベッドから起き上がり、スリッパを履かずに裸足で床に立った少年に言つ

た。

「問題無い」

短く告げた少年。その反応は前に起きた時とはかけ離れていた。
静か過ぎる。それが率直なチャツクの感想だつた。

(どういう事だ?)

チャツク自身は起き上がる前の彼の様子を「赤子」と評していた。しかし今は違う。
アダムと名乗ったその少年の、何かを見透かす様な視線は医者も不振がる。まるで
チャツクの姿が目に入つていなかのように。

「……何を見てるんだ?」

「……全てを見たい。知りたい」

アンジュリーナとの接触を見た時、この少年は確かに未知の状況に置かれた子供の様
な反応を見せた。

だが今は穏やか。老人の様に強い感情が見えない。いや、起きてからの無表情から何
も変わらない様子を見れば彼に感情があるのかすら疑わしい。

(これじやあ別人だぞ……一体どうなつている? それに未知の状況にこれ程驚かない
奴など居るのか?)

「1つ訊きたい」

「ん、何だ？」

唐突に声を掛けられたチャツクは思わず飛び上がりそうになつた。一切の感情を見せない顔から突然何か言われたら驚くに決まつてゐる。人によつては怒つてゐると思うかも知れない。

「何時になつたら教えるのだ？」

「あ、ああ、今君に異常が無いか調べ終わつたところだ。特に身体的な異常は無かつた。精神も安定している様だしな」

チャツクは精神状態を「普通」とは言わずに「安定」と言つて誤魔化した。感情の起伏が無いのなら安定とは言えるが、人間としてはどうなのか……。

少年の動作に無駄は無い。たまに瞬きをしながらチャツクを見詰めていた。凝視というよりその周囲全体を見通す目付き。

「自分は誰だ？」

またも前触れ無しに少年の唇から言葉が飛び出た。2回目なので最初よりも驚かなかつたが、間が中途半端に開いてから突然の問い合わせなのでびっくりする事に変わりは無かつた。

「少年、自分で名はアダムだと言つていたそうだな」「そうだ」

必要最低限の返事。それ以上は何も読み取れない。

「……で、少年、お前自身が分かる事は他に無いんだな？」

「そうだ……」

はつきりしない口調だつた。更に少年の視線が斜めを向いた。

「……戦場である男に殴られ、それ以前の記憶が分からぬ」

チャックも自分がハンとアンジュリーナと協力してすら不利状況だつたあの指揮官らしきプレートアーマーの男は覚えている。

「少年、あの男は君を探しているらしかつた。というかあの男は君が目的だと言つていたんだ」

チャックが一旦言葉を止めたのは少年の反応を見る為だつた。だが少年は立つたまま動じず、話の続きを聞きたいらしい。

「研究施設で君を助け出したアンジュリーナは、君が酷い扱いをされているのではないと言つていた。思い当たる節は無いだろうか？」

「無いな」

一言で一蹴されたチャックはうーむ、と困った表情で首を傾げた。

「……だが少年、記憶というのは決して消えるものではない。記憶とは箱だ。箱に記憶を出し入れするんだ。記憶を失うというのは、その箱が開かないだけの事。開けるきつ

かけは必ずある筈だ」

「思い出せるのか？」

「どれぐらい掛かるかは分からぬがな」

丁度その時、部屋の廊下に面したドアが静かに開いた。

「チャックさん、彼は……あつ、もう大丈夫なんですね」

入つて来たのはアンジュリーナ。少年がベッドから立ち上がっているのを見ると嬉しそうに言つた。

「丁度良かった、どうか少年をトレバーの所へ連れて行つてやつてくれんか？」

「分かりました。ねえ、ちゃんと歩ける？」

「大丈夫だ」

少年がアンジュリーナの元へ歩き寄る事で発言を証明した。

「少年、今から君に合わせる人物は君が求めている答えを教えてくれるかも知れない。だが話が分かりにくいかも知れんから気を付けろよ」

「……分かつた」

少年は少し間を置いてから短く答えた。アンジュリーナがドアを開け部屋から出る様に促すのに合わせ、振り向きもせずに出て行つた。

3 : Doubt

廊下を歩きながら少年は考え方をしていた。

この建物は医療施設かと思ったが、少し違うらしい。少年の前方を歩くアンジュリーナという少女によればこの都市の中心部に位置する20階建ての建物は彼女達が所属する「組織」の支部だという。その「組織」とは何か訊くと彼女は「これから会う人が教えてくれるわ」と言つた。

窓からは荒れた大地に建つ数々の建築物が、離れた場所には古い自然式農業地帯、更に遠くには廃墟や荒地が……まるで一度文明が崩壊し、その上で再建が行われている様だ。

「あつそらうだ」

思考は少女の明るい声によつて目の前に引き戻された。少女は振り向いて少年の方へ向く。少年は釣られて立ち止まつた。

「もう聞いたと思うけど、私はアンジュリーナ・フジタ。これから色々私も教える事あると思うから、改めてよろしくね」

「分かった」

返事されてアンジュリーナが少し黙ったのは、少年の反応があまりにも薄情だったからに違いない。それでも少女は気を取り直して言つた。

「……アダム・アンダーソン、それが貴方の名前なんでしょう？」

「そうらしい」

「……貴方の事はアダムって呼んで良い？」

「良いだろう」

「……じゃあ私の事はアンジュって呼んで」

「分かった」

少女は少年に優しく接する為に親しく話し掛けているが、少年は表情一つ変えず、聞き手によつては冷酷に返す。

(……やつぱり怒つてるのかな?) 「……アダム、貴方に言つておきたい事があるの」「何だ?」

アンジュリーナは明るい表情から一変、悲しみと言うべきか、申し訳なさを帶びた。
「私は、貴方を助けてあげたかった。苦しそうな貴方を見てそう思つたの……でもそれが貴方を傷つけてしまう事になつて……ごめんなさい！」

アダムはどうすれば良いのか分からず、頭を深く下げる少女相手に立ち尽くしたままだつた。手を差し伸べも突き放しもしない。

(何故謝っている?)

少女は頭を下げたままで動かない。

「何故そうするのだ?」

「だつて、酷い目に遭つて怒つてているでしょう……」

「どうでも良い事だ」

アダムの発言にアンジュリーナは思わず顔を上げた。

「ぼんやりしているが、アンジュリーナ、君は戦場で不思議な顔をしていた。今のそれと似ている」

「へつ?」

「いや、何でもない」

言われた事が分からず、拍子抜けた声を上げた少女。一方、少年は混乱した様に頭を振ると話題を打ち切つた。

少女は歩き始めたアダムを見るや、自分が先導する役割を思い出して慌ててアダムを追い越した。

沈黙が流れる。先に破つたのはアダムだつた。

「……アンジュリーナ」

「アンジュ、で良いわよ」

「……アンジユ、自分には知らない事がある。君の分かる範囲で構わない。自分が頼んだ時で良い、教えてくれ」

「分かったわ」

またも無表情なアダムだつたが、アンジユリーナの方は愛称で名前を呼ばれたのが嬉しかつたのか、それとも頼まれたのが嬉しいのか、とにかく笑顔で答えた。

「なあハン、あの例の少年はどうしたんだ？」

朝食を満喫し、ロサンゼルスの下町を歩きながらリヨウが問い合わせた。

「実はトレバーに任せている」

「えつ？ トレバーの奴に?!」

リヨウは本当に驚いたような、まるで冷水を浴びた様にショックというか驚愕の声を出した。それと同時に3人の足並みが止まつた。

「トレバーさんって自分から何かを話す事ってめつたないですよね？」
レックスは驚きと疑いを同時に顔に出していた。

「そうだ、そのトレバーがだよ。実は彼から頼まれたんだ。あの少年に何かを見出したのか……」

「あいつは何も喋らんからずつとコミュ障と思つてたが……」

「それにトレバーさんが動くときつて何か大事な時ですよね？ 僕何か嫌な予感するんですけど……」

「同感だレックス。こりや傘でも持つておけば良かつたかな」
リヨウが雲一つ無い晴天を眺めながら呟いた。

屋上の転落防止柵に手を掛けていたトレバーは後ろの気配に気付くと振り向き、空調設備の動作音に混じって丁度ドアの開く音を耳にした。

「トレバーさんの話は難しいけど、頑張つて」

「あの人物か」

「そう。私はここで待ってるから」

先に扉を開けた少女は扉の元に立つたまま動かず、後から出て来た少年は真っ直ぐ前に進み始めた。

少年はヘリポートマークを横断し、トレバーの隣へ立つた。

「アダム・アンダーソンか」

「そうだ」

「待っていた。チャックかアンジュリーナから聞いただろうが、俺はトレバー＝マホ

メット＝イマーム。お前に教えるべき事を教える」

「教えてくれ」

「そう言われたトレバーは手すりに掛けていた手を放し、身体をアダムと向き合わせた。

「……」

「……」

「……それは疑問だ。感じた事が府に落ちない、起こつた出来事が信じられない。そういうだろう」

「ああ」

何が疑問なのか、少年はそれを理解していた。

「お前が疑問に思つたのは、「真実」だ。普通の人間には「疑問」にすら思わない。だがお前の様に「疑問」を持つ者が稀に居る。「疑問」を持った者だけが「真実」を知る。だからお前には「真実」を教える権利がある……何を感じた？」

アダムは少ない僅かな記憶を思い起こし、昨日医療テントで起きてから戦場に出た事、そして感じた事を思い出した。

少年にとつては不思議としか言いようがない出来事だつた。例えるなら光の筋が、「見え」ない筈のものが「見え」た。否、「感じ」た。あの輝きはそれを操る人物に途轍

もない力を与えた。

「あれ」は何だ？ 「あれ」によつて力が得られたとしか思えない。「あれ」を認識した瞬間、全てが「見え」た』

表情に変化は無かつたが、その声は「知りたい」という強さがあつた。『説明するより実際にやつた方が早い。これを見ろ』

トレバーは右手を前に出し、掌を少年の頭に向かた。『普通の人間』にはそれだけにしか見えなかつたに違いない。

だが、アダムには見えていた。いや、感じていたのだ。

トレバーの掌に纏う輝き。

「これだ、あの時これと同じものを見た。分かる』

「やはり、間違いない』

何が間違いないのか、それを言わずにトレバーは掌に力を込めた。

輝きはアダムの顔面に向かつて飛んだ。発射された、とでも言うべきか。

少年に命中し、輝きは少年の身体の中に吸収された。

次の瞬間、突然の感覚がアダムを襲つた。

視界が眩む。耳が痛い。皮膚に何か触れる。流れ込んでくる。たつた一瞬の出来事だ。

しかし、終わつても尚心臓の鼓動が自分にも分かる程速くなつていた。

「……今のは？」

「軽い幻覚だ。あの「光」を操り調整し、お前に作用させた結果だ。「光」が分かるならお前も操れる可能性がある」

「今の幻覚も使えるのか？」

「いや、人によつて違う。俺の場合は今の様に幻覚を人に見せる。お前の「能力」は何なのかはお前が答えを探せ」

「どうやつて行う？」

そう訊かれたトレバーは自分が居た位置から2歩だけ下がり、言つた。

「まずは覚える。俺に攻撃を当てるみろ。やり方は分かるな」

右手を平手にして体の前に出したトレバー。

「格闘なら分かる」

対するアダムは、左半身を前に重心を後ろに、右拳で顎をガードし左拳を胸の高さに。

「来い」

「アンダーソンはロサンゼルスの『反乱軍』のこのビルに居る様です」

「ご苦労。早速戦力の確認をしろ」

ポール・アレクソンはオペレーターの操作するモニターを見ながら、大して礼の気持ちも込めずに次の命令を出した。

丁度そのタイミングで指令室のスライド式ドアがスース、と開く音が聞こえた。

「アレクソン君、仕事熱心なのは結構だ。今はどんなだ?」

「中佐、はい、たつた今アンダーソンの居場所を特定しました」

「良し。それとアレクソン君、私から提案があるが良いか?」

「勿論です」

表情を変えぬポール。中佐は言う前に目だけをチラチラと横に動かした。何か迷い

でもあるのだろうか。

「実はだな、前から計画していた掃討計画は別の機会にして、少数によるアンダーソンの奪還もしくは破壊計画にしようかと思つたのだ。奴らもこの前で随分と警戒しているだろうからな。向こうだつて戦力も揃えるだろうし、こちらは前回の損失が予想以上に大きかつたし悔れん。だから潜入工作ならどうかと思つてな」

「成程。ですが、アンダーソンは「覚醒」している可能性もありますし、」

「ステルス能力を持つ者に行かせる。それと「変圧器」だ。もう実質的に成功段階にあるだろう」

「はい、成功はまだ3機だけですが」

「3人も居れば十分だろう。おい君、早速手配してくれ」

「了解です」

中佐に命じられたオペレーターは嫌な顔もせず黙々と作業に向かつた。

そして中佐は安堵のため息をつくと指令室から出て行つた。

4 : Believe

「ハン、今大丈夫か？」

そう言つてビルの真ん中の階にある1つの部屋に入つて来たのはチャックだった。

「良いですよ。僕も今ここに来たばかりです」

「そうか、なら早速聞いてくれ」

この軍医は面白い事を見つけたかの様に喋り始めた。（チャック自身にとつての面白みだが）

「まずはこれを見てくれ」

鞄から取り出したノートパソコンを開き、スリープモードにしていたのかすぐに画面が現れた。

画面には幾つか画像が表示されていた。それを見るとハンは不安げに首に手を当てた。

「ええとこれは……」

「トレバーがあの戦闘で見つけ、持つて來た死体だ。DNAを調べたら「トランセンド・マン」だった」

チヤックが何気なく指さす写真は、胴体とそれから切られた首だつた。

「それで、何か特異点でも？」

「そうだ」

短く答え、画面中のマウスカーソルがせわしなく動く。

「血液中にこれだけ大量の薬剤が含まれていた。普通の人間が飲めば一発でアウトなのだ。頭部からは外科手術痕があつた。透視してみたらこれだ」

薬剤量を示すグラフ画面から脳のスキヤン画像と思しきCG切り替わつた。前頭葉の1か所に直径1センチメートル程度の黒い領域が見える。

「この黒いのは何ですか？」

「いいや、トレバーは見事首だけ切断してそれ以外は何もしとらん。これは金属反応を示している」

「金属？……コンピューターでも埋め込んでいるのですか？」

「ゞ名答。あとトレバーから得た情報なんだが、トレバーの奴あとこれと同じ奴を15体も葬つたそうだ。そしてそのどれも一般的な「トランセンド・マン」に劣るものだつたという。しかも他の死体は勝手に燃え消えたそうだ。それは証拠隠滅だろうな」「足止めされたとは聞きましたが、これだつたんですね。ですがコンピューターは何に？」

「制御にでも？」

「それもあるだろう。しかしこれを見てくれ」

チャックが鞄から何か小さいものを取り出した。掌に包まれて見えない。

それを机の上に置き、説明し始める医師。1平方センチメートルのコンピューター チップであるのは間違いない。

「これがその脳に埋め込まれていたものだ。生体電気によつて動き、脳の働きを活性化させるのが主な使用目的らしい。他にもテレパシー通信やらデータ記録やらの機能もあるらしいが、大方はそれだな」

「じゃあ先生はこの人物が『予備』だと考へるんですか?」

「その通り。人数では『我々』なんかより10倍以上も居ると言われているからな。戦闘能力を引き上げる事で貴重な戦力の代わりとでもするつもりなのだろうな」

「うーむ……これ正直言つて侵入して得た情報なんかよりよっぽど凄いですよ」

「同感だ。これじやあ骨折り損だな……ああ、別にお前を責めているつもりは無いぞ、『指揮官』殿。相手が悪かつたなあれは」

「分かつてますよ。これで次の作戦の目途だつて立ちますし」

申し訳無さそうに言つたチャックに対し、ハンの声は明るかつた。

「私からは以上だ。他に何かあるか?」

「大丈夫ですよ。あつ、そういうばトレバーはどうでしようかね? 少年も心配ですよ」

「さあ、我々が心配する必要は無いんじやないか？」

「しかしトレバーは何も言つてくれないんですね……」

2人は天井を、正確にはビルの屋上を想像しながら見上げた。

5メートル後ろに吹き飛ばされたアダムは背中が地面に着くと後ろに転がり、そのまま立ち上がった。

(速い)

少年の5メートル前方に居るトレバーが右手だけを前に出して、来い、とジエス

チヤーした。

(どうやつたら速くなれる?)

アダムは地面を駆け距離を一気に詰める、と同時に後ろに折り畳んだ右腕を突き出した。

トレバーの右手に簡単に逸らされる。それでも反撃させる暇を与えぬよう、両腕はまるで車輪の如く勢い良く回転し次々とパンチを繰り出す。

(どうやつたら当たる?)

右フック、左ボディブロー、右裏拳、左肘、左半身を前にした勢いで右回し蹴り、左回し蹴り、更に回転を利用した右裏拳。どれも防がれた。

今度はトレバーが左手でアダムが伸ばした右腕を掴む。

アダムが次に左手を伸ばそうとする。それよりも先にトレバーが右拳を、アダムの伸びた肘に力強く打ち付けた。

肘が曲がってしまう事で手元が狂い、出している最中のパンチが鈍る。トレバーの右手が威力を失ったアダムの左腕を止め、そして左掌で腹部を強く押した。

アダムは吹き飛ばされている最中、空中で後ろに1回転して着地。丁度ヘリポートマークの円周の縁だつた。

(どうやつたら追い付く?)

そう考えた時は既にトレバーはアダムの目の前2メートルにまで接近していた。それを認識した途端、慌てて両腕で顔を覆う。

今度はトレバーが連續攻撃を浴びせる番だつた。アダムには反撃の隙が全く無い。

どうにかストレートを両手で受け取つたアダム。姿勢を低くし、後ろを向きつつ相手の腕を自分の肩に掛け、体重を掛けて投げ飛ばす。

少年に投げられたトレバーは華麗に宙を舞い反対側に着地した。そこへアダムの跳び蹴りが襲い掛かる。

床から1・5メートル空中に留まつてゐるアダムは一発目が防がれても次々と両足を交互に蹴り出す。

少年は自分の右キックが相手の腕に逸らされ、無防備になつた自分の腰に向かつて掌が打たれるところまでにない衝撃を感じた。

吹き飛ばされ背中から不時着した時、自分は反対側のヘリポートマークの端にまで飛ばされていた。

(どうやつたら避けられる?)

歩み寄る二者。

(どうやつたら同じ事が出来る?)

既に互いの距離は3メートルも無かつた。

(どうやつたら勝てる?)

少年の目に映る大人の上半身が突如動いた。反射的に頭をガード。
しかし、トレバーの綺麗なフォームの横蹴りがアダムの胸を捉えていた。

「……」

2人は黙つたまま顔を見合わせている。蹴りは寸止めだつた。

トレバーが口を開く事なく蹴りを戻し、ようやく言葉を発した。

「何故当たらないと思う? 何故防げないと思う? 何故勝てないとと思う?」

まるでアダムの考え方を見通している様だ。

「動きが速過ぎる」

余裕のある大人の口調に、子供は息が上がつていた。

「確かに、お前にとつては俺の動きは速いだろう。だが、俺にとつては当たり前に出来る事だ。その違いは何か」

アダムは答えられなかつた。

「信じろ」

「……何をだ?」

「お前自身をだ。お前はまだこの世界を疑つてはいる。だから何事も考える」

意味が分からなかつた。

「考えるな」

「……考えずにどうやれば良い?」

「感じろ」

「……何を感じ取れば良い?」

「それはじき分かる。 そうだと分かる瞬間が来る」

「……そうすれば勝てるのか? あの様に速くなれるのか?」

「それは少し違う」

想定外の返答にアダムが黙つた。

「お前が辿り着けるのは俺ではない、お前だ。まだ疑つてはいるだろう」

「ああ、信じられない」

「『それ』はそこにある。『それ』が本当に分かつた時お前は信じる」

断言。トレバーは自分の台詞に絶対の自信を持つてゐる、そう思われた。

「まだやるぞ。俺を討て」

それを聞き構え直したアダムの顔はどこか晴れていた。表情は動いていない、が、何かが違う。

屋上のドアの傍から、少年を見てそれに何となく気付いたアンジュリーナは嬉しそう

にほほ笑んだ。

ストーン医師との面談を終えたハンは同じビルの別な部屋に移動していた。
窓は無くLED電球だけが部屋を照らしている。扉は廊下に面する一枚だけ。小規
模な会議室程度の広さだつた。

この部屋の最後にあるモニターを見ている。

「ドニー、忙しい時にすまんな」

『構わんさ、大事な要件なのだろう』

ミニターに映つたのはやや大柄な黒人男性。その中でも肌の色と対照的な銀髪と、人類には稀な紫色の瞳は印象に残る。

「じゃあ早速言おう。昨日「管理軍」の基地に侵入・強襲する計画を実行した時だが……』『予め知つてはいる』

「相手の戦力が予想の倍以上に多かつた。調べても出て来なかつた機密を多く隠していだ。簡単に言えば失敗だ」

『それで、どうした? 要件を言つてくれ』

画面の人物の声は冷たいが、ハンを非難する様子も無い。

「詳しい情報はデータを送る。今ここで言いたいのは戦力の追加を要請したい。向こうの戦力は未知数だ。向こうが近々攻めてくる可能性も少なくはない」

『良し、「私達」から送ろう。南太平洋は管理軍の手は回つて来ないだろうし多少時間は掛かるにせよ確実に送り届けられる』

「感謝する。でも今でなくて良いんだ。こちらに回す分を準備万端で用意してくれれば良いだけだ。向こう側をかえつて警戒させるだろうし」

『では何かあれば言つてくれ』

『そうするよ。それじゃあ……』

ハンは分かれの挨拶をしようとしたし、話を終えようとした。のだが、阻止された。

『ハン、何か言いたい事でもあるのか?』

2秒の間が開いた。そしてハンは頷きながら従つた。

「送ったデータにもあると思うが、「管理軍」の施設からある少年を拾つたんだ。記憶はないが、向こうの機密に関わっているかも知れない。実を言えば今度予想される「管理軍」の攻撃は彼が原因で起ころ可能性もある」

『……それでも、お前はその少年を見捨てないんだな?』

「ああ」

『お前はその少年を信じているのだな?』

「そうだ」

『知る事は罪ではない、だが注意しろよ。私にはこれだけしか言えぬが』

「分かつてゐるさ。任せてくれ」

ハンは爽やかな笑顔で答えた。頷いたドニーの冷たい表情も和らいだ気がした。

5 : M i S S i o n

「アレクソン指揮官、到着致しました」

「良く来た。話は既に聞いていると思う」

ポールの前には3人の人物が立っていた。

まず左の人物、背が高く、少なくともポールの5センチメートル以上はあり、体格もがつちりしている。七三に分けられた暗い茶髪とサングラスがボディガードの様な印象を与える男性だった。

次に右の人物、一番目に入るのは肩まで掛かる明るめの茶髪に赤いメッシュ。女性でありこの中では1番若くあり小柄だが、その顔つきは「舐めるな」と主張していた。

最後に真ん中の人物、人相が全く読めない黒一色のフルフェイスヘルメットを被り、服や靴や手袋まで黒に統一されており、肌が一切見えない。そして癖なのか手をポケットに突っ込んでいる。

ポールは興味無さげ3人に目をやり、自分の後ろのモニターへ向き直すと説明を始めた。

「お前達へ命じるのはアンダーソンの奪還もしくは破壊。現在この「反乱軍」が管理する

建物に居る。データは既に読んだな？ 向こうの「トランセンド・マン」に関する情報もあるからもう一度見直しておけ」

「はい」

ヘルメットの人物が低い声で代表して言つた。本当に正面を向いているのかすら疑わしかつたが。

「それとお前達に渡す物がある。わざわざ集まつてもらつたのはその為だ」

ポールはモニターの横に並べていたブレスレットらしき物を3つ取り、それらをそれに渡す。これに質問したのは金髪赤メッシュの女性だった。

「これは何ですか？」

「変圧器だ。最近実用レベルにまで開発が進んでな。少人数作戦には持つて来いだろう」

「もう完成したのですか？」

「その3つだけはな。やはり生産にコストが掛かるのは仕方ないだろう」

3人は揃つてこれを腕ではなく首に巻き付けた。

「別に疑うつもりは無いのですが、性能は確かでしようね」

「個人差によるが、「活性率」はおよそ2倍にまで跳ね上がる。だが持続使用は禁物だ、負担が大きい。主に断続使用か失敗時の逃走用だけにしろ」

ヘルメットの男の質問にポールは丁寧に答えた。

「出来るだけこの作戦は向こうに知られない事を優先に行動する事だ。掃討作戦も更に延期せざるを得なくなるだろうし向こうは更に防衛力を付けるだろう」「分かっています」

3人はヘルメット男を先頭にして部屋から出て行き、大柄なボディガード風の男がドアを閉めた。

「500だ。500賭ける」

「強気だな。良いぜ、やろう」

答えたリョウはドアを開け、『乗り』込む。

「1マイルで良いんだろ?」

「勿論だ。作戦があるんでね」

そう言つた相手の男も『乗り』込んだ。リョウと同じかそれ以下の年齢だろう。

ところで、リョウが『乗つた』のは、長さ4・4メートル、幅1・7メートル、高さ1・3メートルのクーペ型ガソリン乗用車。黒い車体と細い目の様なヘッドライトと大きなリアウイングが特徴的なこのスポーツカーは100年以上も昔に生産が終了しているものだ。

相手のも同じく、水素燃料自動車が一般的な現代においては全く普及していない1世纪以前の旧式の自動車だ。

ボディはCG設計とカーボン材料による大型3Dプリンタで再現し、元のものより強度があつて軽量な車体が作れる事が可能だ。

エンジンは耐熱性を考えて鋼鉄製、これは3Dプリンタでは作れないが鋳造の際の形を作るのにおいてCGや3Dプリンタは使われる。

ボンネット内は自分達でプログラムを書き換えた燃料噴射制御装置やキヤパシタ（電気二重層コンデンサの事）等、時代違ひな物多数で埋められている。

自動車の構造は100年前から基本的に変わっていない。リョウはクラッチを踏みながらエンジンを噴かせた。回転数を示すメーターが毎分6000回転を示し、マフラーから人口石油（不純物を一切含まないので排ガスはクリーン）を燃焼した事による二酸化炭素と水蒸気を吐き出し、ブオオン、と空気を震わせる。

相手も競う様にエンジンを鳴らす。リョウの車より若干音が高いのはターボによるものか。（一応リョウの車はターボ付きだが……）

乾いた土の上に不愛想に引かれた線に沿つて2台が車の先頭を合わせ、止まる。主に若者で構成された観衆の中、1人の若い女性が2つの車の前に現れた。

「2人とも、準備は出来てる?」

「オーケイ！」

「当然だ！」

女は長い金髪を後ろに撫でながらもう片方の手で両者を指さした。
「レディー！」

女が右手を高々と上げる。エンジンの回転が一定になる。

「ゴー！」

女が腕を下ろした。クラッチから足を放す。座り心地の良いバケットシートに押し付けられる感覚。

あつという間に7000回転に達し、ギアを1段上げる。緩くなつた加速が増した。続けて3段階目。隣の車とはまだ並んだままだ。段々と景色が速くなる。

戦争からまだ残る廃墟群を走り抜け、スタートから200メートル目にある最初の交差点が見えた。観衆と赤い三角コーンが右に曲がれと示している。するとリョウの右に居る男が言つた。

「悪いが今日は俺が勝つぞ！」

そう言うと相手はハンドルを押す様に体を前傾させた。バシューン！ という二トログリセリン燃焼音と同時に一気に加速した。

「んな無茶な！ 負けてられるかよ」

リョウはブレーキを踏んで減速し3速から2速へ、迫り来るカーブに対してハンドルを右に回す。

ギギギギギ！ とタイヤと地面が擦れ合う摩擦音。車の向きを変えコーナーからの脱出加速を同時に行えるドリフト走行だ。

リョウが曲がり終えた時には相手は10メートル先を走つていた。

2速、3速、4速。だが距離は一向に縮まらないどころか少しづつ突き放されている。前のコーナーから200メートル先にあるコーナーが見えた。

バシューン！

「クソッ！ 四駆にツインターボにスピード出過ぎだつての。おまけに序盤二トロなんて贅沢過ぎるぜ！」

相手の車が90度のカーブをギュンと曲がる。ドリフトではないがタイヤ痕が出来上がる。

4速から3速、コーナーを抜け、アクセルを力強く踏み込む。

ここから直線400メートル先に折り返し地点があり、そこをUターンすれば来た道を辿つて出発地点にまで行けばゴールとなる。

「俺が貰うね！」

「いいや、今回も俺だ！」

相手の強気な発言と同時に車体が急加速した。リョウも強く言い返し、ハンドルに付いている二トロ噴射ボタンを押す。体がシートに引っ張られる感覚が更に増した。リョウの車の先頭が相手の車の後部まで達した。

両者がギアを5速にまで上げた。両方ともこれが最大ギアである。スピードメーターはもうすぐで時速200キロメートルに達する事を示していた。

「速え?!」

「二駆舐めんなー！」

2台の先頭が並んだ。中間の折り返し地点を示すカラーコーンが見えた。

カラーコーンは左に曲がるというルールを予め決めていた。そして、リョウの車は右側に、相手の車は左側に位置している。

「俺の勝ちも同然だぜ！ カーブじやあ四駆最強だ！」

「まだ終わってないぞ！」

リョウが強く反抗する。言つた次の瞬間にはリョウはハンドルを思い切り左に回していた。当然左には相手が居たままだ。

「危なっ?!」

「これがドリフトだぜ！」

相手は減速し、インコースを滑る。反対にリョウはスピードを維持したままアウトコースから攻める。

180度のターン。観衆の歓声。あと半マイル。

コーナーから抜けた時2台は並んでいた。

最短距離を重視した相手はギアを低くし再び加速し始める。速度維持を重視したリョウは保つたスピードのまま突き進む。

「どうした？ カーブじや負けないんだよな？」

「何を、これからだつての！」

大柄なサングラスの男は、ヘアピンカーブを曲がった2台の車を見て歓声を上げる若者達を眺めるなり、呆れてため息を吐いた。
(戦争だというのに警戒心が無さ過ぎる。まるでパーティ会場だな。これじやあ仕事が
楽過ぎて話にならん)

群衆から離れ、どこかへ歩き出す男。しかし、それに目を向けた人物は誰一人居なかつた。

(聞こえるか？ 作戦開始だ)

『了解』

『分かった』

念じると頭に2つの声が入つて来る。耳に取り付けられたテレパシー型通信機によるものだ。装着者の思考を読み、暗号化した電波を他の通信機に送る。

(では予定通りに行こう)

『任せた』

『さつさと済ませよう』

歩いている男はやがて視界に高層ビルを捉えた。

その遙か遠くに位置する目標のビルに向かつて手を伸ばした。何かを開いた掌から送つている様に。

「させねえよ！」

若い男性の声が上空から聞こえた。同時に飛び退く。

地面にクレーターハウスが出来上がった。その中心部には飛び降りた直後の姿の青年があつた。

「ロスにようこと。バスポート見せな」

(気付かれたか。若いが相当の手練れと見た。飛行能力持ちか？)

「コラ、無視すんなよ。ロスから地獄へ観光案内してやるぜ」

心の中で感心したサングラスの男は冷静さを保つたままだ。立ちはだかる青年、レツ

クス・フィツシユバーンも冗談を交える程余裕を見せていた。
(まあこれで2人の仕事が捲るだろう)

6 : Inhibition

少年の腕が次々と相手の大人に向かって繰り出される。それを上回る速さで大人は片手で逸らす。

大人の腕が少年の腕に絡み、手繰り寄せる。

「当てようとするな、当てろ」

トレバーの助言にアダムが顔を引き締める。

(もつと速く。まだだ)

アダムが1歩踏み出す。トレバーが1歩下がる。

拳の連撃と共に少年の足が動き、大人を後ろのフェンスにまで追い詰めた。

トレバーが今まで動かさなかつた左手でフックを放つ。

(見えた)

右腕でフックをガードし、左半身を前に捻る。上体を後ろに逸らし、体重の乗つた横蹴りがトレバーの胸に伸びる。

しかし、トレバーの右腕が正面から蹴りを防いでいた。
「遅い！」

トレバーの右足が1歩前に動き、右半身が前に突き出る。それを瞬時に察知したアダムは両腕を胸の前に持つて行きガードしようとする。

腕が達する前に拳がアダムの胸を抉つた。衝撃に耐え切れずアダムは脱力し膝まずいた。

「ハア、ハア……」

「……休憩だ。それ以上は休んでからにしよう」

そう言つたトレバー。すると屋上の端に立つていていたアンジュリーナが何かを持つて駆け付けた。

「水とタオル持つて来ました。アダム君も使って」

「気が利く」

大して汗もかいていないトレバーは無愛想とも言える返事をすると2つを奪い取る様に手の中に収めた。それでもアンジュリーナは慣れているのか嫌な顔をしなかつたが。

疲労で四つん這い状態のアダムは右手だけ前に出すと、柔らかい布の感触を認め顔に持つてくる。

「……水も頼む」

「はいこれ。大丈夫?」

アダムはやつとコンクリートの床の上に座ったがまだ息が上がっている。そして水筒を受け取った途端がぶ飲みし始める。

(いいや、まだ速くなれる筈だ)

考え事をし始めたアダムは自然と顔を俯かせ、それがアンジュリーナを心配させる事となつたのだろう。少なくとも少女には少年が落ち込んでいる様に見えた。

「本当に大丈夫なの?」

「ああ」

その発言と顔に歪みは無い。アンジュリーナは話題を変えた。

「難しい?」

「そうだな」

「私も、最初は全然だつたわ」

「……どうやつて出来た?」

「私は、人を助けたい、「力」を使うときはそう思うの。貴方の願いは何? それを強く

思えばきっと上手く行くわ」

助言を送るアンジュリーナの表情はどこか大人びていた。人の役に立ちたい、という
思いもあるのだろう。

「願い……」(……知りたいんだ)

「アダム君の助けになれば良いかなーって思つたんだけど……」

『またしてもアダムが黙り込んだのでアンジュリーナは訊く。

「いや、助かる」

「それなら良かつた」

しかしアンジュリーナは違和感を覚えていた。

彼の抑揚の無い声や無表情は普段他人と接する時とかけ離れているものだ。しかも訊かれた事だけにしか答えない。彼女にとつてはロボットと会話している感覺だつた。だから少年から彼女に話し掛けたのは心外だつた。

「アンジュ」

「えつ、な、何？」

少女の愛称は紛れもなくアンジュリーナに掛けられたもの。少女は驚いて戸惑いを見せた。

「君は自分を救つてくれたし、自分の要望にも応えてくれた。だから……何と言うべきか……」

アダムは迷つていた。言うべき言葉を知らなかつた。

それを察したアンジュリーナは手を差し伸べた。

「ありがとう、だよ」

少年の迷いが消えた。

「助けてもらつた時、感謝する時、ありがとう、って言うんだよ」
「そうなのか……ありがとう」

腑に落ちない表情だったが、アダムの顔は何か新しい発見をした様だった。
「どういたしまして」

そしてお礼を言われたアンジュリーナは笑顔だった。

日中の新ロサンゼルス市の中に潜む2つの影。

「ブラウンがやつてくれたお陰で随分助かるわね」
「だな」

物足りなさそうに飽き飽きした表情の金髪メッシュの女性に、最短で言い返したヘルメットの男。

彼らの目の前にそびえ立つビル、彼らは構いなしに中へと入る。

外や内部に居る警備員らしき人物達は彼らに注目どころかチラ見もしない。“普通の人間”にとつて彼らは“存在しない”も同然だつた。彼らが奇抜な外見でも音を立てて歩いてもだれも見向きもしない。

「じゃあわたし達も作戦通りにしよう」
「分かっている」

そして非常階段を上る。

金髪メツシユの女性はある階に達するとその廊下に出た。

建物の職員達が廊下を行き来している中、派手な彼女の外見は目立つ筈だが、誰も彼女を見ない。

「楽な仕事ねえー。まつ、そんな思った所で誰か来るんだろうけど」

荒い口調の独り言はすれ違った人々の耳に届きもしない。これこそ彼女の能力「認識阻害」である。

進む内に人が少なくなり、やがて人一人すら居なくなつた。

ちなみにその能力は生物の五感にしか作用しない。「能力」の行使は「エネルギー」を由来とする為、ある種の人物には気付かれる可能性もある。

だから仲間の1人が外部から「エネルギー」となる物を送り、妨害している。それが市郊外に居る大柄なサングラスの男の役割である。

所謂ジャミングだが、ノイズがあつても完全に誤魔化せる訳ではない。どれだけうるさい音楽が鳴っている中で囁いても声を発した事は事実に変わりない。

メイン演奏の中に含まれていて小さなパークッションは聞こうと思えば聞こえる。それと同じ原理で“意味”を持った「エネルギー」を感じする事は可能だ。たつた今この女性の前に現れた人物の様に。

何の予兆も無く繰り出された両足蹴りに女性は成す術も無く吹き飛ばされた。

女性の方は空中で体勢を整え、廊下に見事着地した。

「あたしに不意打ちするなんて良い度胸ね。それに女を蹴り飛ばすなんて男としてどうかと思うけど」

「関係無い。問題はその理由だ」

両足蹴りから着地した男性、ハン・ヤンティは女の文句に耳を貸す暇も無く構える。

「そういう理屈付ける男って嫌い」

「僕はそういった大して考えないのが好きではない」

女の方も構える、と思つた矢先、女は床を蹴つた。

正面からのタックルを受け止め、床に押さえつけようとするハン。

上半身をガクン、と下にずらされた女はその勢いと体の柔軟さを活かし、後ろ脚を後ろから上を辿り、そしてハンの頭に向かつて振り下ろされる。

すかさず手を放したハンは両腕を交差させてブロック。同時に前方からの圧力が消えた。

女が蹴り足を戻し前方へスライディング。ハンも前方に飛び回転しつつそれを躱す。距離が離れたのを機にハンは耳に当たたヘッドフォンマイク型の通信機に手を当て、言つた。

「警報だ。侵入されている」

しかし、聞こえて来たのは意味を持たないノイズのみ。

「無駄よ。ついでにあたしの『領域』で何をしようと外部には伝わらないわ」
(ジャミングか。ステルス系の能力か。発信源はどこだ?)

空間に存在する不自然な「エネルギー」はすぐに発見した。しかし、何処から来ているのかは分からぬ。

(複数の方向からの妨害だろうか)

廊下には2人以外誰も居ない。外へ出せば街がパニックになるし、一般人に被害が出るかも知れない。それは相手の女もこれ以上広まるのが不味いと感じてゐるに違ひない。

レックスはノイズしか聞こえない通信機を投げ捨てると愚痴った。

「何でこんな良い仕事してる時に限つて……お前の仕業か！」

返事の代わりにサングラスの男から「エネルギー」の塊が飛来してきた。

空中へ飛び、回避するレックス。そして空中に留まつたまま停止した。

（飛行能力？ 念動力系か？）

「こいつを喰らう！」

軽機関銃型の銃を背中から取り出したレックスは空中から銃弾の雨を降らせる。

相手も躊躇しながらP D W型の銃を1丁右手に持つと上空に向かつて引き金を引く。

その光景は銃弾の見えない『普通の人間』から見れば何もないのに躊躇する仕草を見せるのだから奇妙だろう。（そもそも人が何の装置も無く空中を自在に飛び回っている時点で奇妙だが）

空中を飛び体を錐もみ回転させながら銃弾を撃つては躲すレツクスの姿はまさしく戦闘機だろう。

「避けんなよつ！」

指を引き金から外し、掛け声と共にレツクスが左手を相手に差し出す。掌に「エネルギー」が集められる。

「エネルギー」は変化し、周囲の空気を一点に集中させる。外側から見れば高圧の空気はレンズの様に見えるだろう。

空気塊が相手に向かつて飛ぶ。相手の男が軌道を見切り、横に体をスライドさせる。地面に当たつた空気塊は弾け、周囲に空気分子を拡散させる。その圧力は直撃を避けたサングラスの男のバランスを一瞬だが崩した。

銃を持ち直し、一瞬の隙を突いて銃弾を大量に飛ばす。それも1秒に100発というペースでだ。

それを相手は崩れた体勢から地面を転がり、器用に避けてみせた。銃口から銃弾をお返しに送りながら接近する。こちらも秒間100発。

レツクスも自身の「氣体操作」によつて自信を空中で方向転換し、追い掛ける男に正面から迎い撃つ。

互いに銃弾を避け、そして正面衝突した。

「負けねえよ！」

「空気操作」で衝突後もなお自分を加速する。双方へのダメージは同等だったが、吹つけられたのは相手だけ。

岩に背中を叩かれた男だが、平気としか思えない無表情のまま立ち上がる。レックスは「マジかよ」と呟いた。

レックスもまた「エネルギー」を「感じる」事が出来る。通信妨害するそれらの流れを辿り、『発信源の一つ』がこの男である事を突き止めていた。

（妨害とは汚ねえや。認識阻害や他の所からの妨害もあるみたいだな。しかし、リョウの奴まだ遊んでんのかよ！）

7 : Recognition

「何か来る」

「ふえつ？」

休憩中、トレバーが放った台詞により、アンジュリーナが思わず間の抜けた声を発した。

「2人とも此処に居ろ。アンジュリーナ、アダムを頼む」

「えつ、ちよつと、何が……」

起きているんですか、と続けようとして少女は断念した。トレバーは既にドアを開け階下に繋がる階段を降りていた。

だが何が起こっているのかは大体想定が付いた。

（きっと「反乱軍」ね。だとすればまたアダム君が目的ね……）

あの時対峙した「管理軍」の指揮官らしき男が目に浮かんだ。

（私が守らなきや！）

アンジュリーナは強い使命感に囚われた。

「ジャミングは維持されています。逆探知の兆候はまだありません。ブラウンとガルシアは既に妨害に入られたそうですが、計画自体は外部には知られていない模様。ティラーも向こうの1体に気付かれた様です」

「うむ、優秀な「トランセンド・マン」だな。我々の想定外だ……計画を少し変更する。もう1体出すぐ」

「ですがこれ以外は……」

「一応俺から用意している。強化措置を受けた「予備軍」を1体、隠密行動特化型だ」
ポールの隣には何時の間にか彼より一回り小柄な人物が立っていた。

素顔はフードに隠れて見えない。この人物もまた、表情を変えない。そして身体的特徴がこれといって無かつた。

「現在アンダーソンはこの建物の屋上に留まつたまま動きません。すぐ近くに『トランセンド・マン』が1体居ます」

モニターの3D画像を見ながらオペレーターが報告する。

「並みの『トランセンド・マン』どころか戦闘特化型にも劣るだろうが、アンダーソンのみを殺すならば十分だろう。それに……」

ポールは画像隣のグラフの数値や信号パターンを見ながら言つた。

「もう一体の相手があの『小娘』なら楽勝だ」

部下達はポールのその発言の意味を理解出来なかつた。

何時の間にかポールの隣に居たフードの人物が姿を消していた。

トレバーは廊下の向こう側から歩いてくる人物を見るなり立ち止まつた。

「見事なものだな。俺とお前だけ外部から隔離しているという訳か」

「こちらこそ、俺を見抜けた事には称えよう」

バイザーヘルメットの男がトレバーから3メートルの間隔を空けて立ち止まる。コートのポケットに手を突っ込んだまま動かない。

トレバーは相手から「エネルギー」が絶えず流れ、自分と相手の周囲の空間を包んでいるのに感付いていた。これも「認識阻害」である事に変わりはない。
「もし奴を渡すのなら引き下がつても良い」

「断る」

ガキン！

衝突したのはトレバーの右籠手と相手がポケットから出した物体。〃2人の間だけ
に金属音が鳴り響いた。

トレバーの左籠手が更に相手が突き出した左手を防ぎ、今度はこちら側から4連続で

殴る。

ヘルメットの男がトレバーからの最初から最後の打撃を受け止め終えると、1歩下がり左手に握った物体を投げ飛ばした。

腕に装着された籠手で飛翔物をガードし、それを取ろうとする。
しかし物体はどういう訳か、まるで意思を持つた様に動き、投射点だつた男へ戻ろうとする。

相手が戻つて来た物体を受け取る。物体は剣刀サイズのナイフだつた。良く見るとナイフの柄には細いワイヤーが繋がつており、ワイヤーは相手の袖の中へ伸びていた。
(だが暗器は俺も同じだ)

相手が両方の手に握ったナイフを素早く振るい、トレバーの籠手が次々とそれらを伏せぐ。そしてタイミングを見つけた。

相手が右手を振り出したと同時に自分も右手でその腕に向かつて拳を放つ。
「エネルギー」が籠手に流れ、刃が突き出し……
手応えが無かつた。

籠手から伸び出た刃は確かに相手の腕に真っ直ぐと突き出され、刺さる筈だつた、のだが何か滑らかな感触にツルリと逸らされて不発に終わる。

引き下がつたトレバーは原因を探るべく、先程突き出した相手の腕を凝視した。

袖に隠れて見えないが、「見え」ている。腕に纏わり付く性質を変換された「エネルギー」が見える。まるでコイルを腕に巻いている様だ。

（あのワイヤー、腕に巻いて防御にも使えるのか。自在な伸縮も可能と見た……巻かれているのは腕だけだな）

沈黙が流れ、動かぬまま隙を探り合う二者。トレバーの目は確かにバイザーの奥にある瞳を「感じ」ていた。

「アンジュ、「管理軍」とは何だ？」

疑問に思っていた言葉だ」

(や、やっぱりトレバーさん全然教えてなかつたんだ……) 「……まあ良いわ、私が教えるね」

トレバーに屋上から動くなと命じられてから危険も“感じず”、暇だと思つたのか知りたいからなのかアダムが会話のきっかけを作つた。

アンジユリーナは仕方ないなあ、と思いながら話す事を整理すべく考えた挙句話し始めた。

「……「管理軍」というのはね、人間の完全管理社会を達成しようとしている組織なの。本当は「地球管理組織」と言つてその頭文字から「EMO」(Earth Management Organization)とも呼ばれているわ。組織自体は百年以上前から存在したらしいけど。第三次世界大戦は管理軍によつて引き起こされたとも言われているわ」

「第三次世界大戦?」

訊かれた少女は一瞬戸惑つた。彼女には第三次世界大戦は誰もが知つてゐるという先入観があつたからだ。

「……えつと、30年程前に起つた世界的な戦争なんだけど、その時は90億人も居た世界人口がそれから30年後に終わるまで10億人にまで減つたの。管理軍は戦争を起こした事によつて世界を混乱させ、再建を兼ねて管理社会を作ろうとしたという事な

の

話について行けているのか確かめる為、一旦区切る。

「では何故管理しようとするんだ？」

「そう言うと思ったわ。管理軍の主張によれば人類を破滅させない様に徹底した社会を作り上げるのが目的らしいの。でも管理軍は人道を無視した政策ばかりで……」

「例えば？」

「えーっと……支配のために人々にコンピューターチップを埋め込んで感情を抑制したり行動を制限したり、娯楽や芸術や宗教とかを禁止したり……人が人じやないみたいでとても受け入れられないわ。しかも逆らえば鎮圧され人格を改造させられる、でもそんなの耐えられない、だから私達は「反乱軍」を結成し立ち上がったの。人として生きる為にね」

「それが君達か」

「そうよ。私思うの。人は笑つたり泣いたりするからこそ人なのに、楽しみも悲しみも無いなんて人じやない。ただのロボットと同じよ」

突然アダムの意識は視界から自分の脳内に移った。
無機質な施設・廊下・人員・ロボット、それらから逃げる。
逃げるのは自分。しかし逆らえなかつた。

それ以上は分からなかつたが、アダムには十分だつた。

少年が抱いたのは激しい共感に他ならない。自由を押さえつける存在が嫌だつた。そんな気がする。

「……自分も同じ考え方だアンジュ」

「そ、そうなの？」

予想外の答えにアンジュリーナが訊き返していた。

「……自分は逃げ出したかつた……管理軍から逃げていたのを思い出した。だが奴らは許さなかつた……」

アダムが痛そうに頭を押さえる。アンジュリーナが駆け寄る。

「無理しないで！」

「大丈夫だ……」

この時アダムは自分の記憶を探るべく思い出そうと集中し、アンジュリーナはアダムを心配してそれだけに気を掛けていた。だから屋上に足を踏み入れた人物に気付かなかつた。

その存在は他3人の協力者が敵を引き付けているのを良い事に、ビルの壁をよじ登つた。この存在は自身の「認識阻害」という能力によつて他人にはその存在を一切知られずに目的地たるビルの屋上まで辿り着いた。

見えているのに見えていない、それは「認識阻害」無しでもあり得る事だ。人が背景の中から一つの物だけを見詰める時、その人には背景が認識出来るだろうか。

要するに「認識阻害」は阻害させる対象を意識させないよう、「背景」にする、とう訳だ。

しかし、注目するきっかけさえあれば対象は「背景」から抜け出して「一点」となる……今が丁度まさにその時だった。

不意にアンジュリーナは背中に強い衝撃を感じた。途端に前に飛ばされてしまう。「ひやっ！」

少女らしい声で悲鳴を上げ、体の正面から地面に落ち、腕を体の前にやつて顔が地面に着かない様にし不時着した。痛みは引き、立ち上がり振り向く。

その時には既にアダムが謎の人物に羽交い絞めにされていた。フードに隠れて素顔が見えない。相手の右手に握るナイフはアダムの首に突き立てられ、左手に握る拳銃はアンジュリーナに向いていた。

「……い、一体アダム君をどうするつもりなの?!」

「俺が命じられたのはアンダーソンの奪還もしくは破壊。こちらは出来れば奪還で済ませる事を望んでいる。だがいざとなれば破壊も認められている」「や、止めて！」

「ならば差し渡せ」

アンジユリーナは言い返せなくて黙り込んでしまった。

（そんな、アダム君を助けたいのに……渡してしまつたらきつと酷い目に……でも断れば今殺されてしまう……）

少女が迷い固まる中、少年の方に迷いは無かつた。

（抜け出そう）

そう考へている時には既にアダムは左足で地面を蹴つていた。

上体を後ろに逸らす事でナイフから離れ、羽交い絞めされている腕を支点に縦に回転し、拘束から外れた。

“目標物”の思いがけない行動に不意を突かれた人物は手を離してしまい、“目標”から振り下ろされるオーバーヘッドキックを、両腕を交差させガードした。

蹴りのダメージは無かつたが勢いを殺し切れず後退する。アダムは蹴りを放つた後体の回転を持続し左足から着地した。

（情報と違う。「覚醒」はまだと聞いていたが……）「どうやらお前が逆らうか」相手は左手の銃をサッとアダムに向け、引き金を引く。

（分かる）

少年は音速の10倍で迫り来る“不可視”的弾丸を“感じて”いた。認識よりも先

に体が動き、頭を貫く軌道だつたそれはアダムの左方に逸れていた。

(やはり「覚醒」している)

(勝てる。いや、勝つんだ)

状況の急変によってオロオロしているアンジユリーナを他所に2人が向き合つた。

8 : Change

コーヒーを飲み好きな医学雑誌を読みながらチャツクはビルの一室のクツションの効いた椅子の上でくつろいでいた。

「実に平和なものだな。つい夜中まで戦闘があつたなんて嘘みたいに静かだ」

(実に大変なものだな。常に気を緩められない……そういうえばチャツク先生は「顕微視」

は出来ても距離が離れれば探知能力に適性が無かつたんだつた……）

心中で感嘆しながらでもハンは一切気を緩めなかつた。表情にすら出ていないだろう。

それは相手の女性も同じだつた。

（この男かなり厄介だわね……あとブラウンとティラーは上手くやつてるか……）

咄嗟にハンが指を尖らせた手を次々と叩き付ける。女が慌てて両腕を交互に回して防御する。

「言つとくけど、あたし悪いけど北派なんだよね。勝負は蹴りで決まるからさ」

「いいや、手の技が七、足の技が三、だ。無駄なく最小限な拳こそが勝つ」

「うるさい！」

体勢を低くし、連撃から逃れた女はそのまま右足で下段回し蹴りを放つ。だがハンは後ろに1歩下がるだけでそれを躱した。

回転の勢いを上げると同時に蹴りを更に放つ。それをハンは体を逸らしたり後ろに下がるだけで的確に避けてみせる。

右回転の左回し蹴りを屈んで避けたハンは左回転の右回し蹴りを女の背中に決めた。

よろけた女は壁に手を着き、すぐに戻ると攻撃を再開する。

指によつて急所を狙つた連撃をハンは最小限の腕の動きで防ぐと同時に、攻防一体の

動きで相手の行動を抑え込んでいた。

時々足元を狙った蹴りは腰を落として踏ん張る体勢になる事で受けてもバランスを崩さず平然と立つて いられる。

拳を打つては引き戻し打つては引き戻しを繰り返す。

女の右腕を左手で下に払い、右手を腹に突き出す。女が拳を防ごうと左手を右にやつて防ぐ。この時女の両腕は交差し、内側の右腕がもう片方に抑えられ動かない状態だった。

しまつた、と思つた時にはハンの左フックが女の側頭部を捉えていた。

痛みに耐えながら後退し、十分に距離を取つたところで向き合つた。

「クソッ！」（こうなつたら使うしか……）

女性らしくない叫びを上げる中、内心では追い詰められて いた。巻き付けられている首輪を意識し、「エネルギー」を流し込んだ。

その変化はハンにも見えた。ファッショント思つれていたので気にもしなかつた首輪が突然「エネルギー」を帯びた。同時に女が空間から吸收する「エネルギー」がその勢いを増した。

（あの首輪、「エネリオン」吸収を活性化させるのか?! 管理軍が開発中と噂には聞いた事はあるが……）

一方で女は思念送信通信機を使い、

(あたしはこれ以上無理。先に使う)

『了解』

『分かった。では少しでも攢乱させろ』

通信を終えると目の前の相手目がけて突進した。

踏み込みの度に床が割れ足跡が出来る。完全に不意を突かれたハンに向かつて正面から衝突する。

衝撃を受け止められずハンは後ろに吹き飛ばされてしまう。体勢を整えようとした矢先、背中に堅い感触、後ろにあつた壁が壊れた。

壁を突き破りビルの外に飛び出してしまつたハン。自分が出て来た壁の破れ痕から女が飛び出した。

落下するハンに追い付いた女は更に降下キックを命中させ、一体となつてコンクリートの地面へ向かつて落ちる。

数回のレースを終えたりョウは賭け金を受け取り皆に見せびらかした後、のんびりしようかとあてもなく歩き始める。

「リョウ、後で昼飯食いに行かねえ？ あ、金は勿論勝者が払うつて事で」

「えー？ 敗者が勝者に奢つてもらうなんて言い度胸だな」

「……まあ良いけど。後「軍」の仲間にも奢る約束したんだよな」

どうでも良いが、地球暦0017年現在の貨幣は管理軍でも反乱軍でもドルを使用する。元々西暦2030年代から50年代にかけて経済的グローバル化が飛躍し、関税廃止や経済格差減少等あらゆる出来事を起こした。貨幣統一化もその一つに当たる。ちなみに1ドルの価値は地球暦に入つてから調整され、西暦2000年初頭と物価が同等になつてゐる。

「そういやお前最近の軍での調子はどうだ？ 活躍してるか？」

「まあな。上司がうるさいけど。ストレス発散に管理軍の前線部隊をぶつ壊してやつた」

「ハハハ、お前らしいや。程々にな。しかし良いよなあ、音速で走れる力とか俺も持つてみたいぜ」

「そうでもない。こんな力あるだけ不便だぜ？」

「例えば？」

「そうだな……俺がレースする時車のスピードが物足りなくなつちまうんだ」

リヨウの冗談に先程まで車を並べ競争していた2人は笑い合っていた。

「ところでお前、レックスはどうした？」一緒に来てただろ？」

「ぬつ？ ……本当に、何時の間に。まあ良いや、どうせ来るだろう」

これでこの話題を打ち切ろうとしたその時、廃墟群を駆け抜ける存在が一つ。音速を超えるスピードのそれをリヨウだけがその目に捉えていた。

「わりい、メシまで少し掛かりそうだ」

「ふあつ？」

そう言い残すとリヨウは地面を蹴り、1秒後には隣に居た人物の視界から消えていた。

空中で大きく旋回しつつ銃弾を避けながらレックスは右手を出した。
掌から「エネルギー」の放出。「エネルギー」が空間中の空氣に触れ、反応する。的確
な方向性を持つた運動エネルギーが大量の空氣分子に与えられ、風が巻き起こる。
風は細い刃となつてサングラスの男を襲う。男が避けようと体をスライドさせるが、
鋭い気流は男の服を引き裂いた。

空氣はレックスに操られ、その勢いや量を増やす。次々と男に切り傷を作り上げる。
「喰らはん木偶の坊！」

掛け声と同時にレツクスが銃の引き金を引く。動きを制限された相手へ次々と命中する。

それでも相手の男はサングラスの裏に隠れた顔を余裕を持つていてる様に歪ませもない。

「全然痛がつてないじゃねえかお前」

(まだ使うには惜しいな)

男は攻撃を喰らいながらもレツクスに向かつて銃を乱射し、レツクスが飛行しながらそれを避ける。

不意に男が飛び上がり、レツクスへ右足で膝蹴りを仕掛ける。対するレツクスは相手に対し向かい風を起こし、更には銃を乱射する。

銃弾を喰らつても相手は痛覚に表情を変えない。蹴りの体勢のまま逆風の中を逆らつてみせる。

サングラスの奥の瞳がギラつと睨んだ。その時は既に互いの距離は1メートルを切っていた。

右膝を後ろに戻し、代わりの左足を突き出す。意表を突かれたレツクスは頭に一撃を喰らわされた。

背中から固まつた砂の上に落下し、相手がスタッ、と軽く平氣そうに着地した。

レックスに追撃を掛けようと相手が距離を詰める。抵抗すべくレックスは地を背にしたまま蹴りを放とした。

だがその必要は無くなつた。相手が急に立ち止まつたのだ。

直後、男の顔を鋭い物体が掠めた。顔に切り傷を作り、サングラスが取れ落ちた。

「レックス、大丈夫か？」

中性的な喋り方だが、その声は紛れもなく女性のものだつた。いや、声だけではなく姿も完全に女性だ。

「クラウディア？」

「如何にも。妙に意図的な「エメリオン」がこの辺り一帯に感じられたものでね」

クラウディアと呼ばれた女性は長い銀髪を風に揺らし、サングラスの男に突き出した細身のサーベルを引き戻し、レックス側へ引き下がつた。

本名クラウディア・リンドホルム、25歳。女性としては高く身長175センチメートル。銀髪や白い肌、シャープな顔立ちは北欧系だろう。腕を組んだ様はどこか高慢というか自信家の様なイメージがある。

「おーい！ 待てつたら！」

「あの馬鹿やつと来たか……」

レックスはこちらへ駆け寄るリョウの声を聞いた直後、呆れるクラウディアを見てや

れやれ、と手を振った。

「全く、何処で油を売つてたんだお前は！」

「るせえ！ 2000ドルも手に入つたんだよ！」

「お前は遊ぶ事しか考えないのか！」

「お前だつて何時も俺を叱りやがつて！」

「二人とも黙れよ！！！」

いがみ合う二者の間をレツクスが割つて入つて更に大声でなだめた。

「ほらリョウ、レツクスはお前よりずつと信用出来るぞ。見た目は整つてゐるし、お前より話は分かるし聞き分けも良いし、何よりメリハリが付いている」

「知るか。俺にはギラギラした銀髪に長身で傲慢な胸のでけえ女の方が態度悪くて信用出来ないね」

パシン、と平手がリョウの頭を突つ込んだ。

「デリカシーの一つも無いのかお前は！」

「お前だつて……」

「もう良いから！！！」

またしてもレツクスは大声で怒鳴る羽目になつた。

「それよりあの敵をどうするかだろう」

「たつた1人じやん。それにお前1人だけでも十分じやね?」

「油断はならんぞ2人とも」

サングラスの取れた男は髪色と同じ茶色い目で3人を観察している。サングラスの裏にある顔はこれといった特徴も無かつた。

(これ以上は厳しいな、使おう)

装着した首輪に手を触れる。長身の男は自分の体に無理矢理「エネルギー」が吸い寄せられる感覚を味わっていた。

「何……」

何だ、とクラウディアが言い掛けたその時、

相手が途轍もないスピードで突進し体当たり。1か所に集まつた3人がバラバラの方向へに吹き飛ばされた。

予想していかつた出来事に3人とも驚愕の表情を浮かべる。

それぞれが地面に足を着けた時、大柄な男は猛スピードで逃走していた。

「俺が追う!」

走るスピードにジェット気流を重ね、追跡を始めるレツクス。

人相をフードで隠した暗殺者に対し、アダムは右半身を前に右拳を胸の高さに上げる。左半身は何もしておらず自然のまま。

相手は唐突に左手の拳銃を向け、引き金を引き銃弾を発射する。音速の10倍、1秒で50発。

常人にはそもそも目に留まる事も無い筈の銃弾をアダムは「感じ」ていた。その動きに合わせ体をスライドさせる。それだけで銃撃が避けられた。

アダムは地面を蹴つて後退していく自身を逆に方向転換し、向かつて来る銃弾を着実に避けながら一気に距離を詰めた。

(分かる)

駆け込みをプラスした真っ直ぐな裏拳気味のジャブが相手の顔面にクリーンヒットした。

よろめき3歩下がった相手は銃を服の下に隠し、ナイフを持つ右手を体の前に掲げた。近寄り、刃を上下左右へ振り回す。

それをアダムは相手の手首を掌で押さえて全て防いだ。

少年の頭部を狙つたツツク気味の刺突に対し、左拳を相手のナイフを持つ方の肩に叩き付け、腕が引っ込められる。

向こうが右腕を出せば左拳で打ち止め、左腕は右拳で、右足を出して来れば左足で蹴り止め、左足は右蹴りで。

打つてくる前に止める。しかも上腕や腿は重要な腱や筋肉があり、打ち込まれる痛みもある。暗殺者がフードの中で瞬きをしたのが見えた。

暗殺者は苦し紛れにサマーソルトキックを繰り出す。突然だったがアダムは上体を後ろに倒して避けた。

相手は宙返りと同時に後退し、足を地に着けた時点で拳銃を左手に持っていた。

観戦していたアンジュリーナは変化に気付いていた。

「勝っている。でも……」

目の前の戦闘を傍観しているアンジュリーナは、『今まで』はアダムが敵対する人物に負けないか心配だった。（手助けもせず傍観していたのは、いざとなつた時に「中和」で相手の動きを止めようと思つていたからである。また、「中和」の際にアダムの動きを止めてしまう懸念もあつた）

だが今は考えが180度違つていた。アダムが暗殺者を殺す側に見えた。正確に相手の動きを読み、確実に攻撃を加える。無表情が一層怖く見えた。

残酷さに満ち、慈悲が存在しない。例え命を奪おうとする相手でもアンジュリーナは気が気でなかつた。

（殺さないで……）

そんな少女の思惑を他所に、アダムは向かつて来る銃弾を躊しながら呆氣なく相手のすぐ傍まで辿り着いていた。

正面からのナイフを持つ手を左前蹴りで弾き、手からナイフが落ちる。それをアダムは手に取つた。

目にも留まらぬスピードで前進したアダムは、その手に握るナイフを相手の左胸に突き刺していた。

Inexplicable

心臓からナイフを引き抜いたアダムはすぐさま刃を下腹部、首、そして額へ、リズム良く突き刺した。

抵抗が無くなり、意思を失った暗殺者は重力のままに地面に伏した。
(終わりか、呆気ない)

アダムは死体に目もくれず振り返った。

その姿こそこの場唯一の観戦者にとつてはショックな出来事だつた。

(そんな、嘘……)

何故死を忌まないのか、それが彼女には不可解だつた。

「どうして殺したの……」

返事はすぐについた。

「なら何故殺さないという選択が出来る?」

「……だつて、人が苦しむのは見たくない」

その不合理な回答こそ少年には不可解だつた。

「損害を考えないのか? ではアンジュ、君なら殺さずにどうするつもりだ?」

「それは……捕らえて捕虜に……」

言い切る直前、死体が謎の発光をした。注目した途端、光が激しさを増幅する。アダムが飛び退き、アンジユリーナが両腕を顔にかざし、2人を熱と閃光が襲う。空気が急激に加熱された事による衝撃波が広がり、発光は止んだ。次に2人が確認したのは、暗殺者の死体が消え、死体があつた場所では熱によつて床が溶けていた事だ。

「……まさか、自爆？」

「だろう。捕虜にする意味も無かつた。被害を被る可能性もあつただろう。しかしトレバーはどうしたのか。さつきから『感じ』ない』話題を捨て去つたアダムに対し、アンジユリーナは落ち込んでいた。何故彼はここまで残酷になれるのだろう、と……」

ビルの壁を突き破つて飛ばされた拳句、蹴りまで喰らつてコンクリートへ叩き付けられたハン。痛みに耐えながら起き上ると、既に敵対していた女性の姿を見失つていた。

周囲を見る限り、破つて出て来たビルと墜落した地点以外には街は無傷だった。

(退散か。あの首の装置、どうやら断続的な使用しか出来ないか身体への負荷が大きいのか、恐らく逃走用だと見た)

市街地のど真ん中に出来たクレーターから出て来ると、集まつて騒いでいる民衆達をどうしようかと片手で側頭部を押さえた。

「待てオラーラ！」

地面を蹴る反作用による加速と、空気を操る事によるジェット機の如き加速を合わせ、早速逃走する男へ追い付いた。

気流を操り、自分の加速ではなく相手の正面から逃げる反対方向へ突風を起こす。

空気の壁に阻まれた男が足を止めた。レックスは逃さず多数の方向から空気の刃を切り付ける。

しかし、男はその刃を正面からぶつかり、ねじ伏せた。傷が無かつた。

アサルトライフル型の銃で更に追撃するが、相手は怯む気配を見せない。それどころかレックスに向かって突進し出した。

速過ぎて痛みよりも驚愕の方が大きかつただろう。レックスが認識した次の瞬間、相手は彼に膝蹴りを決め、それを感じた直後、投げられ地面に勢い良く叩き付けられた。

「何だ?!」

痛みを忘れてレツクスは驚き声を出した。相手は無視して逃走を再開し、やがて見えなくなつた。レツクスとクラウディアが走り着いたのはその直前だつた。

「大丈夫か？」

「何とか」

「何だ今の？ 恐ろしく速かつたぜ。さつきと全然違う」

「分からん。だがあの首に付いていた輪つかからエメリオンを感じた」

クラウディアの心配に無事である事を伝え、リョウの質問に自分の考えを述べた。

「さて、ハンにどう言おう……」

「待て、お前も一緒だ！」

クラウディアは振り向き逃げようとするリョウの襟をぐいと掴んだ。

「ふざけんな！ 折角の休みだつてのにまたかよ！」

レツクスがため息をつき、クラウディアは腕を組んで唸つた。

「分かったよ！ 僕も行けば良いんだろう？」

「ガルシア、ブラウン、共に離脱。派遣した「予備軍」も生体信号が途絶えました」

ポールは指令室で部下の報告にも腕を組んだまま黙っていた。

「……もはやアンダーソンが覚醒したとしか思えん。テイラ―はどうした?」

「現在足止めを受けている様です」

「繫げられるか?」

「出来ます」

オペレーターが肯定と同時に通信を立ち上げた。ポールが即刻マイクの前に立つ。

「テイラ―、作戦中止だが、アンダーソンはお前の丁度上に居る。お前に離脱を命じる代わりに覚醒の確認をしろ」

『了解』

さて、とマイクから顔を遠ざけ、考え事をし始めた。

「アレクソン君どうかね？」

丁度中佐が室内に入つて來た。

「失敗です。アンダーソンは十中八九で覺醒したものだと思われます。現在生存者を撤退させています」

「そうか、残念だ……別に君を責めるつもりは無いが……」

中佐は悩む様に頭を押さえた。

「中佐、別にアンダーソン無しでも「成功」の分析は可能です」

「……それは分かつてゐる。まあ、實物があれば分析に手間が掛からんと思つてな……」
ポールには納得出来る答えだつたが、中佐はどこかぎこちない言い方だつた。

(中佐は何故ここまでしてアンダーソンに拘るんだ？　今は摘出されていても「チップ」を埋めてあつたのなら持ち出されたと分かつた時点で自爆を命じる事だつて出来た筈だ……いや、俺の考え過ぎか？)

トレバーはヘルメットと黒い服装に隠れた相手の変化を見切った。もつともこの変化は一般人には全く分からぬのだが。

(「エネリオン」の量が増えた? 首に何か隠れているな。一種の增幅装置といった所か)

行動も予想外だつた。ヘルメットの人物は突如床を蹴ると飛び上がり、天井を突き破つて外へ大穴を空ける。

不味い、と思つた時にはトレバーもそれを追つていた。ただ、相手の方が圧倒的に速かつた。

アダムがトレバーの気配が消えた事に気付き、アンジュリーナがアダムの残酷性を考え込んでいた頃、

堅い床が破れる音。咄嗟に振り向いた2人。人相をヘルメットと黒い衣装で隠した人物の登場は突発的で2人に考える暇さえ与えなかつた。

ヘルメットの人物は姿を現すとすぐさま服の下から剃刀サイズのナイフを持ち、アダメムに向かつて投げた。

途轍もないスピードで向かつて来るそれを、アダムは避けようとしたが、
(速過ぎる!)

信じるか否かの以前に認識が追い付かない。体を横へスライドさせても刃は突き刺さつて……

次の瞬間、飛翔するナイフが目に見えた。明らかに遅くなつたのが分かつた。

何故かと疑問よりも、今は回避行動を続ける。ナイフはアダムの頬ギリギリを通過した。

今度はトレバーが床に開いた穴から飛び出した。するとヘルメットの人物はナイフ投げの体勢から腕を引き戻した。

アダム向かつて飛んでいたナイフが来たのとは逆方向に戻り、ナイフは相手の手に戻った。

そしてヘルメットから何か意味ありげな視線を送ると、その人物は圧倒的な速さで屋上から姿を消した。

「無事か？」

「ああ」

「ごめんなさい、私はあんまり……」

大人からの質問に少年は無事を伝えたが、少女は苦しみの混じつた声で答えた。

アンジュリーナはアダムに右手を向けていた。そしてもう片方の左手は、彼女自身の下腹部から溢れる血を押さえていた。

「アダム君は、無事？」

「そうだが」

「良かった……」

傷付きながら安心した様に言つた少女は地面に崩れた。

「チャック。屋上に來い」

通信機を耳に当て早口で言つたトレバー、返事は聞かなかつた。
 （まさかもう1本投げられていたのか？　まるで分からなかつた……それよりもだ）「あのナイフ、君が減速させたのか？」

「そうよ」

「何故自分を助けたんだ？　君自身の事はどうでも良いのか？」

「私が人を、貴方を、アダム君を助けたいからよ」

少年に訴え掛ける様な言い方だつた。納得出来なかつた。不可解だつた。何も理屈が無いのが分からない。

丁度その時、チャックが慌ただしく階段から走つて屋上に辿り着き、そしてアンジュリーナの負傷箇所に手を当て始めた。

『アンダーソンから一定以上のエネリオンを感知』

「ご苦労、戻つて来い……申し訳ありません中佐、また失敗です」

「そう気にするな。私の我儘みたいなものだ」

中佐、正確にはポール・アレクソンから中佐と呼ばれている人物、は残り1人が離脱し、少数によるアンダーソン奪還作戦が完全失敗したと知ると、落胆の表情を浮かべた。そして彼は1人で部屋から出た。

廊下には誰も居ない。このまま自分の部署に戻るとしようとした。

中佐、文字通り階級は中佐だが、ある事情で彼は時に少将並みの権力を發揮する。この作戦も彼がポールに命じたものだ。

本名、クリストファー・ディック。45歳。身長は175センチメートル、と白人にしては低い方の部類に入る。生まれつきの派手で年に合わない赤毛が悩みだが、短くしているだけで彼には染める選択肢は無いらしい。

クリストファーは2つの事を考えていた。1つは逃げる様に足早に移動する事。そしてもう1つ。

(覚醒した……じゃあ“アダム”は目覚めたのか？　ならば反抗的な行動も理解出来るが、まだ説明不足だ……)

廊下には彼以外誰も居なかつた。

Participation

新素粒子「エネリオン」、それは西暦2050年代かそれ以前、管理軍が発見されたと言われている。

名前の由来は、それがあらゆるエネルギーへ自在に変化出来る、という性質を持つ故だ。

宇宙空間のどこにでも存在し、それ自体に質量は無く、エネリオン 자체がエネルギーを持つてゐる訳でもない。

だが、「変換」する事で条件に合わせて他のエネルギーに変換可能だし、法則を当てはめるにおいて概念的な質量は存在する。

「まあその話は面倒だし、先端分野だからすぐに理解するのは難しいだろうし、後にしておいて、ここまで分かつたかい？」

「分かつた」

ハンの説明にアダムは領き答えた。

アダムが屋上で暗殺者と戦いを繰り広げた時から1時間と少し。あの戦闘後、アンジュリーナはチャックに治療されて即座に回復し、アダムはトレバーから「良くやつた」

と言われた。そしてトレバーから目の前に居るハン・ヤンティという人物を紹介され、この東洋人からあらゆる事を教わつていて。

「そして、エネリオンは『普通の人間』には感じる事なんて出来ない。でも稀にそれを感じる事が出来る人物が居る」

「自分もそうなのか」

「その通り。エネリオンを感じし、更にはそれを吸収し変換しエネルギーに変える、それが出来るのが『僕ら』『トランセンド・マン』だ」

「エネルギーへ変換……具体的にはどうやるんだ？」

トランセンド・マンは「能力」行使する時、自動的に空間からエネリオンを吸収する。体表で吸収したエネリオンは脳へ集まり、そこで構造情報を変換する。ただし、変換されたエネリオンはこの時点では、まだエネルギーではない。変換されたエネリオンは作用させる身体の部位や神経の末端部へ送られる。

「ここ」がちょっと面倒だけど、分かりにくかつたら言つてくれ

ハンはそう告げるとアダムが頷くのを確認し、話を再開した。

トランセンド・マンがエネリオンを使用するに当たつて、大きく分けて5つの能力がある。速筋力増大、遅筋力増大、身体耐久力増大、神経速度増大、そして「特殊能力」。ちなみにこれらを数値評価し、トランセンド・マンとしての能力をも測定する。

前者4つは脳で変換されたエネリオンを各身体部位に送り、意識的・無意識的両方の場合で発動できる。具体的に変換するのは出力増大、負荷軽減に対する主には運動エネルギーとその他だ。

そして後者一つ、先に言つておけばこれは個人によつて内容が変わる。エネリオンを熱に変えたり電気に変えたり、被りはあるが十人十色とでも言うべきだろう。何故そういった特殊能力が決まるのかは分かつてはいないが。

話を戻せば、特殊能力は他とは違つて意識的に行う能力であり、また行使する場合はエネリオンを手や足といつた神経末端部に送り、そこから体外に放出。そして放出したエネリオンを作用させる対象に当てる事でエネルギーに変換される。

「と、こんな感じだけど……」

「武器を使つている者も居たが、あれもエネリオンによつて強化したりしているのか?」「ああ、何も無ければ決まつた形のエネルギーにしか変換出来ない。その欠点を補うのが『僕達』の専用武器だ」

すると東洋人は何處からか銃を取り出し、見せるなり少年に持たせた。

「この銃は使用者から送られたパターンを持たないエネリオンを吸収すると、この内部に組み込まれた特殊回路によつて『銃弾』に変換する」

「銃弾?」

「具体的には、ある量のエネリオンをある速度で発射し、命中した物体を破壊するエネルギーを与える。エネリオンの加速自体にエネリオンを消費するから弾速を上げても威力は損なわれるし、下げる威力を上げても当たらない」

「待つてくれ、加速にまたエネリオンを消費する、という事だが、質量は存在しないのはなかつたのか？」

ハンが困った様に頭を搔いた。

「そこが面倒な所なんだ……簡単に言えば「疑似質量」なるものがあつて、それが運動エネルギーの法則に当てはまるんだよ……済まないが、これ以上は難しいからストップさせてくれ。その内専門家にでも説明してもらうよ」

「分かつた」

「ええと……エネリオンやトランセンド・マンに関する認識はこれ位で良いと思うけど、質問はあるかい？」

アダムは間を空けず即返答した。

「トランセンド・マンと普通の人間は何が違う？」

「良い所に氣付くね。これも不明な箇所が多いが、エネリオンを感じ・操作出来る以外には大した違いは無いんだ。外見は見ての通り普通の人間と同じだし、DNAだつて0.002パーセント以下の違いしか見つかっていない。身体・器官・組織・細胞の構造だつ

て違ひは無いんだ。強いて言うなら、DNAのほんの少しの違いがトランセンド・マンとしての能力を持つていると考えられているけど、詳しく述べても解説されていない「そうか……科学は物事を次々と解決するが、それと同時に疑問を作り出している様だな」

「良い事を言うね。僕には、科学の研究が最終的に何処へ行き着くなんて想像も付かない……」

話が逸れてるのでハンはここらで戻す事した。

「アダム、僕達反乱軍の事は簡単にアンジュリーナが説明したと言つていた。どの程度の認識だ？」

「……地球管理組織の管理社会化を阻止する、と」

「もう少し深く言えば、僕らが管理社会化を恐れている一番の要因は、人類が精神活動を行えない事だ。管理社会は確かに合理的で安全ではある。でも進歩が全く起こらない。人類は不安定になる事で成長し、発展する。それは動物なら必ず生まれ持つ精神に起因している。でも精神は時に人類を滅ぼしかけた事すらある。それを踏まえて管理社会を実現しようとしているんだろうけど……」

ハンは言葉を切った。

「ここからが大事だ。特に人類が持つ精神は人類自身の長所であり、短所である。短所

を無くすのは良いが、それと引き換えに人類は長所を失つてしまう。物事は何でも表裏一体だ。二つのどちらかが突出しても欠けも成り立たない。ならば精神を持たない人間は人間と言えるのだろうか」

少年はきよとんとしていた。その一方で聞き入つていた。

「……」これは僕ら反乱軍を生んだ人物の言つた言葉だよ。これこそ僕らに人間が人間たる理由だと思う。僕だつて人が人間らしくあるべきには精神が不可欠だと思う。「人間」として「生きる」事、これが僕らの目的だと思つてくれ」

「人間として生きる……」

アダムの意識が現実から遠のいた。

無機質な白い廊下を走つている。

逃げたい。だが追われる。

逆らう。だが鎮圧される。

この間はほぼ一瞬。現実に戻つた。その時、アダムはハンの意見を受け入れていた。共感していた。

「大丈夫かい？」

黙つていたアダムの顔色を窺つていたハンが訊いた。アダムは無言で頷き、肯定を示した。

「アダム・アンダーソン、君に訊きたい。この考えを理解出来るかい？」

「ああ、出来る。受け入れられる」

「そして頼みたい、アダム・アンダーソン。どうか僕ら反乱軍に加わり、協力してくれるだろうか？ その代わり、僕ら自身君の助けになりたい」

ハンは友好的な態度を変えていなかつたが、口調は緩やかさが抜け引き締まつていた。

「協力したい……自分は管理軍から逃げたかつた。何故か覚えている。自分の意思を管理軍は拒絶した……だが、反乱軍は違う。自分を受け入れてくれている」

（逃げていた……アンジユリーナは廊下に捨てられた様に横たわっていたと言つていたが、恐らくこれが）「……アダム、この先厳しい事は避けられないだろう。それでも僕らに加わってくれるかい？」

「勿論だ」

ハンが椅子から立ち上がり、アダムに向かつて右手を差し出した。アダムも立ち、同じく右手でハンの手を握る。握手する。

アダムの心の半分は晴れていた。しかしもう半分は疑問に曇らせていた。その様子を外側から判断する事は出来ない。

（どうして自分は逃げたかつたんだ？）

アダムがハンと共にビルの一室から出て来ると、廊下には見慣れた人物達の姿があつた。

「おっ、話済んだか。その調子だと良い事でもあつたか」

ハンに親しく話し掛けたボサボサな茶髪で体格の良い男性は、隣のアダムへ目をやつ

た。
「俺はリョウ・エドワーズ。なあ、これ食うか?」

リョウは初対面でもフレンドリーに話し掛け、手に持っていた紙の包みを、アダムの

有無を言わせる前に渡した。

「スペアリブ、美味えぞ。特に脂肪が良いんだ。直火だから油が適度に落ちてるし、焦げも良い。女のケツみたいなもんだ、大き過ぎても小さ過ぎてもダメで……」

リョウの語りはここで中断された。背後からチヨップがリョウの頭を叩いた。

「誰の尻だつて？」

「別にお前のとは言つてない。お前はなんでそんなデケえんだよ」

リョウは後ろから自分を叩いた銀髪長身の女性の体つきを見ながら言い返した。服の上からでも分かる大きさの胸と尻、引き締まつたウエスト、そして……バシツ！

「お前は何で何時もそんな事ばかり考える？ そうしないと生きていけないのか？」

「少しは加減しろよ。ジョークは生きがいだぜ。呼吸しなきや生きていけないと同じだ」

「かといつて初対面の者に冗談、しかも下ネタなんて言うか？ ついでにセクハラだぞ」

口論する2人を呆然と見守るその他。その中の1人の少女がアダムへ寄つて來た。

「あの銀髪の人はクラウディアさんだよ。何時もリョウさんとあんな感じなの」

「……」

アンジユリーナが説明するが、アダムは何も言わない。目に映る風景に呆れているのか、それとも違うのかは分からぬが。

喧嘩する2人に黒髪の白人が疲れてやる気無さそうに仲裁に入つた。

「2人ともまたしようもない事で揉めるなよ。夫婦喧嘩は人前でやらんてくれや」「誰が夫婦だ！」

ところが冗談を利かせた台詞は2人を止めるどころか黒髪の白人も喧嘩に巻き込んで嘆いたのはハン。

「あの人ガレツクスさん。毎回3人はあんな感じだけど……」

「……」

「レツクス、本当に毎度、苦労さんとしか言えないよ……」

アンジユリーナが何時もの事の様に呆れて言い、アダムはまたも黙つてゐる。その隣で嘆いたのはハン。

「本当はもつと居るけど、他は今の所不在かな。そういうやストーン先生やトレバーも居ないけどまあ良いや。改めて紹介しよう、これが『僕ら』だ」

「……」

ハンがアダムへ言うが、アダムはまだ口を開かない。

氣付けば口論していた3人は、知らぬ間に笑い合つていた。

「……大丈夫、私達は必ずアダム君を受け入れるから」

アンジユリーナに言われたが何も言わなかつたアダム。しかし固い表情が幾らか和

らいだ様に見えた。

「それより、食えよスペアリブ。ブリトーもあるぞ。俺が全部金出したぜ」

「あつ、さつきまで金払いたくないとか言つてたクセに」

リョウが提案し、クラウディアが乗つかる。アダムは言われた通り渡された包みの中の肉を齧つた。

「美味い」

連鎖反応の如く肉を食い続けるアダム。それを見て一番嬉しそうだったのはアン

ジュリーナだった。